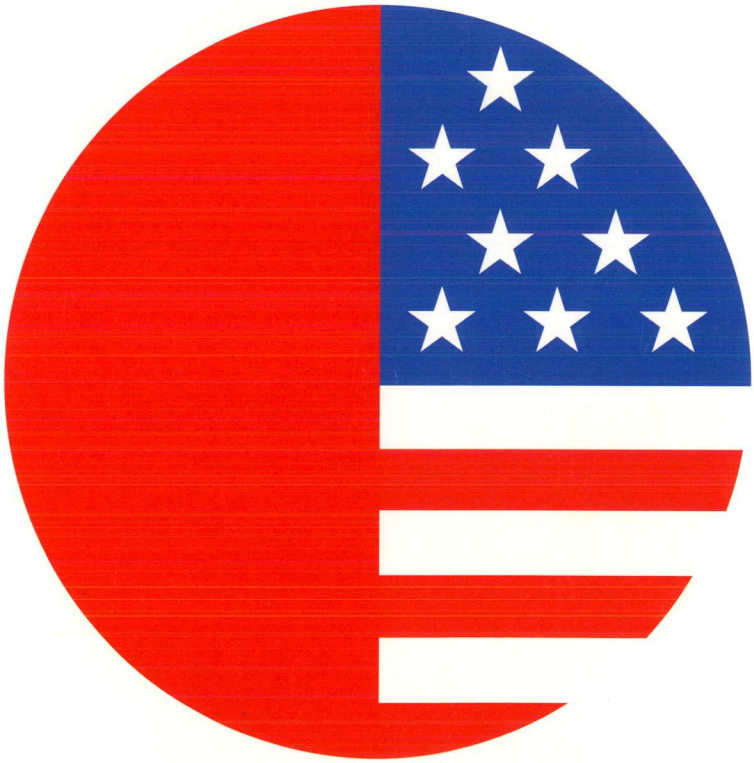
第62回日米学生会議
日本側報告書

The 62nd Japan-America Student Conference

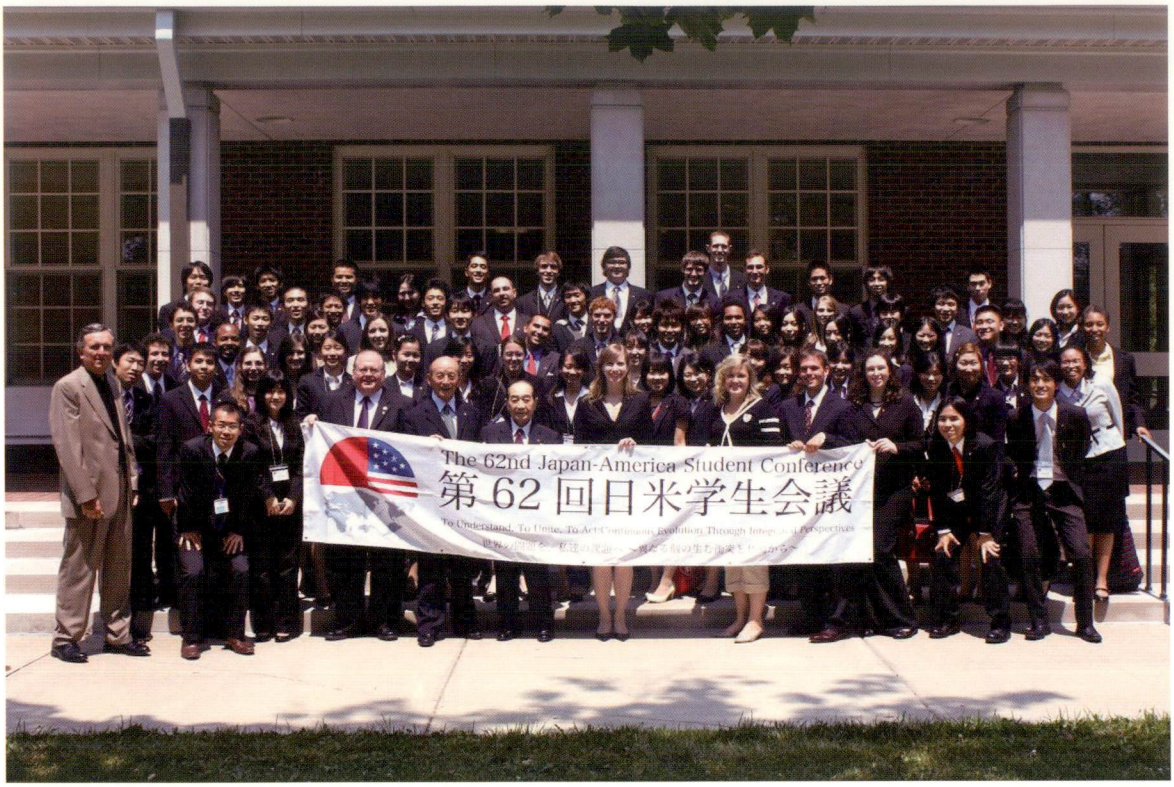


世界の問題を、私たちの課題へ

～異なる個の生む衝突と共鳴から～

To Understand, To Unite, To Act:

Continuous Evolution through Integrated Perspectives



開会式後、アーラムカレッジにて

第62回日米学生会議 全参加者

第 62 回 日米学生会議 日本側報告書

目次

序　章　日米学生会議概要 …… 3
日本側実行委員長挨拶 …… 4
日米学生会議の歴史 …… 5
本文中の略語について …… 6

第１章　第 62 回日米学生会議概要 …… 7
第 62 回日米学生会議概要 …… 8
参加者名簿　日本側 …… 10
アメリカ側 …… 11
メディアへの掲載 …… 12

第２章　事前活動 …… 13
第６１回日米学生会議報告会および講演会 …… 14
立命館大学講演会および第６２回日米学生会議関西説明会 …… 14
第６２回日米学生会議選考会 …… 14
春合宿 …… 15
英語ディベートワークショップ …… 18
防衛大学校研修 …… 18
学生有志活動　沖縄研修 …… 19
直前合宿 …… 22

第３章　本会議・サイト活動 …… 23
リッチモンド（インディアナ州） …… 24
ワシントン D.C. …… 30
ニューオリンズ …… 35
サンフランシスコ …… 40

第４章　分科会活動 …… 45
学生と社会参画 …… 46
２１世紀における日米の教育 …… 51
安全保障と日米 …… 58
社会起業家 …… 66
新興国と地球環境問題 …… 74
地域再生 ― 都市、農村が生き残るために ― …… 80
国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ …… 88

第５章　参加者の声 …… 97

第６章　第 63 回日米学生会議概要 …… 123

第７章　日米学生会議にご協力いただいた方々 …… 127

序　章

日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶……4
日米学生会議の歴史……5
本文中の略語について……6

第62回日米学生会議実行委員長挨拶

第62回日米学生会議実行委員長
安川皓一郎

新日米安保50年という節目の年に開催されたアメリカでの本会議からは、アメリカにおける日本の姿、アメリカ在住の日本人の方々が危ぶむ日本の若者とその未来など、「日米関係」を語るその前に「日本自身の存在とその未来」を真摯に考える必要があるのだと感じさせられた。

それを踏まえ、これからの時代を創る者として改めて、我々の据えた「世界の問題を、私達の課題へ」というテーマには全ての始まりがあると考えた。近年内向きと称される日本の学生が多いと言われるが、その原因はそれぞれの学生の視野の狭さであり、次代を担う「責任」への認識の欠如であると考えられる。経済状況の悪化をはじめとした雰囲気の中で希望を持って前へと進める学生が少なくなっている状況は、まさに日本自身の未来に関わる問題だ。そのような中で異なる文化、背景の学生70名が集まり1ヵ月間共に過ごし、様々なテーマについて「未来を見据えて」それぞれの価値観を反映させながら率直な対話を行う経験は、今の世界と真摯に向き合う大変良い機会となった。

「世界の問題」として我々が扱ったのは、各分科会テーマをはじめ、「Next 50」の日米関係、メキシコ湾原油流出問題、沖縄基地問題、自然災害と地域復興、第二次大戦中のマイノリティーなど多岐に渡る。本年はこれらのテーマについて、現場の最前線を知る人々から学んだ後に、必ず学生同士での自由で率直な対話を行うことを徹底した。このプロセスを通じて、考えるためのきっかけを得て、学生達が自ら考えていく姿勢を身につけていった。そして会議が中盤に差し掛かるころには、我々が与えていないテーマについても参加学生が主体的に興味ある問題につき、プログラムとして用意されていないながらも同じ興味を持つ学生と、「共に考える」場を自ら作っていた。受身にならず、自ら「世界の問題を、私達の課題へ」と落とし込む姿勢が多くの参加者に最終的に浸透していたのは私達の目指していた目標そのものである。

本年の日米学生会議では、「Challenge」という言葉を多くの参加者が口にし、それぞれの個が自分自身の異文化交流の中での課題に挑戦し、その上で「私達」として様々な「世界の問題」を共に考えるという挑戦を繰り返した。異文化コミュニケーションの壁や、集団での生活の中でのフラストレーションを初めとした一人一人が乗り越えるべき壁、さらに、単なる会話ではない建設的な対話を行うための多くの苦労を全ての学生が経験した。その過程では挫折を感じる者も多くいたが、それぞれが助け合いながら壁を乗り越えていく様子は多くの記憶と絆を生んだ。

なぜ今「日米」なのか？と問われることの多い本プログラムであるが、人と人の繋がりと同じように国家間の信頼関係も築き上げるのには長大な時間を要するものの、途絶えるにはその繋がりを断ち切るだけで済んでしまう。学生達の1ヵ月間の真摯な向き合いの姿勢を通して、国家間関係を支える人と人の繋がりの重要さ、向き合うことの大切さを両国に伝え続けていく場としての日米学生会議の存在価値を見出すことが出来た。

最後になりましたが、第62回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、準備段階並びに本会議でご協力賜わりました講師の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、ISCの皆様、そして温かく現役学生の活動を支えて下さった会議OB・OGの皆様、その他様々な形でご支援、ご協力を頂いた全ての皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生教会(日本国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名(うち22名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国からの学生を招く事が不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみでの開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側参加者が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から留学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形での会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者としての責任を取ることで会議が再開されることが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、

米国においても戦前の参加者によりJASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC, Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側支援団体であるJASC, Inc.はISC, Inc. (International Student Conferences)と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

本文中の略語について

JASC　（ジャスク）	：日米学生会議(Japan-America Student Conference)の略。
JASCer　（ジャスカー）	：日米学生会議参加者を指す。
ISC, Inc.	：アメリカ側主催団体であるInternational Student Conferences, Inc.の略。
EC	：実行委員会、または実行委員Executive Committeeの略。
AEC	：米国側実行委員会American Executive Committeeの略。
JEC	：日本側実行委員会　Japanese Executive Committeeの略。
デリ、デリゲート	：日米学生会議参加者、Delegate。
ジャパデリ	：日本側参加者。
アメデリ	：アメリカ側参加者。
アラムナイ	：日米学生会議の過去の参加者、Alumni。
サイト	：本会議開催地の意味。
RT	：参加者がいずれかに必ず帰属する分科会のこと。Round Tableの略。
リフレクション	：参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。

第1章

第62回 日米学生会議概要

第62回日米学生会議概要…… 8
参加者名簿　日本側……10
アメリカ側……11
メディアへの掲載……12

第62回日米学生会議概要

「世界の問題を、私達の課題へ　～異なる個の生む衝突と共鳴から～」

－ To Understand, To Unite, To Act

: Continuous Evolution through Integrated Perspectives －

日米学生会議、それは異なる個が集まり、様々な体験をもとに「共に考え抜き」、そして「衝突と共鳴」を繰り返す場である。第62回日米学生会議は、この二つを重要なコアとして1ヵ月間の活動に取り組む。

2009年、オバマ大統領は就任演説で「新たな責任の時代」というメッセージを世界に発信した。そのメッセージの中で彼は、我々に全世界の一人一人の個人が社会に対して確かな責任を負う時代の到来を説いていた。それでは今、学生である私達の責任とは一体何なのであろうか？それは未来の担い手として、今ある複雑な世界の問題を「自ら解くべき課題」として捉え直し、真摯な姿勢で「共に考え抜く」ことだ。学生である今だからこそあらゆる縛りを超え、異なる背景と考えを持つ個人が自由に意見を表明できる。そして誰にも縛られない本音の対立から逃げないことで、未来を作る「絆」が生まれる。これが「衝突と共鳴」である。

第62回日米学生会議はまず、なぜ今「日米」なのかという問題を共に考え抜く。日米関係の基軸となってきた日米安全保障条約改定50周年を迎える2010年。その目前に、日米両国では歴史的意義のある政権交代が起きた。同時に世界レベルでは、金融危機、東アジア安全保障等、様々な問題の中心に両国はいる。日米を取り巻く状況が大きく変わりだした今、いかに両国は未来を志向して行くのか？それは直接、これからの「日米」学生会議自身の意義という参加者が真摯に考えるべき課題ともなるだろう。

アメリカ開催の第62回日米学生会議では、リッチモンド、ワシントンD.C.、ニューオーリンズ、サンフランシスコの4都市におけるフィールドトリップや、ホームステイなど様々な経験を通して、新たな問題意識が両国学生に生まれる。あらゆる問題を考え抜く1ヵ月間が、全ての参加者の人生へのインパクトとなることを期待している。異なる個が「新たな個」となる最初の一歩として、互いに考え抜き高めあう“Life Changing”な1ヵ月を、第62回日米学生会議は全員では創り上げていく。

【主催】
財団法人国際教育振興会
【企画・運営】
第62回日米学生会議実行委員会
【会議開催期間】
2010年7月26日～2010年8月21日
【事業開催期間】
2010年4月1日～2011年3月31日
【開催地】

各開催地での滞在期間は約1週間となり、それぞれがサイトテーマの下で運営される。サイトテーマとは、開催地ごとに実行委員の準備するプログラムに共通する「問題意識」を明文化したものである。これにより、初めてとなる多くの体験の中で混乱しがちな参加者達に、持つべき問題意識の指針を示すと共に、より「学び」の姿勢を取りやすくすることを目的としている。第62回日米学生会議では以下の4都市を巡る。

第1開催地 ≪ Richmond, Indiana ≫
第2開催地 ≪ Washington, D.C. ≫
第3開催地 ≪ New Orleans ≫
第4開催地 ≪ San Francisco ≫

【本会議におけるプログラム】

【分科会 (Round Table)】

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生が、本会議期間中を通じて議論を重ねる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質向上を目指す努力が続けられる。なお、第62回会議における分科会は以下の通りである。

(1) 学生の社会参画
　：Empowering Today's Youth: Overcoming Challenges in Society
(2) 21世紀における日米の教育
　：Revitalizing Education
(3) 安全保障と日米
　：Security, Military and Peace: The United States and Japan
(4) 社会起業家
　：Social Entrepreneurship: The Power to Transform
(5) 新興国と地球環境問題
　：Spreading Environmental Awareness in Industrial Developing Nations
(6) 地域再生 ―都市、農村が生き残るために―
　：Sustainable Regionalism: How Can Urban Cities and Local Communities Coexist?
(7) 国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ
　：The Role of National Identity in the Globalizing Society

【Field Trip】

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、議論をより現実的視点から行うための礎とする。

【Special Topics】

限定された議題を扱う分科会とは異なり、参加者が個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視点から議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

【Conference Wide Reflection】

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者と思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

【Forum / Final Forum】

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交えたパネルディスカッションなどを通して学生のみでのディスカッションとは異なる視点から知識を得る。また、ファイナルフォーラムでは分科会の成果の発表を行い、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者と共有することによって、第62回日米学生会議の成果を社会に発信することも目的としている。

第62回日米学生会議日本側参加者

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
安川 皓一郎＊	早稲田大学	法学部	4年	—
加藤 梓	慶應義塾大学	総合政策学部	3年	EDU
大宮 透	東京大学	工学部都市工学科	4年	SR
坂田 奈津希	東京大学	法学部	3年	YOUTH
杉本 友里	京都大学	総合人間学部	4年	NID
高田 修太	東京大学	工学部社会基盤学科	3年	SE
高橋 央樹	一橋大学	商学部	3年	ENV
中村 真理	東京外国語大学	外国語学部スペイン語専攻	3年	SEC

＊日本側実行委員長

日本側参加者	大学	学部・専攻	学年	RT
新井 良子	昭和大学	医学部医学科	3年	SR
有川 慧	国際基督教大学	一般教養学部アーツ・サイエンス学科	2年	ENV
飯倉 江里衣	東京外国語大学	大学院総合国際学研究科博士前期課程	M1年	NID
井上 聡美	筑波大学	社会国際学群社会学類	2年	YOUTH
大井 芳季	東京大学	経済学部経済学科	4年	ENV
奥谷 聡子	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年	YOUTH
尾崎 裕哉	慶應義塾大学	環境情報学部	2年	SE
郭 ヒギョン	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	3年	SE
片山 直毅	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年	EDU
木本 篤茂	東京大学	法学部	4年	SE
栗原 隆太郎	慶應義塾大学	法学部法律学科	2年	SEC
斉田 英恵	群馬大学	医学部医学科	2年	ENV
齋藤 友理絵	防衛大学校	公共政策学科	4年	SEC
柴田 真也子	一橋大学	法学部	2年	SEC
高橋 亜矢	青山学院大学	国際政治経済学部国際政治学科	2年	SE
竹内 智洋	慶應義塾大学	法学部法律学科	2年	NID
中澤 耕己	東京工業大学	生命理工学部生命工学科	3年	EDU
生板 純一	慶應義塾大学	経済学部	3年	ENV
庭野 啓太	一橋大学	商学部商学科	3年	NID
橋本 遥	京都大学	農学部応用生命科学科	3年	YOUTH
細井 駿	東海大学	教養学部国際学科	4年	SR
松下 マエス	埼玉大学	経済学部経営学科	4年	NID
丸山 綾子	京都大学	総合人間学部	4年	SR
森田 真弓	東京大学	教養学部文科Ⅱ類	2年	EDU
山口 寛明	青山学院大学	国際政治経済学部国際政治学科	4年	SEC
山下 真貴子	宮崎大学	医学部医学科	3年	EDU
山田 晃永	東京大学	文学部言語文化学科	3年	SR
米本 大河	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	2年	YOUTH

分科会の略称　YOUTH: 学生の社会参画 , EDU: 21 世紀における日米の教育 , SEC: 安全保障と日米 , SE: 社会起業家 ,
ENV: 新興国と地球環境問題 , SR: 地域再生―都市、農村が生き残るために― , NID: 国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ

第62回日米学生会議アメリカ側参加者

American Executive Committee

Name	University	Major	Year	RT
Naoki John Yoshida *	Cornell University	Engineering Physics and Economics	2	—
Yudai Chiba	Princeton University	East Asian Studies	4	SEC
Leah Flake	Smith College	Engineering	3	ENV
Mariama Holman	Wake Forest University	Business, Art, and Sociology	2	SE
Diane Lee	Smith College	English, Government	3	EDU
David Myers	SUNY Geneseo	Political Science	2	YOUTH
Ikuno Naka	Wellesley College	History	2	NID
Marie Watanabe	Wellesley College	International Relations	2	SR

* American Executive Committee Chairperson

American Delegates

Name	University	Major	Year	RT
Michael Berlet	Wake Forest University	Liberal Arts	2	SEC
Cameron Bradley	Eckerd College	International Business	2	ENV
Bryan Burns	University of Akron	Mass Media Communications	3	SE
Benjamin Colon	Amherst College	Liberal Arts	2	SR
William Coremin	University of Hawaii, Manoa	Business, Japan-focus	MBA	YOUTH
Ian Cross	Earlham College	History	4	NID
Deidra Denson	College of William and Mary	English and Hispanic Studies	2	NID
Lisa Du	Duke University	History	3	EDU
Ashley Hill	Colgate University	International Relations, Japanese	3	SEC
Yuri Hongo	Bryn Mawr College	Psychology	2	SE
Paul Horak	Duke University	Liberal Arts	1	SR
Sho Igawa	Tufts University	International Relations, Chinese	2	SEC
Daniel Jodarski	University of Wisconsin, La Crosse	Economics, International Studies	3	EDU
Nicole Johnson	Earlham College	English Literature, Japanese	3	EDU
Ryosuke Kobayashi	Harvard University	Government	1	EDU
Carly Lauffer	University of Idaho	International Studies	1	YOUTH
Taylor Luczak	Mississippi State University	Political Science, Asian Studies	3	NID
Henry Luu	Harvard University	Neurobiology	3	SR
Patrick McCurdy	Three Rivers Community College	Liberal Arts	2	SE
Justin Perkins	Carleton College	Liberal Arts	3	SR
Christina Ryu	Smith College	East Asian Studies, Government	3	NID
Kunihiro Shimoji	Saint John's University	Political Science, Economics	1	SE
Dillon Svec	University of Nebraska	International Studies	1	SEC
Weiying Tang	Depauw University	Economics, Piano Performance	1	YOUTH
Kseniya Vaynshtok	University of Wisconsin, Madison	Political Science	3	ENV
Alex Yu	Cornell University	Applied and Engineering Physics	1	ENV

分科会の略称　YOUTH: 学生の社会参画 , EDU: 21 世紀における日米の教育 , SEC: 安全保障と日米 , SE: 社会起業家 ,
ENV: 新興国と地球環境問題 , SR: 地域再生―都市、農村が生き残るために― , NID: 国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ

メディアへの掲載

■テレビ

2010年6月28日(月)　NHK沖縄　NHK沖縄ニュース

■新聞

2010年7月11日(日)　琉球新報　「学生会議が意見交換」

■HP

れすぱす　東京都の国際交流・国際協力ニュースレター　2010年3月号

在シカゴ日本国総領事館　久枝総領事の主な活動（2010年5月～8月）

■学内雑誌等

2010年1月8日(金)　塾生新聞（慶應義塾大学）「三田で日米学生会議報告会」

2010年9月7日(火)　防大かわら版　「日米学生会議に参加した齋藤学生から」

2010年9月14日(火)　東京大学新聞　「世界の学生と議論」

2010年10月28日(木)　Waseda Weekly（早稲田大学）

「未来の日米の架け橋を目指して～第62回日米学生会議～」

2010年11月26日(金)　東京大学新聞　キャンパスガイ

↓2010年1月8日(金)　塾生新聞（慶應義塾大学）

三田で日米学生会議報告会

猪口邦子氏が基調講演

日米学生会議（本部の報告会が12月19日、三田キャンパス西校舎で開催された。日米学生会議は1954年に発足した国際交流団体。本イベントでは、昨年度に行われた第61回日米学生会議の参加学生たちによる報告のほか、元参議院議員の猪口邦子氏による基調講演が行われ、学生を始めとする多くの人々が会場へ集った。

（田所義輔・慶應生成）

会議報告に先立ち基調講演をする猪口氏

↓2010年7月11日(日)　琉球新報

学生会議が県内意見交換

「基地こそ危険」県内生反論

沖縄の米軍基地問題への認識を深めようと、第62回日米学生会議（国際教育振興会主催）の沖縄研修がこのほど行われ、県内学生との意見交換会が沖縄国際大学で開かれた＝写真。学生会議から東京大、京都大、防衛大、慶応大などの34人、県内から琉球大、沖国大生ら約15人が出席。学生会議側から「沖縄の世論は基地に対し感情的な側面がある。『基地を撤去した場合の安全保障上の影響をどうするのか』などの主張があった。

県内の学生からは「沖縄は日常的に基地や軍隊の犯罪に苦しめられている。『感情的』というのは悲しい」「基地があるからこそ安全ではない。9・11（米中枢同時テロ）の時に、沖縄は基地が多いから襲撃されるのでは、と観光が控えられたことがあった」と指摘した。

意見交換の前には、琉球大学の島袋純教授や沖縄タイムス社の屋良朝博論説委員が、米海兵隊が沖縄に移転してきた過程や問題点を解説した。学生会議は研修期間中、米海兵隊司令官や在沖米総領事、県、ひめゆり学徒隊生存者などからの講話も受けた。

第2章

事前活動

第 61 回日米学生会議報告会
および講演会…… 14
立命館大学講演会
第 62 回日米学生会議関西説明会… 14
第 62 回日米学生会議選考会…… 14
春合宿……15
英語ディベートワークショップ……18
防衛大学校研修……18
学生有志活動　沖縄研修……19
直前合宿……22

第62回日米学生会議事前活動

第62回日米学生会議の事前活動は2009年12月の第61回日米学生会議報告会から始まった。新たな参加者が決まる前は、日米学生会議の存在と意義を社会に伝えることを目的として各種のイベントを開催する。参加者決定後は講演会、レクチャー、コミュニケーション講座、英語ディスカッションなど多岐にわたるプログラムを行い、本会議を充実させる準備を行う。また本年は、日米学生会議参加者有志による沖縄研修も行われた。本章では、これらの事前活動と有志の活動の様子を紹介する。

第62回日米学生会議活動の様子		
1	12月19日	第61回日米学生会議報告会、第62回日米学生会議説明会
2	12月22日	立命館大学講演会、第62回日米学生会議関西説明会
3	3月	第62回日米学生会議　京都選考会・東京選考会
4	5月3日～5日	春合宿
5	5月22日	英語ディベートワークショップ(井上敏之氏)
6	6月11日	防衛大学校研修
7	6月25日～28日	沖縄研修(学生有志活動)
8	7月24日・25日	第62回日米学生会議　直前合宿

1. 第61回報告会、第62回説明会

日時：12月19日（土）14：00～18：00

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

概要：前年度第61回日米学生会議説明会に先立ち、本プログラムのアラムナイである猪口邦子氏(現参議院議員)に、「核のない世界へ－今問われる日米の役割とは－」と題して基調講演を頂いた。その後、第61回日米学生会議参加者により各開催地、分科会についてプレゼンテーションが行われた。その後、本年度プログラム参加希望学生向けに、同参加者によるパネルディスカッションを行い、日米学生会議の魅力を広く一般にアピールした。

2. 立命館大学講演会、説明会

日時：12月22日（火）15：00～18：30

場所：立命館大学　創思館1F　小ホール

概要：京都大学教授である中西寛教授に、「核廃絶へ向けて ～新しい日米からの考察と発信～」と題して基調講演を頂いた。その後、第61回日米学生会議参加者及び、来場した各大学からの学生との間で、核廃絶は可能か不可能か、国際政治の観点のみならず軍事技術などの多角的な視点からパネルディスカッションを行った。

3. 第62回日米学生会議選考会

場所：同志社大学(今出川キャンパス)、日米会話学院

概要：1月15日よりWebページでの一次小論文の受付を開始し、一次小論文の結果2次面接に進んだ学生に対し、グループディスカッション、個人面接、教養試験を課した。

4. 第62回日米学生会議　春合宿

日時：平成22年5月3日～5日

場所：代々木オリンピックセンター

概要：本春合宿にて4月の選考委員会により最終決定した28名参加者とECが初の顔合わせを行った。本合宿において参加者はJASCの歴史を学び、外国人学生との討論、分科会活動などの「JASCの基礎」を学び、8月の本会議に向けての最初の一歩を踏み出す機会となった。

【分科会活動】

第4章各分科会の活動の、春合宿での活動を参照。

【ようこそ先輩】

概要：75年の歴史を築き上げてきた先輩方を囲んでのJASCの歴史を知るための交流会を開催した。第8回参加者の大先輩から直近の第61回参加者まで、あらゆる世代のJASCアラムナイとの対話を通して、本年度参加者たちの8月の本会議に向けたモチベーションアップを図った。

参加者の感想（竹内 智洋）

ようこそ先輩ではJASCに参加して初めてアラムナイの方々と話すことが出来た。先輩方が海外に行くこと自体ほとんど例の無い中、大変な苦労をしてアメリカへ渡られた事や、アメリカ兵士を中心としたアメデリを前にどの様な思いで会議に臨んだのかなどを聞くことが出来た。これらの体験談を聞きながらJASCerとなれた重みを実感すると共に、参加者として自分が期待される責任について考えた。もともとJASCが歴史のある会議だということは知っていたもののこの企画までは単に第62回参加者という意識しかなかった。しかし、先輩方の話の中から感じたのは自らの会議における成功だけではなくJASCという会議をいかにして次につなげるかの重要性であった。確かに62回を成功させることは大切であるが、その中でも自分なりに次世代へとつなげる事が出来るように努力したいと感じた。

【English Communication Workshop】

講師：井上敏之先生

概要：JASCアラムナイである井上先生をお招きし、春合宿における初の英語を使ったプログラムを行った。本プログラムでは限られた時間の中で、与えられたテーマについて自らの考えを話す練習を中心に行い、「英語で考え、英語で言葉にする」練習を行った。

参加者の感想（奥谷 聡子）

本プログラムでは、本会議に備えて英語で自分の意見を明確、且つ論理的に伝える方法を井上先生に教えていただいた。Point, Reason, Example, Pointの4本柱を意識しながら、最初は二人組になり、「日米学生会議に応募したきっかけ」など身近なトピックから自分の意見をいい、相手が質問し、コメントする繰り返しを全て英語で練習した。限られた時間の中で、ポイントを明確に伝えるのは難しかったが、色々な人とローテーションで意見を言い、更にアドバイスももらえたので良かった。最後には3列に分かれ、一人ずつ全員の前で1分間のスピーチをして、フィードバックをしあった。非常に個性豊かなスピーチに盛り上がったり、一体感を感じたり、楽しみながら参加できた。論理的に意見を述べることはもちろん大事だが、この練習で学んだもう一つの大切なことはPassionをもって相手を説得できるような話し方の工夫もできることが大切だと感じた。

【English Discussion Session with International Students】

概要：本会議中の討論は基本的に英語で行われる。各分科会は春合宿中、本プログラムまでに分科会討論を重ねてきたが、それを改めて英語という他言語にて討論し直すことで、英語討論の難しさを生に体感するためのプログラムとしてセッティングした。

参加者の感想（新井 良子）

外国の学生を招き、まず各分科会トピックにつ

いて英語で議論をした。日本語で議論を展開することすら十分難しいのに、それを英語でとなると内容は困難を極めた。しかし、外国の学生の地域に対する意見を聞けただけでなく、RT一丸となって英語で考え・共有するという本番に向けた実践的な練習をすることができ、有意義な時間となった。また、後半ではスペシャルトピックと題して学生が討論したいトピックを自由に決めて議論を行った。なかでも「平和」ついて話し合うRTでは、参加者の自論がはっきりと見えてきて、大変興味深かった。ディスカッションの面白さはみんなで議論を展開させていくこと自体ももちろんであるが、価値観の違いがはっきりと浮き彫りになったときにその議論が一層深まっていくではないかと感じた。

【春合宿を終えて、本会議への意気込み】

【竹内 智洋】

合宿では会議に参加する責任と共に尊敬できる仲間を35名も得る事が出来た。私はこの多彩なメンバーの中で今後どの様な局面でも自分なりに貢献する方法を見つけ、その中で今後の日本を支える手がかりを模索したい。

【庭野 啓太】

分科会や勉強会で貫きたい姿勢：考えて、仲間と共有し、また考えて、動く。
会議全体で貫きたい姿勢：自分を知ってもらおうとすること。相手を知ろうとすること。対立を恐れずに、相手とぶつかり、とことん話すこと。

【松下 マエス】

どの分科会もあると思うが、しかしNIDは特に個と個の衝突が激しい。でも、ここには本気の私をぶつけても、笑って受け入れてくれるメンバーがいるのだと実感。本会議でも本気で衝突するので、みんなよろしくお願いします。

【飯倉 江里衣】

RTメンバーとすっかり打ち解け、本会議のイメージも膨らみ始め、春合宿を通して様々な不安が取り除かれた気がしました。これからRTの具体的な活動にどんどん取り組んでいきたいと思います！

【栗原 隆太郎】

JASCは、自分から働きかければ働きかけるほど得るものが大きい場所だという事を実感できた。能動的に動くと同時に、自分には何が出来、何が足りないのかという事を考えながら日々成長して行こうと思う。

【齋藤 友理絵】

同世代の、これほど多くの種類の人々に出会ったことは初めての体験であった。安全保障観も含め、自分の中の何かが変わっていく、そんな漠然とした、しかし大きな予感がする。絶対にこの夏を楽しんでみせる！

【柴田 真也子】

春合宿では予想しないような諸要素に気を配らねばならないことを学びました。それを活かし、どこまで自分たちで突き進んでいけるのか、自分を試す意味でもみんなと一緒にたくさんのチャレンジをしていきたいと思います。

【森田 真弓】

JASCerと話す中で自分の知識の浅さを思い知りました。本会議までには知識を補填し、英語力も向上させてより良い議論が出来るようにしたいと思います。JASCに参加できて、いいメンバーに出会えて本当に幸せです！

【山下 真貴子】

春合宿は本当に楽しく、刺激的で、あれほど濃密で疲れ切った3日間はない。一人一人が独特で、強烈に刺激された。私ももっと頑張らなきゃいけないと思った。そして、尊敬できる友人に恵まれた幸運に心から感謝したい。

【片山 直毅】

“Time is limited” 春合宿を終えての率直な感想。時間が限られていても、日米学生会議を“unlimited”な可能性を持つものにしていきたい。

【中澤 耕己】

今年のJASCは（も？）本当に個性の強い人間の集まりである。アメリカに行って議論するだけでも特別なのに、加えてこの強烈なジャパデリもいる。その中で自分らしさを見つけて、一番輝け

るように頑張れば、多くのことを吸収できると思っている。

【尾崎 裕哉】

全員の思い出に残る、とても素晴しい企画が沢山組み込まれていた事から、実行委員の丁寧さ、そしてJASCへの熱意が伝わってきました。70人全員の成功を考慮し、私もあらゆる面でJASCの発展に貢献する決意をしました。

【高橋 亜矢】

春合宿で初めて会ったJASCerたちは、皆それぞれ気さくで、興味深くて、輝いていて、参加する前の不安が吹き飛ばされました。今後、夏に向けて、会議が素晴らしいものにできるように、みんなと一緒に、私も最大限頑張っていこうと思いました。

【木本 篤茂】

JASCに参加する上で、援助を出してくれる団体、JASCの基盤を築いてくれたOB・OGの恩に報い、選考に通らなかった人の分まで努力することの責任を果たすべく、最高の夏にします。

【山田 晃永】

才能も行動力もある参加者ばかりで圧倒されかけたが、卑屈にならずに自分なりの役立ち方を模索しようと思った。また、勉強不足だと議論が不毛になりかねないと分かったので、本会議にはしっかり準備して挑みたい。

【細井 駿】

短期間でこれだけ大勢の学生と近い関係になれたのはJASCがはじめてでした。合宿参加まではJASCの輪にうまく溶け込めるかどうか不安でしたがこのメンバーとなら仲良く、そして一生の思い出を作り上げることができると思います。今後の各分科会での事前勉強会やフィールドトリップを通して万全の状態で夏の本会議に参加しようと思います。

【丸山 綾子】

春合宿で熱い仲間と熱い議論に出会い、一気にJASC大好き人間に。時間的・精神的余裕が比較的ある4回生という立場から、デリー人一人の思いを出来るだけ把握して、全員が充実した経験を出来るように支えていきたいです。

【新井 良子】

自分の未熟さについて痛感した3日間となり、世の中には学ばねばならないことが何とたくさんあるのだろうと愕然とした。しかし、最高の仲間と最高の夏を作り上げるべく、JASCに全身全霊で取り組む覚悟が、決まった。

【有川 慧】

たった2泊3日なのに、個性的でパッション溢れるメンバーと濃密な時間を過ごすことができました。ますますモチベーションもUP！最高の学生会議になるよう、精一杯自分のできることを実行していきたいです。

【斉田 英恵】

この3日間で、確実に自分の中で何かが芽生え始めた。それほど春合宿は新鮮で濃く、刺激的だった。本会議では70の考え方を吸収し、その芽がどこまで成長するのか楽しみつつ、更なるステップアップを目指したい。

【生板 純一】

日米学生会議では人と人との対話を大切にしたい。自分の思いを遠慮せずにしっかり伝え、また相手の意見も真摯に聞いて、そこから固定観念や先入観にとらわれない、若者らしい新鮮な発想をしていきたいと思う。

【大井 芳季】

こんなにモチベーションが高い奴らばかりのところに来たのは久しぶりです。如何に自分が楽な生き方をしていたことか。不安な部分もあるが、challengeしていこうという決意を新たにしました。そして少しでも日本のため、世界のためという高邁な目標に向かいたいと思います。

【井上 聡美】

春合宿を通してJASCerとしての自覚を持ち、今後本会議に向けてRTの内容の面でも、英語の能力の面でも課題をたくさん見つけることができた。62回の最高の仲間たちと最高の夏を過ごせるよう、努力してきたい。

【奥谷 聡子】

非常に意識が高く、ユニークなメンバーにとて

も刺激を受けました！このメンバーと日米学生会議に参加して、自分自身成長したい。全力を尽くして最高の会議にしよう！

【米本 大河】

2010年春、ここオリンピックセンターで芽生えた友情の種は夏には大きな大きな花を咲かすだろう。きっとそれを62本のどの花よりも大きくして見せる。自分を見つめ仲間とともに成長し最高の舞台を分かち合いたい！

【橋本 遥】

36人で4ヶ月間、70人で1ヶ月間。この短い期間で何が出来るか。自分を曝け出し、相手を慮り、自分をよく知るために、恐れず果敢に挑戦しよう。そして互いに認め合い、刺激し合い、尊敬し合える関係を築きたい。

【郭 ヒギョン】

ただの3日間にこれくらいの知識や刺激を得られた分、夏の1ヶ月本会議が楽しみでたまらない。これから夏の本会議まで自分の力が最大限に発揮されるように充電して最高の夏をすごせるように頑張りたいと思う。

【山口 寛明】

多くの刺激を受けたことによって、皆を牽引していく働きをしていこうという強い気持ちが芽生えた。メンバーの心にどんどん火をつけていけていけるよう、頭でうんぬん考えるよりも行動で自己を示していく。

5. 英語ディベートワークショップ

日時：5月22日(土)

場所：ココデシカ青山

概要：本会議で必要となる英語での会話能力を超えた「議論力」を養うため、本プログラムのアラムナイである井上敏之氏(英語ディベートトレーナー)のお招きで、英語ディベートワークショップを行った。ここでは、ディベートの練習を通じて英語で討論するための「脳」作りや瞬発力を鍛えるレッスンの後、実際に3人一組でのディベートを行った。その議題には、「犬とアイボどちらがよいか？」といったものから「日本にとって中国よりアメリカ合衆国のほうが重要であるか？」といったテーマも存在し、全員が白熱したディベートを行った。

6. 防衛大学校研修

日時：6月11日(金)

場所：防衛大学校(横須賀)

概要：日米学生会議では毎年、日米関係を考えるにあたって重要な「軍事」という観点をより詳しく学ぶため、同世代の学生の中でも防衛大学校の学生との対話の機会を設けるとともに、防衛大学校教授より特別講義を受けている。

本年度は、防衛大学校施設見学をはじめとし、山口教授、吉田一佐による特別講義のほか、防衛大学校学生と日米学生会議参加者による各分科会に分かれた討論が行われた。

参加者の感想(郭 ヒギョン)

防衛大学の研修は、私にとって3つの成果が得られた貴重な経験であった。まず、1つ目の成果は新しい日本人を見つけたということ。「日本のために」という意識が強い彼らと話しながら、戦

争の記憶から「愛国心」をタブー視してきた多くの日本人を「平和ボケ」していると一般化していた自分の偏見が考え直された。次に2つ目の成果は、「自衛隊」と「軍隊」の違いが分かった点である。個人的にその違いは法律上だけであって、やっていることはあまり変わらないという印象を受けた。実際に交流を通じて、彼らの意識からも自衛隊をほぼ軍隊として認識していることが分かったが、一般の軍隊より自衛隊員を目指している防衛大生の方が「国際貢献」という意識が高いと感じた。最後の3つ目の成果は、一般の大学生と全く違う生活を過ごしている彼らの日々を見て、いかにも自分が楽な生活をしてきたのか実感したことだ。彼らに比べると私の自己管理能力や社会への意識はきわめて低いものである。こうした成果を生かして、これから頑張っていきたい。

7. 沖縄研修(学生有志活動)

日時：6月25日～28日

場所：沖縄県(キャンプフォスター、在沖米国総領事館、名護市庁舎、辺野古等)

＊本研修は第62回日米学生会議参加者のうち、本会議でのワシントンD.C.での安全保障フォーラムに先立ち沖縄問題を現地で学習したい志のある学生33名が自費出費にて研修を企画、運営した。

＜沖縄研修の目的＞

新日米安保条約締結より50周年の節目となった2010年、日米同盟を巡る両国の政治的状況は大きな変化のときを迎えている。歴史的な政権交代ののち、在沖縄米軍基地問題を国民規模の課題に位置づけながらも迷走し続けたまま終焉した鳩山政権。その後を引きついだ菅新政権においても、この問題に対する明確な方向性は未だ示されていない。

創設以来75年間、日米の架け橋たる人材を輩出してきたJASCにとっても、沖縄の基地問題は、今後の日米関係を考える上で非常に重要な問題であり、今こそ学生という自由な立場から、社会に対して何らかの意見を発信する必要性があると考える。本会議での第2サイトとなるワシントンD.C.において開催した安全保障フォーラムを意見発信の場とし、沖縄問題への理解を深め日米両国の相互理解に寄与するための第一歩として、実行委員会主催の有志活動という位置づけで本研修を実施するに至った。

【6月25日(金)アメリカの視点から学ぶ】

－在沖米海兵隊基地訪問

－在沖米国総領事館訪問

1日目はアメリカの視点から沖縄を見ることで、アメリカ側の主張を理解することを目的に研修を行った。はじめに、米国海兵隊の基地であり、事実上沖縄米軍の中枢が置かれているキャンプフォスターを訪問し、海兵隊のRobert D. Eldredge氏よりレクチャーを頂いた。Eldredge氏によると、米海兵隊は米軍における陸軍を初めとする他の組織と比べ、迅速かつ柔軟に展開して対応するという機能を果たしているため、常に訓練を行い、沖縄に待機することが不可欠である、ということだった。また、思いやり予算や騒音問題等の日本側の負担が目立っているが、アメリカ側もその分「命」という負担を負っており、両者がWin-Win関係を築いていくことが大切である、とのご講義を頂いた。レクチャー後は基地内を見学して回り、訓練施設のみならず海兵隊の普段の生活の様子も見学した。その後、在沖米国総領事館に訪れ、Raymond F. Greene在沖米国総領事より50周年を迎えた日米安全保障条約の意義を学ぶことができた。Greene氏は、世界最大の5つの軍隊のうち4つが東アジアに存在するからこそ沖縄に基地があることがとても重要である、ということや、基地移設問題は白黒をはっきりつけられるものではないが、移設は14年も前から日本と議論してきたものであり、急に移設案を変更することは難しい、等も指摘された。

【6月26日(土)　平和学習】

－県庁基地対策課によるレクチャー

－ひめゆり資料館見学

－平和祈念公園見学・ひめゆり学徒隊生存者の方より講話

2日目は、午前に沖縄県庁の方から在沖米軍基地についての概要、それに対する県庁としての対応についてレクチャーして頂いた。講義の中では1日目とは対照的に米軍基地の存在が地域に与える悪影響について、犯罪や事故のデータを詳細に述べられていたのが印象的だったが、普天間基地返還後の利用可能性については、行政としても具体的なビジョンを描くことが困難なようであった。午後にはこの日のメインテーマであった「平和学習」を行った。ひめゆり資料館や平和祈念公園を訪問し、第二次大戦下に行われた沖縄戦について様々な資料を見学するとともに、戦時下において実際にひめゆり学徒隊として活動された方に当時の様子について伺う機会を得た。美しく広がる大海原と沖縄戦で戦死された多くの人々を弔う石碑を目の前にして、平和を願ってやまない沖縄の現状に、思いを馳せた一時だった。

【6月27日(日)　現地・沖縄の視点】

－沖縄国際大学での勉強会(佐藤学教授)

－地元住民・学生との意見交換会

－研修リフレクション

3日目は、沖縄国際大学での基地問題勉強会を実施した。勉強会では、沖縄国際大学の佐藤学教授協力のもと、『砂上の同盟』の著者であり沖縄タイムズ論説委員の屋良朝博氏、沖縄の自治に詳しい琉球大学の島袋純助教授からレクチャーを頂き、質疑応答では学生会議参加者との活発な議論も展開された。また、沖国大や琉球大の学生とのディスカッションも行った。会議参加者、現地学生双方からの率直な意見交換がなされ地元の人々が抱く基地に対する思いを感じる機会となった。勉強会後には、沖国大内で交流会を実施し、沖縄の伝統文化である「琉球舞踊」を鑑賞や、ディスカッションを継続するなどして交流を深めた。

米軍基地がすぐ傍に点在する嘉手納での宿泊となったこの日の夜には、ホテルのロッジで研修全体に関するリフレクションが行われた。参加者の基地問題に対する認識の変化などについて議論するとともに、本会議へ向けた学生会議参加者としての自覚の必要性も課題として共有された。

【6月28日(月)　辺野古という現場】

－辺野古訪問

－名護市役所訪問(稲峰進市長より講演)

最終日となった4日目には、沖縄平和ネットワークという団体の大島和典氏の案内で、沖縄県内にある様々な米軍基地施設をバスでまわった。地元住民が基地周辺で受ける様々な被害の実態を五感で考える機会となった。また、日米合意においては普天間基地の移設先とされた辺野古地区を訪問し、地元で基地反対運動を継続されている方からお話を伺った。その後、辺野古への移設反対を掲げて当選した名護市の稲嶺市長からもレクチャーを頂いた。基地反対を掲げ具体的な行動を起こしている人々のお話を伺う中で、基地問題に対する会議参加者と地元の人々の認識の乖離や、問題に対する私達の認識の甘さを改めて実感することとなった。

＜参加者の感想＞（丸山 綾子）

例えば私が継続して特定の人にレイプされていて、その被害を必死に警察に訴えている。だが警察は取り合わず、「先に男性がレイプするほかの相手を探せ」「あなたのお陰でほかの女性が助かるから我慢しろ」と言われるとしたら－あまりの理不尽さに言葉も出ないだろう。相手が悪いのは明白

なのに、なぜ被害者の私がそんな苦労を強いられるのかと。研修で出会った沖縄の方々が、「感情論」「国家的な安全保障戦略を考えていない」といった意見に対し示された怒りや悲しみの感情をどう理解すればいいのか考え続けて、この想定に行き着いた。もし沖縄の人々にとっての米軍や日本政府が、私にとっての男性や警察と同じような存在だとすれば、彼らがなぜあんなに怒られたかは、痛いほど分かる。この想定の避けられない恣意性と不確かさを承知の上でも、なんとか自分の身に落として彼らの気持ちを理解しようとしたのは、基地問題の勉強を始めてからずっと感じていた、コミュニケーションの断絶という問題に向き合いたかったからだ。ある教授が「中国の脅威は計り知れない」と熱弁されるかと思えば、続いてお会いした活動家は全く相反する論拠に基づいて、「日本は平和で安全だ」と力説される。こうした矛盾する事態をどう受け止めればいいのか、戸惑っていた。多くの方が人生をかけて懸命に問題解決に向けて活動されているのに、根本の前提さえ共有されないで個々の議論のみが進んでいく事態が、ただ疑問だったのだ。

どう反対意見と折り合うか、いかに建設的に物事を進めるかが、もっと重視されるべきではないのか。そうしたもどかしさから、どの方に話を伺う時も、「この人は反対意見をどのように聞き、対応するのだろうか」と考えずにいられなかった。当初は私も国家安全保障の重要性をいかに沖縄の人々に理解してもらうのかに関心があった。しかし前述の想像を経ると、そうした働きかけがいかに彼らにとって暴力的かを思い、何も言えなくなる。いくら論理的に正しく見えても、第三の道を模索しなければならないのだと思う。研修中、米軍関係者の方にこうした問題意識をぶつけた。「相互理解は、一歩進んだら3歩下がるようなものだ。だからこそ理解しあう努力を続けなければならない」との言葉が印象的だった。相手の立場を本当に理解すること、相手に響くよう自分の意見を示すことがいかに長い道のりか。それを知ったことが、沖縄研修の確かな収穫だった。

＜沖縄研修総括＞（大宮 透）

第62回実行委員の自主的活動として企画された沖縄研修だったが、その発端は「何か新しいことをやりたい」という実行委員としての純粋な思いと、沖縄における基地問題の複雑化に対して「日米」関係の一端を担う存在として何らかのアクションを起こしたいという使命感の両方が混在したものだった。結論から言えば、企画当初に私たちが漠然とイメージしていた最終目標、つまり「会議参加者が沖縄研修を経たことで基地問題に対する統一した見解や声明を出すこと」は、最後まで達成できなかった。むしろ、実際には事前の勉強会や本研修を通して参加者の基地問題に対する見解はより多様化したように思える。研修報告が中心となったワシントンでの安全保障フォーラムにおいても、「日米」という対立軸には収まらない多様な主張が展開される結果となった。「様々な視点から基地問題を考える」という研修の目的を考えれば、これは当然の帰結だったのかもしれない。

私自身が研修を通して何よりも強く意識したことは、基地問題を当事者として考えることの困難性であった。いや、一瞬の当事者意識であれば幾らでも持つことはできる。しかし、その問題を「自分のこと」として捉えた上で継続的に考えることは、私が現地に住むことがない限り不可能だと思う。

では、果たして私たちが「当事者意識」を持つことは必要なのだろうか。むしろ重要なのは、厳しい状況に生きる当事者の存在や彼らに対して私たち自身が知らぬ間に行っている「差別」や「無視」を自覚することなのではないだろうか。私たちは基地問題の当事者にはなれないかもしれない。それでも、彼らの叫びに耳を傾けること、具体的な解決策を私たちの方から進んで提案することは可能なはずだ。

最後に、研修を企画していく中で、本当に多くの方々から暖かいご支援・アドバイスを頂きました皆様、特に1日目の米軍基地や総領事への訪問実現に尽力していただいたJASCアラムナイの山

本東生氏、また、3日目の沖国大における勉強会・交流会を一手に引き受けてくださった佐藤学教授には、数ヶ月間にわたる準備にご協力頂きました。また4日目に1日がかりで私たちに基地問題の本質を語っていただいた沖縄平和ネットワークの大島和典氏、ご多忙にも関わらずレクチャーにお時間を割いていただいた稲嶺進名護市長、その他、研修を支援してくださった皆様に、この場を借りて心より御礼を申し上げたく思います。本当に有難う御座いました。

8. 第62回日米学生会議　直前合宿

日時：7月24日・25日

場所：代々木オリンピックセンター

概要：第62回日米学生会議本会議に先立ち、各分科会が日本での事前活動のまとめや、本年度の4つの開催地についての情報の共有、バディー(本会議中で互いに手助けをするため、日本側参加者とアメリカ側参加者一人ずつがペアになり、事前に連絡を取り合う制度)となったアメリカ側参加者について他の日本側参加者に情報共有をするなど、最終準備を行った。

第3章

本会議・サイト活動

リッチモンド（インディアナ州）　24
ワシントンD.C. …… 30
ニューオリンズ…… 35
サンフランシスコ…… 40

リッチモンド（インディアナ州）（7月26日～8月1日）

7月26日（月）日本側参加者到着、歓迎
7月27日（火）オリエンテーション
　　開会式
　　Tom Hamm 教授講演
7月28日（水）インディアナ州政府による講演・レセプション
7月29日（木）ホンダ自動車工場訪問
7月30日（金）ＫＡＳＣとの合同ディスカッション
7月31日（土）リッチモンド市内ツアー
8月 1日（日）ワシントン D.C. へ出発
※宿泊場所：Earlham College

■サイトテーマ

アメリカにおける日本の再発見
～日米の地域間交流から～

広大なトウモロコシ畑が広がり、アメリカの田園風景の面影がありながら、自動車関連産業を中心に多くの日系企業が進出しているインディアナ州。州都インディアナポリスは国内交通の要衝として、各産業を結ぶ「アメリカの十字路」とも言われる。そして、ジャパニーズ・スタディーズで有名な Earlham College のあるリッチモンドが、第62回日米学生会議始まりの地となる。Earlham College が1873年に日本人卒業生を輩出し、インディアナと日本の地域間交流の歴史は教育から始まった。そして今日では、インディアナと日本の各都市が相互に姉妹都市関係にあるなど、その関係は深い。第1サイトでは、日本との繋がりが、いかにインディアナの産業、教育、文化に影響を与えてきたのかを確認し、「アメリカにおける日本」を再発見したい。

■活動の指針と目標

・アメリカ側参加者と日本側参加者の相互理解のきっかけ作り
・アメリカの地方都市を知る
・アメリカにおける日系企業のプレゼンスを知る
・KASC(Korea-America Student Conference)との交流

■具体的活動

・開会式
　久枝　譲治氏　在シカゴ日本国総領事
・Tom Hamm 教授による講演会
・スキットによる相互文化理解
・インディアナ州政府による講演会
・ホンダ自動車工場訪問
・KASC との合同ディスカッション
・リッチモンド市内ツアー

7月26日（月）

日本側参加者到着

春合宿から3ヶ月間。ついに日本側参加者がアメリカに到着した。シカゴより乗り換えインディアナポリスへ。アメリカ側実行委員の出迎えによりアーラム大学へと到着した。彼らよりアーラム大学の案内を受けていたところ、アメリカ側参加者が急に現れ、歓迎のしるしとして、代々 JASC に受け継がれている JASC Song を歌ってくれた。その後、初めて両国参加者が顔を合わせ、お互いに用意したプレゼントを交換しながら、まだ慣れない英語で自己紹介を行った。また、アイスブレー

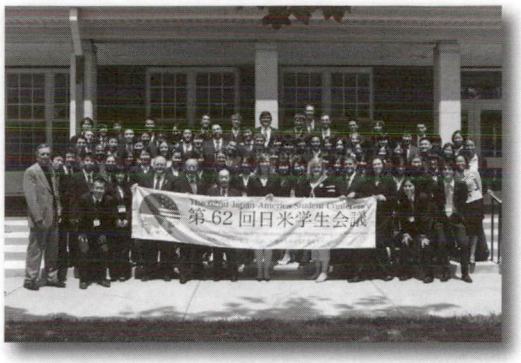
キングとして、ゲームで緊張をほぐし、全員で大学のカフェテリアで夕食をとった。寮の施設はとてもきれいで、参加者が集まって会話のできるスペースがあり、興奮を抑えきれず夜遅くまで話し込む参加者もいた。

写真：緑あふれるアーラム大学のキャンパス

7月27日（火）

オリエンテーション・開会式・Tom Hamm 教授講演

本会議のオリエンテーションを実行委員より受けた後、初の分科会セッションを行った。その後、開会式が行われ、主催団体、後援団体、両実行委員長からの挨拶、そして在シカゴ日本国総領事の久枝譲治氏からも歓迎を受けた。式の後はアラムナイや後援者の方々などとの交流会を開き、JASC の伝統と重みについて実感した。その後、アーラム大学の Tom Hamm 教授により、アーラムと根深い関係のあるキリスト友会（Quaker）についてのご講演を頂いた。また、ジャパニーズ・スタディーズで有名なアーラム大学と日本人学生の歴史についても学ぶことができた。夜にはお互い直前合宿で準備してきたスキットにより自国の文化を面白おかしく紹介し、さらに両国の距離を縮めたと同時に、JASC 参加者の隠れた笑いの才能に感動した。

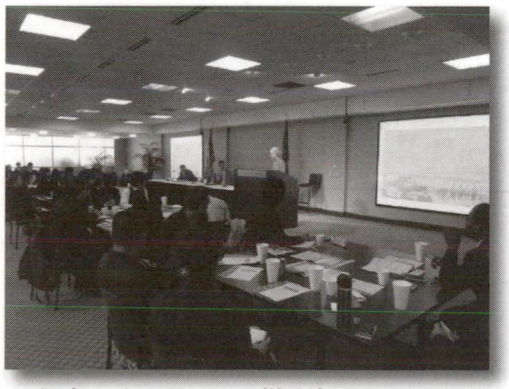


写真：開会式後、ゲストと共に

7月28日（水）

州政府シンポジウム、フィールドトリップ、日本文化紹介

唯一の地方都市が本サイトであったため、インディアナ州政府による講演会にて、「地方」としてのアメリカを学ぶ機会を設けた。2割弱の労働人口が農業であるというインディアナ州の農業への取り組みや、インディアナ州が地域活性化のためにどのようなまちづくり政策を行っているかを学ぶことができた。また、多くの日系企業を誘致しているインディアナ州と日本企業の実態についても知ることができた。講演会の後は、州都にいることを利用し、各分科会でフィールドトリップを実施した。その後、日本人協会やアラムナイの方々とのレセプションを行い、インディアナで働く日本人の方々と直に交流することができた。夜には、日本側参加者が主体となり、日本の制服や浴衣、書道、茶道などを紹介するパーティーを行った。



写真：インディアナ州政府フォーラム

写真：書道を体験するアメリカ側参加者

7月29日（木）

ホンダ工場(HMIN)訪問、分科会活動

この日はインディアナにおける日系企業の大手であるホンダの工場を訪問し、レクチャー、工場見学を行った。レクチャーでは、職員の方よりHMINとインディアナ州政府の関係、本社との関係、等のお話を伺った。また、グローバル企業としてのホンダの戦略についてなど、参加者より積極的な質問も見られた。工場見学では、ヘルメットをかぶり、実際の自動車の制作過程の現場を見ることができた。優れた日本の技術力の象徴ともいえるこの工場では、ただただ規模の大きさに圧倒されている参加者が多かったように思われる。訪問の記念にHMINよりホンダの発明したロボット、ASIMOのストラップを頂き、工場を後にした。アーラム大学での夕食後は分科会でのを行った。前日のフィールドトリップの復習などを行った。JASCの生活にも慣れ始め、分科会活動もより具体的な議論を展開し始めたようだった。

7月30日(金)

KASCとの交流

同じインディアナ州に位置するTrine大学にて、KASC(Korea-America Student Conference)参加者との交流を行った。KASCとは、JASCをアメリカ側で主催するISC（International Student Conferences）の運営するもう一つの学生会議であり、2010年度で第3回を迎えた団体である。開催地がお互い近かったこともあり、歴史上初めて、3ヶ国合同の会議が開催された。はじめに、JASCとKASCの概要について、プレゼンテーションを行い、共に昼食をとった。その後、各学生会議の分科会がSpeed Datingと称し、分科会のディスカッションや概要について、相手側の参加者へプレゼンテーションをする機会を設けた。KASC側の分科会テーマは以下の5つであった。

- The ABC's of Education: Exploration of Education
- War and Peace: An Analysis of Differing Perceptions
- The Green Life Movement: Social Movement of Going Green
- U.S. and Korea in the News: Media for Cultural Understanding
- Korea in 50 States: The Evolution of National Identity

「教育」「戦争と平和」「環境」「ナショナルアイデンティティ」などテーマが重複している分科会もあり、参加者の積極的な質問が飛び交っていた。続いてスペシャルトピックを行い、日米韓の関わるトピックについて3国間の学生による活発な議論が展開された。トピックは①軍事と戦争 ②宗教 ③歴史教育 ④人種差別 ⑤女性のボディイメージと美容整形 ⑥技術協力 ⑦現代社会と伝統 ⑧社会保障 ⑨企業の社会的責任 ⑩メディアの社会的役割 ⑪恋愛 ⑫大学教育と学生生活 という、アカデミックなものから学生らしいものと、多岐にわたり、大変興味深いものとなった。ディスカッション後には大学の体育館にてゲームを通して各々の文化を紹介し合い、親睦を深めることができた。夕食時にはディスカッションの続きやお互いの文化について話が盛り上がる参加者が見られた。たった1日の交流であったが、普段接することのない「韓国」という視点をディスカッションに導入できたことや、数多くの友人ができたことでとても充実した1日となった。

写真：JASC と KASC の参加者全員で

7月31日(土)

リッチモンドツアー、分科会活動、日米ディナー

アーラム大学の位置するリッチモンド市内をめぐるツアーを任意参加で開催した。奴隷解放時代の史跡である Levi Coffin House や、White County Historical Museum を訪問し、小都市リッチモンドの豊かな歴史を楽しんだ。また、クエーカーの大学であるアーラム大学でのこの日の昼食は、オートミールや豆といった Simple Meal を取り、キリスト教の文化を体で感じることとなった。分科会活動後、その夜は日本側がお好み焼きやお餅を、アメリカ側がハンバーガーやスモア（焼きマシュマロ）を振る舞い、日米の食文化を紹介しあい、インディアナサイトの最後の夕食を満喫した。事前に学んだお好み焼きの焼き方を披露することができて、参加者も満足していた。また、本会議中初のリフレクションを行い、第1サイトを終えての各々の感想、意見、提案など積極的な発言が飛び交った。

写真：お好み焼きを楽しむ参加者

■成果と考察

・アメリカ側参加者と日本側参加者の相互理解のきっかけ作り

ゲームを通じてさまざまなアイスブレーキングを行ったり、自国の文化などを寸劇で紹介する「スキット」を発表したりすることにより、両国の学生のコミュニケーションを生むきっかけを作ることができた。また、日本側参加者が主体となり、日本の制服や浴衣、書道、茶道などを紹介するパーティーや、互いの食文化を紹介しあうバーベキューを企画したことは、互いの背景を知るきっかけ作りに貢献したといえる。

・地方としてのアメリカを知る

インディアナサイトが第62回会議全体を通しての唯一の地方都市であったため、「地方」としてのアメリカを学ぶ機会を多く設けた。州政府による講演会では、2割弱の労働人口が農業に携わっているというインディアナ州の農業への取り組みと実態について学ぶことができた。さらには、インディアナ州が地域活性化に向けて行っている政策についても、州政府の方から直接お話しを伺うことができた。また、リッチモンド市内ツアーでは、古きよきアメリカの地方都市としての歴史や伝統を学ぶことができた。これらの企画を通じて、他の3サイトとは一味違うアメリカの地方都市の魅力を、参加者が感じる機会を提供することができたように思う。

・アメリカにおける日系企業のプレゼンスを知る

インディアナ州には数多くの日系企業が誘致されており、日本経済に深く関係している。そのような中で、実際にどのように日系企業がアメリカで活動しているのかを、インディアナポリスで知ることができた。また、ホンダ自動車工場を訪問した際に、グローバル企業であるホンダの戦略や、いかにホンダにとって地理的にインディアナが重要か、といったことをご説明いただき、日本では知ることのできないグローバル企業の展開を目の当りにすることができた。インディアナで働く日

本人の方とも交流し、改めて日本とインディアナとの強い結びつきの背景にある、日系企業の重要性を理解することができた。

・KASCとの交流

Trine大学にてKASCの参加者と交流を行った。各々の会議の持つ分科会紹介や日米韓の関わるトピックについて3ヶ国間の学生によってディスカッションを行った。総計120名もの学生が集まりディスカッションを終えたのちはお互いの親交を深めるため各国の文化を紹介できるようなゲーム等のレクリエーションを行った。日米学生会議にとっては、韓国という新たな視点と触れ刺激になったと共に、今後も友好的関係を築く礎となった。

■サイトコーディネーター後記

【坂田 奈津希】

インディアナサイトは、第62回日米学生会議のテーマである「世界の問題を、私達の課題へ～異なる個の生む衝突と共鳴から～」を強く意識したサイトであった。会議の幕開けとなる第一サイトであることを念頭に置き、参加者が「衝突」できる場を多く設けるように心がけた。異なる個の生む「衝突」からこそ、「共鳴」が生まれる。本サイトは、その「衝突」の種をできるだけまけるよう、参加者同士やインディアナの方々など、あらゆる人との交流の機会を大切にした。その中でも、日米学生会議史上初めてであったKASCの学生との出会いは、大変刺激的であったように思う。「世界の問題を、私達の課題へ」と掲げている以上、「日米」だけにとらわれたくない。そんな私達の想いが、白熱したディスカッションや食事をともにしながらの何気ない会話を通じてKASC参加者にも伝わり、お互い「共鳴」ができたのではないだろうか。

また、多少なりともイメージが湧く他サイトと比べ、インディアナは特に日本側参加者にとって全くの未知の世界だった。しかし、そんなインディアナも、実は古くから日本と関係の深い土地だ。よって、日米学生会議がインディアナに行く意味を持たせるためにも、アメリカの視点から見ることで日本を再発見できるようなコンテンツを多く取り入れるようにした。州政府講演会やアーラム大学史の講義などを通じ、インディアナと日本の歴史や現在の関係についてより深く学ぶことができた。また、Honda Manufacturing of Indianaではアメリカにおける日系企業の実態を垣間見ることができ、関係者の方々には多大なるご協力をいただいた。特に日本側参加者にとっては、今までに見たことのない新しい形の日本を発見することで、参加者は自国観とも「衝突」することができたのではないだろうか。

なかなか訪れる機会のないインディアナであるからこそ、たくさんの方々のご厚意に助けられた。私達のために施設を提供してくださったEarlham Collegeには特に深く感謝の意を述べたい。Earlhamの恵まれた施設なしには、本サイトは成り立たなかった。また、あらゆる面でサポートしていただいたLarry Ingraham氏にも特別御礼を申し上げたい。日本でお会いした際に「Please ask me anything」との力強い言葉をかけてくださり、サイトコーディネートだけでなく、本会議中の運営でも大変お世話になった。

最後に、インディアナチームとして、何度も丁寧に打ち合わせに付き合ってくれたYudai、持ち前の安定感でサイトを動かしてくれたDiane、いつも隣で一緒に奔走してくれた高田に心から感謝したい。また、インディアナサイトを自分のものにしようと、主体的に活動してくれた参加者のみんなにもありがとうの気持ちを伝えたい。

この場を借りて、インディアナサイトをご支援いただいた全ての方に、御礼申し上げます。ありがとうございました。

【高田 修太】

リッチモンド。そう聞くと、普通はバージニア州のリッチモンドを思い浮かべるだろう。しかし、今回我々が訪れたのはインディアナ州のリッチモンドであった。私自身、実行委員となるまで、この州の存在、そして当然この街の名前など、全く

知らなかった。「他の三か所のサイトに比べ、圧倒的に知名度が低い。」そう思ったからこそ、今年度の日米学生会議においてこのサイトのコーディネートを担当した。

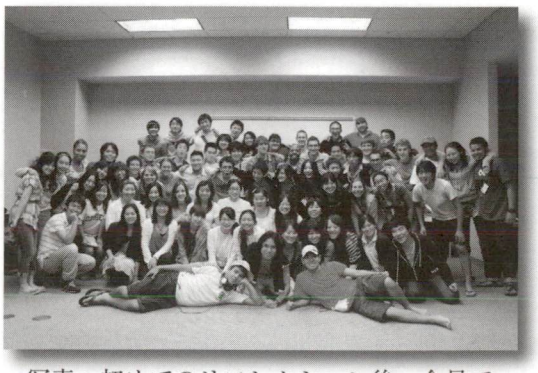
第1サイトとは、そもそもどのような意義があるだろうか。最も重要な点として、「参加者同士の親睦を深める」ということが挙げられるだろう。フォーラムや見学等、JASCらしいプログラムが存在する中でいかに参加者が仲良くなることのできるプログラムを入れるか、ということは常に悩みのタネであった。そのような状況ではあったが、私はこのインディアナサイトが第1サイトとして選ばれたことは大変よかったと今では思っている。なぜならば、滞在先のアーラム大学が、素晴らしく過ごしやすい大学であったからだ。大変失礼な言い方ではあるが、アーラム大学の位置するリッチモンドは非常に田舎であり、大学周辺で夜中に楽しめるお店やレストランはほとんどなかったのである。それゆえに、常に参加者はドミトリーに滞在し、広いロビーのソファに座って、長時間分科会を越えて交流していた。そして、日本側参加者の積極性が生み出したのは、日本文化紹介の時間であった。（私たちはこれを「鳥獣用（超重要）企画」と呼んでいた！）この企画では、和服や高校の制服をはじめ、書道・茶道用具など、かなり重いものを日本から参加者が持ち寄って、アメリカ側へと紹介してくれた。私たちECがあまり言わずとも、彼らが自主的にこのように動いてくれたことは、ECとしても、1人の参加者としても、とても誇りに思うと同時に感動し「やはりJASCは参加者全員が一体となって作り上げるものなのだな」と、ひしひし感じることとなった。

また、インディアナは移動時間が多いことも、参加者の親睦を深める点でプラスに働いたのかもしれない。私自身、2～3時間のバス移動の中、多くの参加者と本当に様々なことを話し合った。人権問題について討論したり、日本語を教えたり、そのような「話すことしかできないフリータイム」という予期せぬ「プログラム」によって、多くの参加者が親睦を深められた。

総じて、インディアナサイトは普段見ることのない日本像を垣間見たり、KASCとの交流で様々な点で衝突と共鳴を繰り返したり、加えて、普段の活動を越えて友情をはぐくむことができたサイトであったと言えるだろう。

最後に、このサイトでは、JASCのOBでもあるLarry Ingraham氏をはじめ、たくさんの方々にお世話になった。この場を借りて、お礼申し上げたい。また、アメリカ側実行委員として、インディアナサイトの大部分をコーディネートしてくれたYudaiとDiane、そして私の拙い英語や力不足を常に隣で支えてくれた坂田奈津希にも感謝したい。さらに、超重要企画を主導してくれた参加者であり第63回のECでもある井上聡美にもとても感謝している。多くの方々に支えられ、無事成功に終わったこのサイト。参加者の心に深く刻まれれば、幸いである。本当にありがとうございました。

写真：インディアナサイトコーディネーターズ
（左から坂田・Yudai・高田・Diane）



写真：初めてのリフレクション後、全員で

ワシントンD.C.（8月1日～8月8日）

8月1日（日）　ワシントンD.C.到着
8月2日（月）　スカベンジャーハント・国務省訪問
8月3日（火）　日米安保フォーラム・「50年後の日米」スペシャルトピックディスカッション
8月4日（水）　スミソニアン博物館見学・日本大使館主催レセプション
8月5日（木）　シャトーヴィル訪問・タレントショー
8月6日（金）　連邦議会見学・ホームステイ
8月7日（土）　ホームステイ
8月8日（日）　ニューオリンズサイトへ移動
＊宿泊場所 George Washington University Potomac House

■サイトテーマ

アメリカの「力」を探る
～国家としての歩みと未来～

ホワイトハウスや連邦議会など連邦政府三権の最高機関をはじめとして、合衆国を動かす英知と情報が集まるワシントンD.C.。イラク派兵から、金融財政政策や産業貿易政策の決定まで、国際政治、経済の全てに影響を与えるこの地はいまや、米国内はもとより世界の政治、経済の中心たる都市である。ワシントンD.C.での活動を通して、学生達は他国にはない「アメリカの力」を改めて認識するだろう。未来志向の「日米」関係を知るために、強大な国家「アメリカ」とは何かを、対話を通して探りたい。第2サイトでは、政治、経済…様々な分野の第一線で活躍する方々との対話を通し、アメリカ合衆国の「力」を直に感じていきたい。

■活動の指針と目標

・日米関係「NEXT50」を考える。
・国際機関および、アメリカ政治の中心地において各種フィールドトリップを行うことを通して、参加学生の知見を広める。

■具体的活動

・安保フォーラム：
-Dr. Michael Green – Center for Strategic and International Studies (CSIS) Senior Adviser and Japan Chair
-Dr. Patrick Cronin – Center for New American Security(CNAS) Senior Advisor and Senior Director of the Asia-Pacific Security Program
以上両氏による講演およびQ＆A
日米学生による沖縄基地問題、日米安保50年間についてのプレゼンテーション
・国務省訪問：アメリカ外交政策についての講演
・ホームステイ

8月3日

第62回日米学生会議　安全保障フォーラム

スペシャルトピック　NEXT50の日米関係

本年度会議では、ワシントンD.C.において新安保50周年の年に学生としてNEXT50の日米関係を考えようと言う意図のもと、安全保障フォーラムを開いた。本フォーラムに備え、日本側学生は事前活動にて学生有志で沖縄研修を行い、それを踏まえプレゼンテーションなどを行った。

・安全保障フォーラムプログラム

1. 以下の両氏による講演およびQ＆A
   -Dr. Michael Green － Center for Strategic and International Studies (CSIS) Senior Adviser and Japan Chair
   -Dr. Patrick Cronin － Center for New American Security(CNAS) Senior Advisor and Senior Director of the Asia-Pacific Security Program
2. 日米学生による沖縄基地問題、日米安保50年間についてのプレゼンテーション

1. Dr.GreenとDr.Croninによる講演

両氏ともに日米関係の分野では大変ご高名な研究者でいらっしゃるが、お忙しい中日米関係を考える若者のためにと無償で講演を引き受けてくださった。

通常は大変学術的なお話に偏りがちな講演内容も、我々学生の未来を考える熱意に合わせ、いかにしてこれからの時代を考えていくべきなのかというより幅広い視座に基づいたご講演を頂いた。

グリーン氏は、日米関係の歴史を説明し、新渡戸稲造の「太平洋を繋ぐ橋になりたい。」という発言から、国際連盟への同氏の関わり、国際人として、自らの足で実際に外国を見ることが国際人には必須の条件だと発言したことなどを紹介した。その上で日米両国間の相互理解には日米両国の人材交流が欠かせないとおっしゃられていた。現在の日米関係についても自民党から民主党への政権交代について説明が行われ、鳩山首相時代から今に至る日米関係は「危機（Crisis)」ではなく「漂流（Drift)」であるが、日米関係が「漂流」した経験は歴史から見てもこれが初めてではないものの、多くのチャレンジが今回は潜んでいるとおっしゃられた。

その他、日本では75%の国民が日米同盟を支持しており（特に若い世代で顕著)、米国においても、英国、カナダの次に信頼がおける国として日本が挙げられている事例から、両国民のそれぞれの国に対する信頼度がいかに高いか、日本とのFTA締結についてもその期待度の高さが伝えられた。また、米国は世間で言われているように中国とのG２であるとか、日本との関係をダウングレードするなどはありえないと断言した。

クローニン氏は、「ここにいる皆さんが10年、20年、30年先の日米関係を動かす人材となってほしい」との期待を述べてくださった。クローニン氏は日米関係を理解するにあたって、まず我々が住んでいるこの世界がいかに危うい世界であるかを理解する必要があるとおっしゃられた。国家間のリスクのみならず様々なアクターが原因となるリスクが現代には多く潜んでいるという事だ。そして、現代の危機として伝統的な危機ではなく、「グローバル・コモンズ」に対する危機、特にサイバースペースの問題について指摘された。サイバースペースの脆弱性については北朝鮮が韓国をサイバー攻撃した事例もあげられた。また、将来については、気候変動や、自然資源獲得競争などの「Natural Security」がより大きな問題として各国が取り組まなくてはならなくなるだろうとおっしゃられた。

2. 日米学生双方による日米関係についてのプレゼンテーション

このセッションでは、日米両国学生の代表がそれぞれ日米関係について考えることを発表した。日本側からは、片山、栗原、竹内、森田の４名が事前活動での沖縄研修を踏まえ、日米関係における沖縄問題の重要性とその解決について、単に国

際政治的な視点からのみならず直接地元の大学生や辺野古の基地移設反対運動をする方々と対話をした上で、沖縄基地問題に対していかに両国がコミットしていくべきなのかを語った。また、アメリカ側代表として William Coremin と Paul Horak がサンフランシスコ講和条約以来の日米関係についてのプレゼンテーションを行うと共に日本の存在の重要性についてアメリカ人として発表を行った。

フォーラム終了後には寮において、全学生が参加者が自ら選定した8つのスペシャルトピックテーマに分かれディスカッションを行った。東アジアの安全保障における中国の存在、日本における靖国問題など、日米関係の次の50年を考えるにあたって重要な要素について多くの学生が議論を交わし、日米学生会議として何が出来るのかを両国学生同士で確認し合った。

8月4日

日本大使館レセプション

ワシントン D.C. に位置する日本大使館旧公邸にて在米日本大使館様によりレセプションを開催して頂いた。レセプションでは在米国日本国大使館の林肇公使より2週間が過ぎた日米学生会議学生全体への激励と共に、昨今内向きと称される日本人が多いと聞く中で、JASC の日本側学生を見て大いに日本の未来に安心したとのお言葉を頂いた。本レセプションには在米大使館の職員の皆様を初めとし、アメリカ側のアラムナイの方も多くいらっしゃっており、本会議中にて始めて多くのアラムナイの皆様と交流し、JASC の昔話等を聞く機会となった。

8月5日

シャトーヴィル訪問

バージニア州郊外に位置する、1997年に若者の芸術活動を支援するために設立されたシャトーヴィル財団を訪問し、その本格的な劇場にて日米学生会議の文化であるタレントショーを行った。これは、個々人が自らまだ隠している才能(音楽、ダンス、マジックなど)を全員の前で披露することを通して、より深く自分を知ってもらうための企画である。本年は日米の学生合同での寸劇など楽しい出し物が催され、両国学生の絆を深めた。

写真：シャトーヴィルの劇場での集合写真

8月6日～8月7日

ホームステイ

日米学生会議では毎年、学生同士の交流のみならず両国の相互理解に資する活動として、現地で暮らす方々の下でホームステイをさせていただいている。

本年はワシントン D.C. サイトでホームステイが行われ、実行委員を除く参加学生はバージニア州郊外の17の家庭にてホームステイを体験させて頂いた。

参加者のホームステイ体験記（高橋 亜矢）

ホームステイの二日目では、JASCer のあきえ、ゆりえと一緒に、一日ホストファミリーの方々と楽しく過ごしました。

午前中は、ホストファザーに郵便局やスーパー、近所で毎週行われているファーマーズマーケットに連れて行って頂きました。スーパーでは品数の多さと大きさに驚き、ファーマーズマーケットでは地域の農家で作られている色鮮やかで新鮮な野菜や果物、バターやチーズなどの乳製品やワインなどが売っていて、試食をしながら現地農家の人とのお喋りを楽しみました。ちょうどこの日が母の誕生日であったため、母へのお土産にヴァージ

ニア産のワインを買うこともできました。

午後には、ホストファミリーの方と一緒に出かけ、本屋やショッピングモールに連れて行っていただきました。夕方からは、日本語を学んでいるというホストシスターの友人たちが3人遊びに来て、一緒に夕食を楽しみ、アイスクリームやクッキーを食べながら日本の文化やアメリカの大学生活について夜遅くまで語り合いました。

ホストファミリーの方には、本当の家族のように歓迎していただき、日米学生会議の忙しいスケジュールを離れ、久しぶりにのんびりとした休日を過ごすことができ、忘れられない思い出の一つとなりました。

写真：ホームステイでのワンシーン

■成果と考察

・日米関係「NEXT50」を考える。

新日米安保50周年の本年、次代を担う学生としてこれまでの50年を振り返ると共に、次の50年を考える機会を本開催地では設けた。本年度会議では、任意の事前活動として日本側参加者のみで沖縄研修を行ってきた。研修内では、米軍基地や米国総領事等の米国の声、沖縄県、名護市長などの行政の声、普天間基地の辺野古移設反対運動家の方々や、地元学生等の地元の声と多面的にこの沖縄基地問題をとらえてきた。その上で本開催地においては「安保フォーラム」を開催し、これまでの日米関係と今後の展望をマイケル・グリーン氏、パトリック・クローニン氏に講話いただいた後、日本側学生、アメリカ側学生による沖縄基地問題に関するプレゼンテーションを行った。またその後、このフォーラムを踏まえてスペシャルトピックディスカッションとして7つの切り口から「NEXT 50」参加学生同士で未来を考える機会を設けた。一連のプログラムを通して、両先生から、次代を担う若い学生の力こそが重要とのメッセージを受け取ると共に、日米学生会議として真摯に取り組むべき日米の未来に向き合う時間をしっかり持てたことは、大変貴重な機会となった。

・国際機関およびアメリカ政治の中心地において各種フィールドトリップを行うことを通して、参加学生の知見を広める。

本開催地における分科会フィールドトリップ先は多岐に渡る。(4.の各分科会の報告を参照されたい）第1サイトで議論が温まり始めた各分科会にとって、本サイトにおけるフィールドトリップで得た知識はその後の分科会ディスカッションを展開するに当たり良い刺激となった。

■サイトコーディネーター後記

【杉本　友里】

まず、日米両国側にて、DCサイトでのプログラムの計画、実施ご協力いただいた、全ての皆様、この場を借りて心より感謝の気持ちを伝えたい。そして、サイト担当として東奔西走してくれたLeah、David、同じ日本側実行委員として支えあった安川にも、特別の感謝を伝えたい。しかし、参加者それぞれに、疲労も募り、また、少々無理のあるプランの中でかなりの負担を課してしまったことについては、申し訳ないばかりだった。他の実行委員の応援と、参加者全員の協力がなければ、DCでの1週間を乗り切ることはできなかった。

このサイトの企画にあたって意識したことは主に2点ある。1点目は、首都であるDCにしかない資源や情報を活用することだ。米国国務省、日本大使館訪問や、Smithsonian周遊、各RTでの集中的なＦＴなど、様々な場所や人を訪れ、とにかくインプットした1週間だったように思う。

2点目は、日米安全保障フォーラムの実施だ。

特に日本側では、事前活動の一環として日米安保に関する勉強会や、沖縄研修の集大成の場、そして、参加者同士が将来の日米関係について真摯な意見交換をするアウトプットの場として、実施前から大きな期待と緊張を持して臨んだ。ところで、「日米学生会議」といえど、必ずしも参加者全員が日米関係に関心があるわけではない。しかし、第62回会議では、一貫してこのテーマに取り組んできたことで、大なり小なり、参加者個々人が『私たちの課題』として位置づけられたのではないだろうか。それは、結果的には「安全保障」ほど、高次ではないかもしれない。しかし、私たちは確かに、日米の学生として、日米の過去・現在・将来について議論した。もちろん結論は出ない。それでも、自分たちなりにことばを紡ぎだし、伝え、伝えられようとしたのだ。この経験が、いずれ、それぞれが描く日米関係を、個人の次元、あるいはより高次で実現するきっかけとなることを願う。

【安川　皓一郎】

アメリカ側開催時の日本側サイトコーディネーターの大変さが身にしみた経験となった。私自身にとっても不慣れな外国の地において、サイトコーディネーターとして他の誰よりも事前知識、準備をしてリードして行くという事は極めて難しかった。準備機関から連絡も怠りがちになりながらも、インターン経験で地の利のあるDavid、いつでもフォローアップをしっかりしてくれたLeah、そして、私の代わりに多くの情報共有をしてくれた杉本には感謝の言葉をいくら述べても足りない。JASCer独特のフランクさのおかげで第1サイトを経て既に仲良くなっているとはいえ、平穏なインディアナから大都市であるワシントンD.C.へ移動してきての緊張感は少なからず多くの日本側学生から感じられた。そのような中でも、数多くのプログラムをしっかりとこなせたことは重要なことであり、また、多くの学生にとってホームステイ経験の場となったワシントンD.C.サイトが思い出に残る事を強く願っている。

最後に、在米日本大使館でのレセプションにお招き頂きました林肇公使、また本サイトでの重要な企画である安保フォーラムに際し、講演者の先生方を探すのに本会議直前になってご助力頂いたUSJI(U.S.-Japan Research Institute)の安永修章様等日本の学生が日米関係について考えることを助けてくださった多くの在米の日本人の皆様に感謝の辞を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

写真：ワシントンD.C.サイトコーディネーター
（左からDavid・杉本・Leah・安川）

ニューオーリンズ（8月8日～8月14日）

8月8日(日)　ニューオーリンズ到着、オリエンテーション
8月9日(月)　分科会フィールドトリップ
8月10日(火) Habitat For Humanity でのボランティア、スペシャルトピック
8月11日(水) World War II museum 見学、WWII についてのスペシャルトピック
8月12日(木) BP 社メキシコ湾原油流出事故についてのスペシャルトピック
ニューオーリンズ・フォーラム
8月13日(金) タレントショー、フレンチクオーター地区見学、
ジャズコンサート鑑賞
8月14日(土) サンフランシスコに出発
※宿泊場所：India House Hostel

■サイトテーマ

カトリーナからの再出発
～歴史、人種を超えた協働～

19世紀フランス植民地時代の街並みを残すフレンチクオーター地区やジャズミュージックで有名なニューオーリンズ。「アメリカの中のヨーロッパ」とも言われ異国情緒漂うこの地は、かつては全米最大の奴隷市場として栄え、人種間差別や対立が絶えない場所でもあった。そのニューオーリンズに2005年8月、ハリケーン・カトリーナが上陸し、人口の半数を占めるアフリカ系アメリカ人居住地区を中心に甚大な被害を与えた。しかし、その復興への願いは人種、地域、さらには国を超えた協力を生み出し、町は今生まれ変わりつつある。 第3サイトでは、復興の途上にあるこの地で地域住民との対話や交流を重ね、大災害の現実と歴史や人種を超えた協働の理解を目指す。

■活動の指針と目標

・ハリケーン・カトリーナと復興活動への理解
・「米国が捉えた第二次世界大戦」を学ぶ
・文化体験

■具体的活動

・Habitat For Humanity でのボランティア
・World War Ⅱ Museum 見学、WW Ⅱについてのスペシャルトピック
・BP 社メキシコ湾原油流出事故についてのスペシャルトピック
・ニューオーリンズ・フォーラム
・フレンチクオーター地区見学、ジャズコンサート鑑賞

8月8日(日)
ニューオーリンズ到着、オリエンテーション

前サイトのワシントン D.C. では最後の2日間にホームステイを行ったため、この日は空港にて集合後、ホストファミリーとお別れをしてから、2日ぶりに会う参加者同士で再会のハグを交わし、飛行機に乗り込む慌ただしい移動となった。有名なニューオーリンズ出身のジャズ奏者の名を冠したルイ・アームストロング国際空港から、整備されていないガタガタの道に揺られてバスが着いた先は、バックパッカーも利用する現地のユースホステル。先に到着した日本側参加者の中には、ワシントン D.C. の整然とした街並みとの差に驚く者や、移動の疲れと現地特有の蒸し暑さに体調を崩す者も居り、日米学生会議が初めて南部にやってきたのだということを改めて実感することとなった。

夜の全体オリエンテーションでは、サイトコーディネーターより脱水症への処置や体調管理に関する注意喚起、治安や外出時間についての注意などが他のサイトよりもかなり入念に行われた。

8月9日(月)

分科会フィールドトリップ

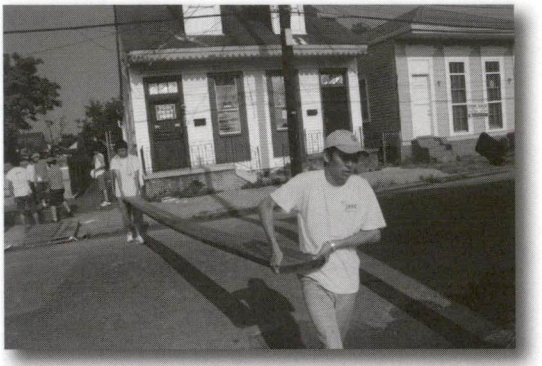
ニューオーリンズでの活動日初日。ホームステイと移動日を挟んだため、約3日ぶりに公式のRTタイムが設けられた。久しぶりの議論の場であり、ちょうど会議の折り返し地点でもあることから、多くの分科会が、今後の方針やファイナル・フォーラムでの発表内容について意見交換を行っていた。しかし、今までの疲れが溜まり、蒸し暑い気候にも慣れない中で、また前2サイトの快適な寮とは打って変わって空調もままならないユースホステルでなんとか場所を見つけて議論を行う必要があり、疲労や苛立ちで集中し辛い環境になってしまっていた。朝から午後にかけて長時間のRTタイムを設けたため、フィールドトリップを行う分科会や、気分転換に全員で街を見学する分科会もあり、残された時間も半分となった分科会活動を充実させようとどの分科会も苦心していた。

午後はフリータイムとし、多くの参加者がフレンチクオーター地区に観光に繰り出していた。第3サイトともなると、日本側、米国側といったまとまりは薄れ、日米の参加者が自然に集まり、皆で有名なCafe Du Mondeのドーナツや、街の至る所で演奏されているジャズの音色や、バーボン・ストリートの喧騒を楽しんでいる様子であった。

8月10日(火)

Habitat For Humanityでのボランティア、スペシャルトピック

NPO団体であるHabitat For Humanityは、カトリーナ被災地において、被害を受けた住宅を建て直し、市民に提供するという活動を行っている。その活動は世界100カ国で行われ、ボランティアとして日本からも多くの学生が参加している。私達はそのボランティアのため、朝早くバスに乗り込み、活動場所に向かった。到着後は、職員の方からオリエンテーションを受け、2グループに分かれての作業となった。朝8時から夕方16時までの8時間もの間、炎天下で実際の建築に携わり、木材運びやペンキ塗りなどを行った。最初こそ仕事に慣れなかったが、作業の中でお互いが協力し合い、後半になると皆率先して、ボランティアに参加した。その後はホテルに向かい、夕食を食べた後、スペシャルトピックを行った。



写真：Habitat For Humanityでのボランティア

8月11日(水)

World War II museum見学、WW IIについてのスペシャルトピック

この日はThe National World War II Museumを訪れた。この博物館は第二次世界大戦に対するアメリカの貢献を記念して、ノルマンディー上陸作戦から56周年であった2000年の6月6日に、ヨーロッパや太平洋諸国への上陸用舟艇が作られていた地であったニューオーリンズに開かれたものである。ボランティアガイドの方に簡単な説明をして頂いた後、自由に館内を見学して回った。大戦で使用されたモデルの軍用機や大戦当時の米国で

発行された風刺画、米兵の証言ビデオなどの展示物とそれらの展示方法から、日本側参加者は米国が捉える第二次世界大戦の一端を学ぶことが出来たのではないかと思う。

また、見学後は館内のホールで参加者全員が博物館の感想や展示に対する意見を交換するとともに、WW Ⅱに関するスペシャルトピックの時間を設け、「戦争とメディア」「戦時中の従軍女性」などのテーマについても議論をした。日米両国の学生が、過去に起きた日米間での戦争について互いの認識の違いに触れ、現在、ひいては将来における日米関係に関しても考える大変貴重な機会となった。

8月12日(木)

BP社メキシコ湾原油流出事故についてのスペシャルトピック、ニューオーリンズ・フォーラム

午前中はホステルにて、日本でもニュースに取り上げられ、ニューオーリンズも被害を受けていたBP社のメキシコ湾原油流出事故について小グループに分かれて意見交換を行い、午後のフォーラムへの準備とした。午後はTulane Universityに移動し、"Recovery from Natural and Man-made Disasters: Lessons Learned' をテーマとしたフォーラムを行った。

講演者と講演の表題は以下の通りである。

- "The Offshore Energy Industry- Challenges and Opportunities"
  - Mr. J. Keith Couvillion (Chevron U.S.A. Inc.)
- "Habitat for Humanity and Rebuilding New Orleans"
  - Mr. Jim Pate (New Orleans Area Habitat for Humanity)
- "Louisiana's Trilogy of Human Caused Disasters:coastal wetland loss, Katrina flooding, and the BP oil gusher."
  - Dr. Robert Thomas (Loyola University)
- "Inside the New Orleans Recovery: Experiences Gained, Lessons Learned, People Touched"
  - Mr.Travis Henry (Formerly of Recovery Department of the City of New Orleans)

これまでのニューオーリンズでの滞在中に、実際にHabitat for Humanityで復興支援ボランティアを体験したり、地域に住む人々の暮や家の様子を見たり、5年前の災害の爪跡が残る街の雰囲気を肌で感じていたことなどから、参加者全員が熱心に講演に耳を傾け、自分達が体験した活動や街の印象に基づく質問も活発に投げ掛けられた。講演者の4氏は地域の産業、NPO、研究、行政の各分野を代表して講演をしてくださったので、サイト活動全体を貫く地域復興というテーマについて、より多角的に学び考える機会とすることが出来たのではないかと思う。フォーラム後のレセプションでも、講演者を囲んで熱心に質問をする参加者の姿が見られ、その後のリフレクションでは、いつも話される会議への感想や今後の抱負のみならず、ニューオーリンズという土地に対する意見や感想も次々と共有されたことが印象的であった。

写真：ニューオーリンズフォーラム

8月13日(金)

タレントショー、フレンチクオーター地区見学、ジャズコンサート鑑賞

午前中は分科会に分かれて議論し、午後は自由

に街を散策した。このサイトの滞在最終日ということで、French Quarterで観光したり、ショッピングをしたりなど思い思いにフリータイムを満喫していた。夕方からは、2度目となるタレントショーを参加者が主体となり、開催した。自慢の歌を日米学生がチームとなり披露するもの、ダンスを華麗に踊るものなど様々な個性が発揮され、会場は常に歓声と笑いに包まれていた。

■成果と考察

・ハリケーン・カトリーナと復興活動への理解

未だ爪痕が大きく残る地域に直接赴き、NPO団体Habitat For Humanityと共に参加者が7時間にも及ぶ家屋復旧へのボランティアを行った。またLoyola大学教授を始め、ニューオーリンズ市行政の方を含めた4名の講演者の方々からハリケーン・カトリーナがどのような被害をもたらし、社会的、経済的に影響をもたらしたのかということを焦点にニューオーリンズ・フォーラムを開催した。これらの活動を通して、未だ残るカトリーナの傷跡を改めて知るとともに、その復興へ向けて日々尽力している多くの人々との対話の中で、将来を担う日米両国の学生がこのような地域復興に対して何をすべきなのかを深く考察するきっかけにもなった。

・「米国が捉えた第二次世界大戦」を学ぶ

ノルマンディー上陸の日にオープンしたことからD-Day Museumとも呼ばれ、第二次世界大戦の勝利に対するアメリカの貢献を記念して建てられたNational WWII Museumを訪問した。大戦で使用されたモデルの軍用機や大戦当時の米国で発行された風刺画、米兵の証言ビデオなどの展示物とそれらの展示方法から、日本側参加者は米国が捉える第二次世界大戦について学ぶことができた。

また館内では、日米の学生が博物館見学の感想や展示に対する意見などを交換するとともに、WW Ⅱに関連したスペシャルトピックを設け、「戦争とメディア」「戦時中の従軍女性」などのテーマについても議論をした。日米両国の学生が、過去に起きた日米間での戦争について互いの認識の違いに触れ、現在、ひいては将来における日米関係に関しても考える大変貴重な機会となった。

・文化体験

19世紀のスペイン・フランス植民地時代の建築物が残るフレンチクオーター地区を訪問し、「アメリカの中のヨーロッパ」とも言われる異国情緒あふれる街並みを見学した。また、この地で生まれたジャズミュージックについて、ホテルでのコンサート鑑賞や街中での地元の人達の演奏を楽しむなど、様々な歴史や人種が混在するニューオーリンズの文化を体感することができた。

ハリケーン・カトリーナの被害や格差問題など様々な課題を抱えながらも、被災後も地元での生活を選んだという人々の地域への強い愛着の理由の一端を学ぶことができ、日本側学生のみならず米国側の学生にとっても米国の新たな一面に触れる体験となった。

■サイトコーディネーター後記

【高橋 央樹】

ニューオーリンズは、スペインやフランスなどに植民地化されていた経緯もあるため、ふと立ち入るとここはアメリカなのかと疑ってしまうほど異国情緒溢れた煌びやかな街並みである。ただ実際に中心都市を離れてみると、華やかな街の姿はなく、カトリーナ被害の傷跡が残る住宅街が現れる。そこには活気はなく、夜になると危険なのか出歩く人を見かけることはなかった。

サイトコーディネートをする際は、カトリーナからの被害の現状やそれらからの復興に注力したプログラム作りに励んだ。実際NaokiやMarieの努力があって、Habitat For Humanityでのボランティアや、ニューオーリンズ・フォーラムを開催することもできた。フォーラムでは、カトリーナ復興に携わった多くの方々の講演を通して、カトリーナが何をニューオーリンズにもたらしたのかという点に焦点を当てつつ、大災害への理解を深

めることができた。しかし5日間という4サイト中一番短い中で、地元住民との交流の場をプログラムとして組み込むことができなかった。マクロとしてのカトリーナへの理解を達成できた一方で、よりミクロな視点からカトリーナへの洞察を高めることができなかったのが、コーディネーターとしての後悔である。

また私達がニューオーリンズサイトをコーディネート又は、運営する際に一番気を付けていたのは体調管理であった。実際に30度以上の気温と汗ばむ湿気によって、体調を崩す参加者は多かった。ただ深刻な体調悪化を訴える者がいなかったことは、ファイナルフォーラムが近づいていたこともあり、私達サイトコーディネーターをほっとさせた。サイトコーディネーター同士が協力し合い、体長管理に対しての配慮を常に促すように参加者に伝えていたことがこのような結果に繋がっていただろう。

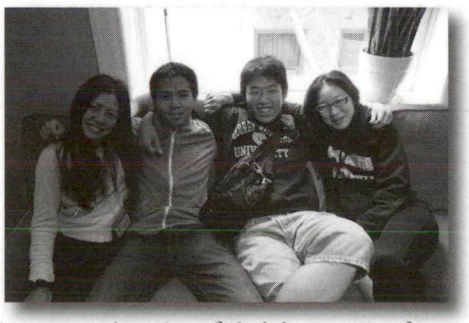
1年間にわたるサイトコーディネーターとしての活動だが、事実上仕事を多数行っていたのは、アメリカ側実行委員であるNaokiやMarieであった。私達自身円滑なサイト運営が行えたのも、彼らの準備が万全であったからである。最後となりますが、サイト運営に協力して頂いた方々とともに、アメリカ側実行委員の二人にもお礼を言いたい。本当にありがとうございました。

【中村 真理】

約1年前、担当サイトを相談するECメーリスでNew Orleansを希望した背景には、New Orleansに特有の、歴史、人種、文化の融合への興味があった。スペイン・フランス植民地時代の建築物や通りのJazzの音色が観光客に人気である一方で、アフリカン・アメリカンが人口の半数を占め、ハリケーン・カトリーナの際には住み分けの結果形成された貧困地域が大打撃を受けている。その「多様」な暮らしに少しでも多く触れてみたい、と思った。

実際に、サイトとしてのNew Orleansでの体験は、他のサイトと大きく異なるものであったように思う。まず宿泊先が、前2サイトのような大学ではなく、多数のバックパッカーが泊まる地元のユースホステルであったこと。これはとりわけ日本側参加者にとって大変貴重な体験であると同時に、ファイナル・フォーラムが近づく中で分科会活動の場所を確保することが難しかったり、一般客の方々への配慮を問われたり、といった状況も引き起こした。次に、安全上の管理が特に問題となったこと。コーディネート期間中も、治安への懸念がAECの二人から伝えられており、毎回のアナウンスで、健康管理と外出時の注意を呼び掛けていた。最後に、家造りのボランティアやカトリーナ被害をテーマにしたフォーラムを行うなど、地域そのものに目を向けたプログラムが多かったこと。その結果、このサイトでのリフレクションで唯一、会議の進め方などに加え、New Orleansという土地に対する意見や感想、批判などが次々と共有されていった。5日間の活動日の中で私達が体験したのは、New Orleansに存在する様々な視点の一部であり、この土地が抱える多様で複雑な問題のほんの一部であるが、参加者一人一人がNew Orleansを肌で感じ、考えを巡らせていたことがとても嬉しかった。

最後になりますが、New Orleansサイトでのプログラム実現にご協力いただいた皆様に、日本より感謝申し上げます。そして、現地に出向くなど充実したプログラム作りに1年間奔走してくれ、また日本側の希望も快く取り入れてくれたAECコーディネーターのNaokiとMarie, JECコーディネーターのひろきにも感謝しています。どうもありがとうございました。



写真：ニューオーリンズサイトコーディネーター
（左から中村・Naoki・高橋・Marie）

サンフランシスコ（8月14日～8月21日）

8月14日（土）サンフランシスコ到着
8月15日（日）オリエンテーション
　　チャイナタウンでの夕食会
8月16日（月）ファイナル・フォーラム直前準備
8月17日（火）ファイナル・フォーラム
8月18日（水）新実行委員選挙、マイノリティ・フォーラム、
　　サンフランシスコ総領事館邸にてレセプションパーティー
8月19日（木）Angel Island 見学（任意参加）
8月20日（金）ファイナル・リフレクション
8月21日（土）サンフランシスコ出発
※宿泊場所：San Francisco Downtown Youth Hostel

■サイトテーマ

世界最先端都市とアジア移民
～マイノリティの歴史を探る～

最先端技術産業が集積するシリコンバレー、毎年多くの観光客で賑わうノースビーチやフィッシャマンズウオーフ。様々な顔を併せ持ち、世界中にその名を轟かせる全米有数の都市、それがサンフランシスコである。観光都市としてその華やかさが有名でありながら、「移民の国」であるアメリカにあって、特にアジア系移民が多いことで知られる。マイノリティーに対する厳しい偏見や差別の矛先は、排日移民法や西海岸の移民の玄関Angel Islandを象徴的な存在として、彼らにも向けられてきた。第4サイトでは、移民への差別や排除の歴史について学び、人種や民族の融合の過程に見る「自由の国」アメリカの本質を探り、1ヵ月に渡る会議の終着点を迎えたい。

■活動の指針と目標

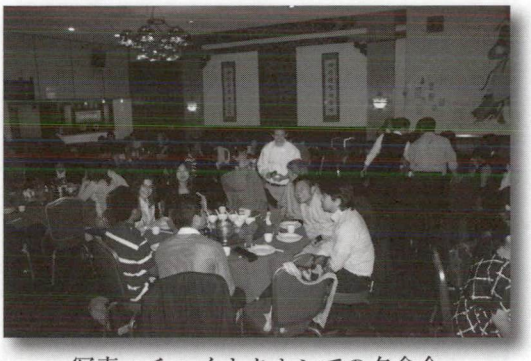
・サンフランシスコにおける人種や文化の多様性を体感
・1ヶ月の集大成を社会に発信
・会議後も活動を継続していくための土台形成

■具体的活動

・ファイナル・フォーラム
・マイノリティ・フォーラム
・新実行委員選挙
・ファイナル・リフレクション

8月15日（日）
オリエンテーション・チャイナタウンでの夕食会

朝食後にサイトオリエンテーションを行い、施設に関する注意事項や各分科会への部屋の割り当て、体調管理の徹底などがアナウンスされた。夕方にはチャイナタウンで夕食会が開催され、疲れの様子が見えてきたメンバーにとっては絶好の気分転換の機会となった。夕食会終了後には次期実行委員選挙についてのアナウンスがなされた。1ヶ月近く続いてきた会議の終了を多くのメンバーが意識し始めた瞬間となった。



写真：チャイナタウンでの夕食会

8月16日（月）

ファイナル・フォーラム直前準備

ファイナル・フォーラム前日となったこの日。全ての分科会が最終発表の作成や最後の詰めの作業に従事した。発表原稿を作成する者、原稿の発表練習を行う者、準備が終了し力尽きた者…　様々な表情の参加者でごった返したラウンジでの「最終調整」は明け方まで続いた。

写真：最終発表に向けて議論する分科会メンバー

8月17日（火）

ファイナル・フォーラム

いよいよ迎えたファイナル・フォーラム当日。1ヶ月間の会議の成果を社会に発信するべく各分科会最後まで発表準備に追われた。フォーラムではまずUC Berkeleyで社会科学を専門とするT.J. Pempel博士より御講演を頂き、続いて7つの分科会によるプレゼンテーションが行われた。その後、会場内で各分科会のブースが設けられ、発表内容についての活発な議論が行われた。フォーラム終了後には、メンバー一同サンフランシスコの街に繰り出し、ほとんどホテルに缶詰状態だったフォーラム前の2日間を取り戻すかのように自由時間を楽しんだ。その一方で、翌日に迫った新実行委員選挙に向けて、立候補者は長い夜を過ごしていた。

写真：ファイナル・フォーラムの発表風景

8月18日（水）

新実行委員選挙、マイノリティ・フォーラム、レセプションパーティー

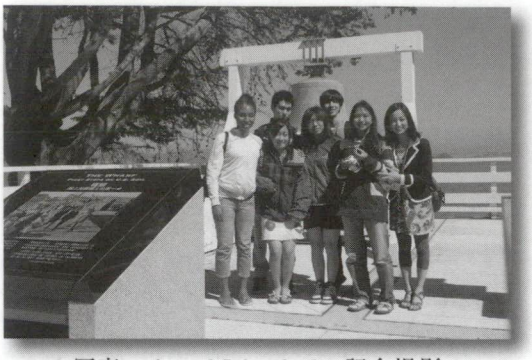
午前中は市立図書館の一室にて、新実行委員候補者達による立候補演説が行われた。立候補者の数は日米あわせて25名にも及んだが、最終的に投票、集計のプロセスを経て、日米8名ずつの新実行委員が選出されるに至った。その後行われたマイノリティ・フォーラムでは、「戦時期のマイノリティ」というテーマで、3名のパネリストの方から講演を頂いた。夕方には、サンフランシスコ湾が一望できる高台に立地する日本総領事館でのパーティーが行われた。各界から著名な方が集まるなか、メンバーは豪華に並べられた料理に舌鼓を打ちながら、貴重な交流の機会を楽しんだ。

8月19日（木）

自由時間、Angel Island見学（任意参加）

1ヶ月間に渡ってタイトな予定をこなしてきた参加者にとって、終日自由時間となったこの日は貴重なリフレッシュの時間となっただろう。市内をレンタサイクルで観光したり、「移民の玄関」の愛称を持つAngel Islandを訪問するなどして、最終サイトを思い思いに満喫した。また、新実行委員として選出された参加者たちは、市立図書館の一室で役職担当や次年度会議の内容について、1

日中話し合うこととなった。



写真：Angel Islandでの記念撮影

8月20日（金）

自由時間、ファイナル・リフレクション

日本への出発を翌日に控えたこの日も一日の大半が自由時間となり、メンバーは市内の観光地を回るなどして過ごした。夕方には浜辺のベトナム料理屋を貸しきってファイナル・リフレクションが開催され、各々が1ヶ月間の会議を思い思いに振り返った。また、新実行委員からは来年度会議の理念や分科会内容が発表され、いよいよ会議のバトンは次年度へと渡されることとなった。

写真：新実行委員による発表

8月21日（土）

サンフランシスコ出発

会議最終日、日本側参加者が日本へ出発するときを迎えた。ホテルのロビーに全員分用意されたJASCメール用封筒には、1ヵ月分の思い出とともにたくさんの手紙が詰めこまれた。空港ではメンバー同士でプレゼントを渡しあったり、写真を撮るなどして思い思いに別れのときを過ごした。最後に「また会おう」と再会を誓い合い、第62回会議の幕は閉じた。

写真：第62回実行委員での集合写真

■成果と考察

・サンフランシスコにおける人種や文化の多様性を体感

サンフランシスコは、「移民の玄関」としての歴史性から、特にアジア系移民の比率が高い。市域には、チャイナタウン、ジャパンタウンなどのアジアの国々の名前を冠したエリアが点在し、起伏の激しい格子状の街並みのなかには多様な文化や人種が混在している。

このような、サンフランシスコでの人種・文化の多様性と、その背後に存在する差別の歴史や現状を参加者に体験し学んでもらうため、2日目のチャイナタウンでの夕食会や5日目のマイノリティ・フォーラム、6日目のAngel Island訪問などの様々なコンテンツを企画した。また、ファイナル・フォーラムに向けた準備が中心となった当サイトでは、比較的自由時間が多く、それらを利用して各参加者が自主的に様々な場所を訪問することができたようである。

このように公式行事としての企画に豊富な自由時間を使った観光等が相まって、多くの参加者にとって、他の3サイトとは一味違った、多様な文化を体感できるサイトとなったことだろう。

・1ヵ月の集大成を社会に発信

サンフランシスコでは、分科会におけるディスカッションの成果発表を中心とした、1ヶ月間の集大成となるファイナル・フォーラムが開催され

た。

7つの分科会による10分間ずつのプレゼンテーションは、その議題レベル（マクロ・ミクロ）や形式（概念の整理・プロジェクト提案型）の違いを問わず、日米の学生が様々な障壁を乗り越え纏め上げた力作となっており、その後の参加者との交流も含め、非常に質の高い発表であった。

・会議後も活動を継続していくための土台形成

しかし、具体的な提案を行った分科会が存在していながらも、会議後に継続的な活動を行っている分科会は、現時点では残念ながら存在していない。今後の課題としては、1ヵ月の議論で得た知見や提案を、各参加者がそれぞれの生活や専門分野のなかでどのように生かし、実践していくのかという点に集約されるだろう。その意味で、会議での議論を「社会に発信」していく作業は、参加者それぞれが今後とも継続的に行っていく使命なのではないだろうか。

また、第62回会議全体としては、そのような議論が今後とも継続するよう、定期的な勉強会や話し合いが行える環境を提供していく所存である。

■サイトコーディネーター後記

【加藤 梓】

サンフランシスコは第62回日米学生会議に参加した全ての者にとって様々な感情が入り混じるサイトだった。ファイナル・フォーラムの直前準備に対する焦り、JASCの終わりに描いていた自分の理想と現実とのギャップを受け入れる辛さ、1ヵ月走りぬいたことへの達成感、1年間精一杯作り上げてきた日米学生会議を次の代の実行委員に引き継ぐことに対する寂しさ。決して簡単に言葉に出来ない想いを個々人が持っており、気持のベクトルもあらゆる方向を指していた。

ファイナル・リフレクションでは、過ぎ去った日々の中の自分と向き合い、同じ空間に常にいた仲間と向き合うことで、自分にとっての日米学生会議の活動における点と点が結ばれ、線になったはずだ。さらに、それを真正面から70人に共有したことで、一人一人の線がつながり、何かの「カタチ」を描き、62らしさを創ったのだろう。

ゴールデンゲートブリッジを背に多くの参加者が口にした、「日米学生会議はスタートラインにしか過ぎない。この後の自分が日米学生会議で学んだことを活かさなければ。」という言葉は、参加者一人ひとりにとって、どれほど第62回日米学生会議が真剣に取り組むべき存在だったのかを示していると思う。

第62回日米学生会議は決して16人の実行委員だけで作り上げてきたものではない。未熟である私を補完してくれたサンフランシスコサイトコーディネーターを始めとするEC16人、さらに常に手を差し伸べてくれて、62回を最高のものに作り上げてくれた参加者全員に感謝の意を表したい。

【大宮 透】

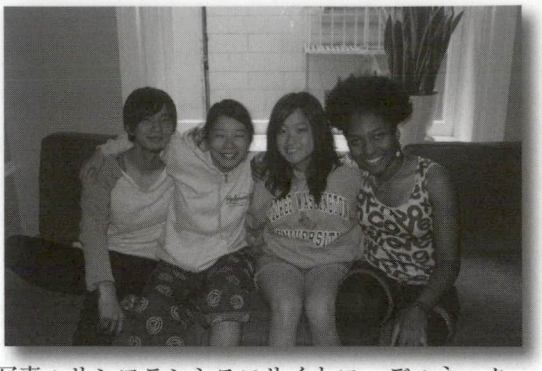
私たちサンフランシスコサイトコーディネーターは、サイト運営において以下の4つの目標の達成を目指して活動していた。すなわち、①参加者がファイナル・フォーラムに向けて十分な準備ができる時間と環境を作ること、②1ヵ月の集大成となるファイナル・フォーラムを成功させること、③新実行委員選挙において満足度が高く円滑な運営を行うこと、さらに最終サイトとして、④参加者同士が自由に交流できる時間を豊富に提供すること、である。予期せぬトラブルもあったが、結果としてこれらについては概ね達成できたと感じている。多種多様な観光施設、豊かな歴史性に彩られたサンフランシスコの特色、発達したバスや地下鉄等の公共交通、その他様々なサイト独自の魅力がこの目標達成を手助けしてくれたのは言うまでもない。

また、第3サイトとの環境面における急激な変化から参加者の体調が心配されたが、特に問題なくサイトを終了できたことは、実行委員として非常に安堵している点だ。この場を借りて各自体調管理を徹底してくれた参加者全員に感謝の意を表したい。

個人的な話を少しすれば、米国への渡航経験が

ない私にとって、その米国開催におけるサイトの企画・運営を自分が担えるのかどうか、これは1年を通してずっと悩んできたことだった。しかしそんな頼りない私を最後まで見捨てず、このような素晴らしいサイトを一緒に作り上げてくれた当サイトコーディネーターの梓、Ikuno、Mariamaの3人には心の底から感謝の気持ちを伝えたい。本当に最高のパートナーだった。彼らと交わした膨大な量のメールと、サンフランシスコを走り回った日々は、私にとってかけがえのない一生の思い出である。

最後に、日米両国において当サイトの成功のために陰日向で尽力していただいた全ての方に感謝の念を申し上げて、サイトコーディネーター後記としたい。本当にありがとうございました。



写真：サンフランシスコサイトコーディネーター
（左から大宮、Ikuno、加藤、Mariama）

第４章

分科会活動

学生と社会参画…… 46
２１世紀における日米の教育…… 51
安全保障と日米…… 58
社会起業家…… 66
新興国と地球環境問題…… 74
地域再生
- 都市、農村が生き残るために -… 80
国際社会とナショナルアイデンティ
ティ：対立から共存へ…… 88

学生の社会参画

Empowering Today's Youth: Overcoming Challenges in Society

■分科会メンバー

坂田奈津希 *
井上聡美
奥谷聡子
橋本遥
米本大河
David Myers*
Weiying Tang
Carly Lauffer
William Coremin
(* は分科会コーディネーター)

■分科会概要

昨今、様々なフィールドで学生の活躍を垣間見ることができる。学生は、国内に対しては地域発展や高齢者への生活援助、海外に対しては環境問題、途上国援助など、社会において重要な役割の一端を担っているように思える。学校生活は単に勉学に勤しむ場というだけではなくなり、ボランティア活動やインターンシップなどを通して積極的に学外に飛び出そうとする学生の数は増加している。学生がこうした活動を行える背景には、学生は他の世代と比較して様々な特徴を持っているからであろう。時間的な制約のなさや特定の利害関係の薄さなどが挙げられる。しかし、その一方で、こうした活動は学校が提供するカリキュラムに組み込まれ、時に入学試験の評価対象にもなりうる。それゆえ、学生の社会への取り組みは、学校側から提供される形式的なものではないかという批判も存在する。

しかし本来、学生は自らその特徴を生かし、幅広い問題意識を形成する特別な世代であるべきではなかろうか。それゆえ本分科会では、このような学生による社会参画の現状を日本国内にある様々な事例や米国との比較を通して検討し、よりよい参画とは何か、そして学生が持つさらなる可能性とは何か検証していきたい。

■事前活動

我々は、本分科会をメンバーが自ら調査対象を決め、問題意識を紡ぎだしていく「発展型RT」と位置づけ議論を進めることとした。

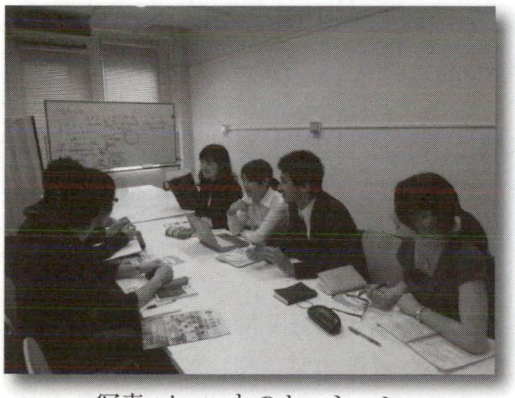
春合宿においては、タイトルにある「学生」や「社会」それ自体の定義や、それらの関係性、「社会に参画する」とは何かについて話し合った。暫定的な分析として、「学生とは、時間的制約や特定のしがらみがない自由な存在である」とした。また学生と社会の関係性については「社会とは、様々なコミュニティの集まりとして構成され、学生はそのコミュニティの中の一つとして存在する。学生コミュニティの特徴は、二つの見えざる壁によって他のコミュニティと分断されている。しかしながら学生も社会を構成する一員であり、将来を担う世代として成長に投資すべきである。よって学生はその見えざる壁を越えて他のコミュニティとのつながりを持つべきである。」とした。

また、6月12日東京大学にてivoteという学生団体にお邪魔させていただいた。この団体は、全

員が学生からなり、特色ある講演会の開催やインターネットを使った取り組みを通して若者の投票率向上を目指した様々な活動をされていた。代表の原田謙介さんによれば、日本の若者の政治意識向上のためには、まずは投票に行ってみることが入口であるそうだ。ivoteはそれを引き出すために、メールを使ったプロジェクトや議員を身近に感じるためのユニークな交流企画など自由で面白く、学生の特徴を活かした活動をされていた。

さらには、調査領域が広すぎるyouth empowermentをより細かくフォーカスするために、独自に"Youthと○○ issues"という枠組みを作り、社会に存在する問題（issues）を分類した。その後、それをもとに各自が自分の興味のあるissueを専門領域として選択、担当し本会議に臨むこととした。

（米本 大河）



写真：ivoteとのセッション

■本会議での活動

―インディアナ、ワシントンD.C.―

まず日本での話し合いを共有した後、この分科会における目標を出し合った。そこでは、日米のユースに焦点をあて、ユースとは具体的にどのような存在なのか、ユースエンパワメントとは何かという私たちなりの定義をしたいということになった。そこでまず、私たちの持っている考え方について共通理解を持つことにした。

第一にユースとは若者のことであって、若くて新しい考え方とやる気に満ちた特定の組織に対して責任を負っていない存在であることが挙げられた。また若者というのは主に大学生の年代のことを指すが、年齢によって判断せず、その人の心の持ちようが一番大切なのではないかという共通見解を持つことができた。またユースの特徴として十分な教育を受けていること、特定の組織に責任を持たないこと、次の世代を担う重要な存在ではあるが、自分たちが未熟であることを理解していなければならないことなどが挙げられた。

次に社会参画の定義について話し合った。私たちの分科会の日本語のテーマは「学生の社会参画」であり英語のテーマは「empowering today's youth」であったため、社会参画とempoweringという単語の間に認識の違いがあった。そのため社会参画ではなくempoweringという共通の単語を使って話し合いを進めることに決めた。もともとエンパワーという単語は権利を与えるという意味を持つが、私たちのイメージとしてエンパワメントとは大きな組織や大きな権力を持った人から権利やチャンスを与えられるだけでなく、ユースのほうから権力を得ようとし、またチャンスを生かしていくという二つの方向を示しているという考えに至った。さらにそういったユースの動きがまた与えられる権利やチャンスを増やしそれがまたユースの活動を活発にするといったような円のような関係が重要であり、そのような関係の中でユースがエンパワーされることでユースの力はより強大になると考えた。そのため、ユースの持っている新しい情報を年配者に伝え、年配者とのコミュニケーションをとっていこうとするようにユース自身の意識も変化させていかなければならないと考えた。その意味で教育もエンパワメントのひとつであるという意見も出た。

また、１人１人のＲＴペーパーについてのディスカッションをして、ユースの特徴についてさらに考えてみることもした。以下はRTペーパーのテーマ内容。

「人種差別とyouth」Carly、「政治参加とyouth」奥谷、「経済とyouth」William、「中国のyouth」Weiying、「地域とyouth」井上、「エンパワーとyouth」橋本、「就職とyouth」米本

（井上 聡美）

—ニューオーリンズ、サンフランシスコ—

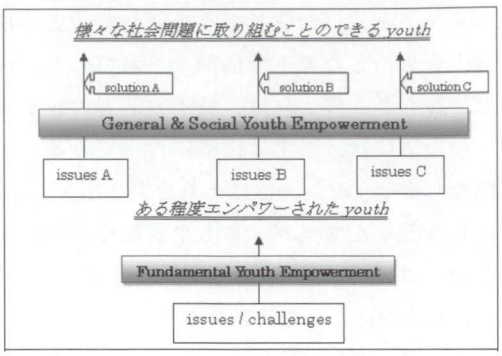
ここまでの議論で youth empowerment の定義について考える際に、youth とは何か、empowerment とは何かに分けて考えてきた。しかし youth は年齢、意識や精神の状態によってその定義を話し合われるべきものなのかという疑問が浮かんだ。と同時にこの議論の統一見解を得るのは困難であり、そもそも youth や empowerment に分けてからの定義付けは私たちが扱うものとはずれているのではないかという意見が出た。そこで、youth や empowerment という個々について考えるのではなく、youth empowerment を一つと捉えて議論を進めることで合意した。また、すべての youth がエンパワーされる機会を与えられるべきであり、エンパワーされることを強制させられるべきではないということを確認した。

そこで基本に立ち返り、私たちはこの RT で究極的に何を話し合いたいのかを共有した。それらは、①今日の youth をエンパワーすることが社会に存在するチャレンジを乗り越えることにいかに作用するのか、②近い将来我々が直面するだろう問題に取り組めるために私たちは youth をいかにエンパワーすることが出来るか、③ youth empowerment とは何か、である。そのために youth empowerment をステップベースで考えることにした。

そこで、社会に生きる youth の前に存在している、あるいは存在しうる issues や challenges、youth empowerment の例として何があるか列挙した後に、それらがどの様な特徴を持ったものなのかを考察した。そして、どれがトップダウンあるいはボトムアップの youth empowerment の標的となるのか分類した。しかし、このトップダウン・ボトムアップという表現では上手く説明できない、事象を適切に表しきれないという問題が浮上し、より適切な表現を求めて悶々と悩んだ。そして youth empowerment を youth-based(youth から発動されるもの) と non-youth-based(youth 以外の存在 (人や組織など形態はさまざま) から発動されるもの) という枠で話し合うことにした。

（橋本 遥）

下図：ステップベースでみる Youth Empowerment



—フィールドトリップ—

1. Campus Progress（ワシントン D.C.）

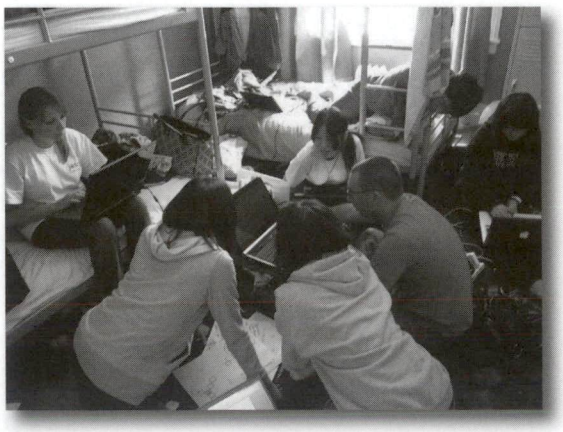
Campus Progress は若者の社会参画を促す団体で、若者の政治や経済に対する意見が政府に受け入れられるよう、活動している。

2. National Youth Rights Association（ワシントン D.C.）

NYRA は若者が主導する非営利団体で、若者の権利と自由を獲得するために活動している。小さな組織をまとめる地域密着型のプロジェクトを運営したりしている。

3. Café Reconcile（ニューオーリンズ）

Café Reconcile とは、ニューオリンズの貧困街に住む若者たちが、プロの調理師になるために訓練することができる非営利のレストランである。料理のみならず、社会人として必要な国語、算数、道徳も学ぶことができる。



■ファイナルフォーラム

アメリカにおいて広く知られているyouth empowermentという言葉だが、日本においてはこの言葉はあまり知られていないのが現実だ。だからこそ、フォーラムに参加して下さった学生を含めたすべての人に私たちの分科会が考えるyouth empowermentとは何か、どうしてyouthをempowerする必要があるのか、そしてそれは社会にどのような影響を与える力を持っているのかについて伝えること、学生自身に私たちの秘める力について気付かせる機会としてファイナルフォーラム発表をすることが私たちの分科会の使命だと確信した。

フォーラムでは以下の8つの項目に分けて発表を行った。

1. 今日私たちの年代のYouthが直面する題とは何か。

就職先の不足といった経済面の問題、コミュニケーション能力の低下などの社会的問題、情報化社会におけるデジタル・デバイドといった情報格差問題、社会の高齢化による若者の意見反映力の低下などの政治的問題が挙げられる。

2. 将来、社会を本格的に担う私たちの年代が直面する問題とは何か

上の世代が未解決のまま負の遺産として私たちの世代に託す地球温暖化問題など国境を越えた環境問題に対する解決策の模索、枯渇する資源と再生可能エネルギーの追求などの課題が存在し、将来の私たちはグローバルな問題にも取り組んでいく必要がある。

3. なぜYouthをEmpowerする必要があるのか

それは、社会の中核である若者は今日と明日のリーダーであり、特に学生などは特定の利害関係に影響されず自由で柔軟な視野を持ち合わせ、新たな技術にも迅速に順応でき、上の世代とは異なったユニークな視点で社会を捉えることができるからだ。

4. Youthによる、よらないEmpowermentの違いについて

Youthによるものは同世代の強い繋がりがあるためにメッセージ性が強く、変化に柔軟に対応する力がある。他方でYouth以外はより大きな資力があり、Youthに新たな問題意識を喚起し、長い経験からYouthを良い方向へ導き、より迅速に変化を可能にする力がある。

5. 社会に存在する問題に取り組むために、YouthをどのようにEmpowerするべきか

YouthによるものにはYouth主導組織による機会提供・啓発活動、ソーシャル・ネットワーキングなどが考えられる。Youth以外によるものには経済的援助や法律改正、ライフスキルなどの技術教育、政治的決定プロセスに若者を含めるなどの方法がある。

6. Youth Empowermentに取り組んでいる団体へのフィールドトリップの発表

7. 私たちのYouth Empowermentの定義

今日の世界は常に変化しており、多くの新しい問題に人々は毎日直面しなければならない。しかし、社会の主要な構成員であるはずのYouthは社会のマイノリティーとして捉えられ、彼らの秘める力は認知されず、軽視されてきた。Youth Empowermentとは若者に権利や権力を与え、学び、意見を発する機会をも提供し、動機づけること、そして世代間のギャップに架け橋をかけることである。それのみならず、新たな可能性に目を開かせ、上の世代と知恵を共有し、Youthが自立し、社会に存在する問題に自ら取り組む主体的存在になるように力を注ぐことでもある。Youthは特徴として活発、柔軟な思考力をもち、特定の利害関係に縛られない存在であるからこそ創造的で革新的なアイディアや発想力をもつ。Youthはempowerされた時、壮大な力を発揮し、社会、そして世界にポジティブな変化をもたらすことができるのである。したがって、今日と明日のリーダー

たる Youth を将来に備え、empower することは明るい未来のために必須なのである。

8. JASC 参加者にとっての Empowerment の定義を聞いたビデオインタビュー

（奥谷 聡子）

■分科会コーディネーター総括

「Youth」という自らも対象者となるトピックを、主観と客観を織り交ぜながら、どう議論していくのか。その「先の読めなさ」に惹かれ、Youth 分科会は誕生した。ミーティング中、自分が youth であるからこそ、偏見がまとわりついて視野が狭くなることが何度もあった。しかし同時に、自分が youth だからこそ、現状に危機感を覚えて必死に解決策を考えようとすることもできた。アメリカでの1ヵ月間は、Youth が youth について考える意義と面白さに気付かされた1ヵ月間でもあった。

Youth RT の第一幕は、分科会メンバーと協力していただいた皆様のおかげで無事終了した。しかし、第二幕はもうすでに始まっている。帰国後、報告も兼ねて、ivote の方々と2回目のディスカッションを行った。このとき、JASC 史上初の試みである Ustream を利用し、世界中に私達の考えを発信することにも成功した。

あるメンバーからはこのようなメールが届いた。「私たちは今 youth だし、歳をとっても youth だった経験は万人が持ってるし、soul あらば永遠に youth だしね！」。Youth 分科会の第二幕はしばらく終わりそうにない。

改めて、Youth 分科会に関わって頂いた全ての方々に心から御礼申し上げます。

そして、Youth のみんな、分科会に真剣に向き合ってくれて本当にありがとう。みんなの考えている顔、悩んでいる顔、悔しがっている顔、喜んでいる顔、全部忘れないよ。Let's have our second skype reunion soon!

（坂田 奈津希）

21世紀における日米の教育

Revitalizing Education: The Promotion of Individual Character

■分科会メンバー

加藤梓 *
片山直毅
中澤耕己
森田真弓
山下真貴子
Diane Lee*
Lisa Du
Daniel Jodarski
Nichole Johnson
Ryosuke Kobayashi
(* は分科会コーディネーター)

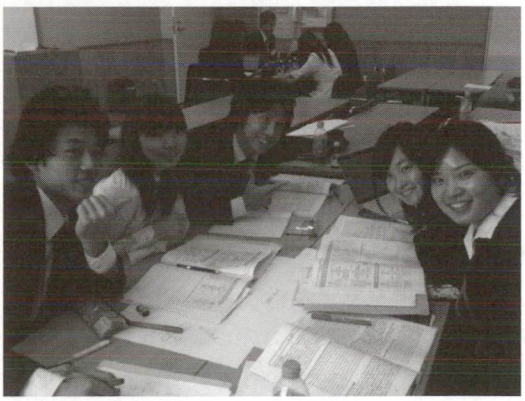
■分科会概要

サンクトペテルブルグのG8サミットでは「教育は人類の進歩の核心である。」と宣言し、将来の繁栄は、変化する世界に対応できる人材を育む教育にかかっているとされた。

環境破壊や経済危機、核兵器の廃絶など国内外に生起する様々な問題がある中で、今日、教育には学力向上のみならず、社会にイノベーションを起こすような創造的人材の育成が求められている。日本では2002年にゆとり教育が導入され、授業時間や学習内容の削減に対して批判があるが、個人の能力を伸ばし独創性を育む教育の重要性は否定できない。米国では同年、NCLB(No Child Left Behind)法が児童生徒の学力向上と教育格差の解消を目的に施行されたが、連邦政府の予算的制約もあり十分な成果は見られない。

当分科会では、日米の教育課題を学習内容やそれを支える国の制度などあらゆる角度から比較分析し、個人が適材適所で能力を発揮しうる社会を実現させるために、教育が果たすべき役割を模索する。様々な専門やバックグランドを持つ学生の参加を期待する。

■事前活動



本分科会では、事前活動を通じ、日本の教育に焦点を当て議論した。更に、教育を学校教育、地域教育、社会教育の3つに区分し、その中で義務教育を通じて平等に機会が与えられている学校教育に特化することとした。

「現代、どのような人材が求められているか。そのためにはどういった教育が必要か。」というテーマに基づいて分科会メンバー各々がRTペーパーを作成し、それを他のメンバーと共有した。情報化等を通じて個人の影響力が一層強くなってきた時代、そして、社会問題の変化が目まぐるしい時代においては、イノベーションを起こす力や環境適応能力等が求められていると考えられるが、まず

何よりも基礎学力が必要であるという考えに至った。そのため、当分科会ではイノベーション教育に加え、地域格差と経済格差が教育に与える影響にも着目した。さらにイノベーション教育の実施、普及が難しい理由の一つに知識インプット型である大学入試制度に課題があるという考えに至った。

また、日本の教育制度の変遷と、現在の教育制度についての議論とリサーチに加え、それらと欧米諸国の教育制度との比較も行った。毎週行われたスカイプミーティングでの情報共有や議論と、頻繁に行ったフィールドワークを通じて、私たちは教育に関する知識をつけていった。　（加藤 梓）

■フィールドトリップ

①NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

日時：2010年5月21日

場所：ESD-J事務所

参加者：加藤、片山、中澤、森田

“Education for Sustainable Development（以下ESD）”を日本国内で普及させるべく活動しているNPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（以下ESD-J）を訪問した。主にESDの普及状況とESD-Jの活動について伺った。

学習指導要領や中央教育審議会答申にはESDについて明記されているものの、教育現場ではあまり実践できていない。現状を改善すべくESD-Jは発足した。

通常の講義形式の授業ではなく、生徒自身に考えさせる問題解決型の授業を行うことがESDの一例として挙げられる。しかし、現在の学校の授業構成では時間が足らず、地域の協力なしで学校のみで実践するのは難しい。それゆえに普及もなかなか進まないということをお教えいただいた。

NPO法人と地域、学校の少なくとも3者の協力が必要である。しかし、その3者自体に他と連携するほどの余裕が無いことだけでなく、そのつなぎ役が確立していないことが問題だとおっしゃっていた。

このFWではESD-Jの活動内容と今後の課題をお聞きすることで、NPO法人活動の課題や各主体の連携の重要性を学ぶことができた。（森田 真弓）

②株式会社ベネッセコーポレーション　小村俊平様

日時：2010年5月25日

場所：ベネッセコーポレーション東京本部

参加者：日本側参加者全員

学校外での塾や予備校などの教育はもちろん、最近では学校教育でも、企業が積極的に関わり、学校と連携して成功している。その企業の代表とも言える、ベネッセに勤めていらっしゃる小村さんにお話を伺った。ベネッセでは主に中高一貫校の生徒に対し、ロボットコンテストを実施している。これは中高一貫校ならではの中だるみの時期になりがちな学年に対し、勉強に対する意識を持たせること、正解がないものに対して苦手な状態を打破させること、そして社会的コミュニケーション能力を高めてもらうことを目的としているそうだ。流石に、企業が学校教育に関わろうとしているだけあって、小村さんはとても斬新な考え方をされる方で、非常に勉強になった。成功体験及び失敗体験が若いうちに必要なことや若者に世の中の理不尽さを教えることがいかに大切かというお話が印象に残っている。また、人材の多様性の確保をするためにはどのような教育が求められているのか、そして教育においては平等をまず、第一に考えがちであるがそれは果たして全体のために良いのか？等様々なことを、RT活動を始めたばかりの我々に投げかけてくださった。いろいろと考えさせられたFTであった。　（山下 真貴子）

③田村哲夫氏

日時：2010年7月3日

場所：渋谷教育学園渋谷中学高等学校

参加者：加藤、片山、中澤、森田

私立渋谷教育学園理事長、中央教育審議会委員、日本ユネスコ国内委員会会長など様々な役職を兼任し、教育界でご活躍されている田村哲夫氏を訪問した。今回の訪問では教育思想史的観点からの

教育の考え方や、田村氏自身の幅広いご経験に基づいた貴重なお話をお伺いすることができた。

学力にはachievementとaptitudeの二側面があるというお話だった。achievementとはパターン化され次世代に引き継がれるもの、つまり知識であり、aptitudeとは意欲や適応能力を表す。テストなどで計測しやすいachievementに対し、aptitudeは計測しにくい。それゆえにこれまでaptitude軽視されがちだったが、今後は注視せねばならないこと。そしてそれこそが文部科学省のいう「生きる力」に直結しているのだとお教えいただいた。

他にも、中央教育審議会の限界やリベラルアーツ、教員の質の向上の必要性、日本の受験における問題点など様々な問題提起とそれに対するご自身の意見をお話してくださった。

受験や教育格差などの現在の教育における問題についてだけでなく、教育とは？学力とは？という本質的な部分についても深く学ぶことができ、とても有意義なFWだった。　（森田 真弓）

④文部科学省　能見様、高橋様、堀川様

日時：2010年7月11日

場所：文部科学省

参加者：加藤・片山・森田・中澤

2010年7月11日、私たちは文部科学省を訪問した。文科省では、第56回日米学生会議の参加者である能見様をはじめ、高橋様、堀川様のお三方に、教育行政に関する文科省の役割・考え方と、お三方の教育行政に対する考えや思いについてお話を伺った。これまでにベネッセやESD-Jでお話を伺わせて頂いたこともあり、地域や学校ごとに独自性のある草の根レベルの教育というものの重要性を理解していく中、私にとって、教育行政の中心というべき文科省というのは、学習指導要領など、上から画一的な教育を押しつけているような、そんなイメージだった。しかし、実際にお話を伺うと、自分の考えが誤りであったことに気づかされた。特に、全国100万人の優秀な教員を中央から右に倣えで統制することなど到底出来ず、むしろ教員や学校がやりたいことを最大限出来るような環境整備やサポートをすることこそが、文科省の役割であるという話が新鮮で、印象的だった。

また、県費負担教職員制度といって、教員の人事権を市町村ではなく県が持つことで、優秀な教員が環境のいい都市部に一局集中するのを防ぎ、離島や僻地など、どんな環境にいても子ども達が一定の教育水準を確保できるようにする政策など、日本の教育行政の制度や政策をいくつか紹介して頂いた。それらの具体的な政策とその意義についてお話して頂いたことで、日本の教育行政を貫く“教育の平等”という価値の大きさを知ることが出来た。本会議が始まり、アメリカ側の参加者に日本の教育行政の特色を説明する際や、アメリカの教育省でレクチャーを受け、日米の教育行政の違いを比較し、理解する上で、文科省で伺った貴重なお話が大変大きな助けとなった。　（片山 直毅）

■本会議中の活動

＜議論の内容＞

第一サイトでは、アメデリとジャパデリ初めて顔を合わせた分科会ミーティングは、RT paper内

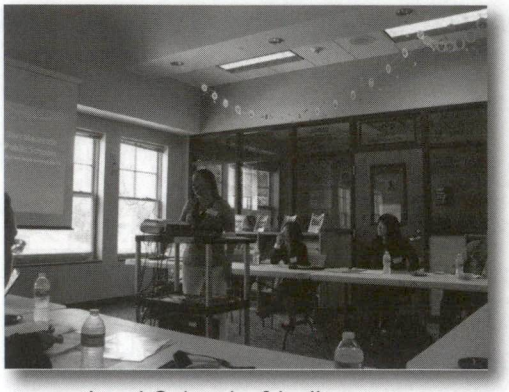
容の共有からスタートした。環境教育、芸術教育、生徒の評価、マグネットスクールなど、参加者それぞれが自由なテーマで書いたRT paperの内容とともに各自の教育に対する問題意識について発表し、議論した。

第二サイトではそれまでに共有した各自の問題意識をもとに、高校生に焦点をあてつつ、日米の教育上の問題の分析を行い、高校生と他のアクターとの「つながり」の弱さに注目した。高校同士だけでなく、高校と大学、地域、国際的機関などとの「つながり」の弱さは様々な教育問題に直結している。そしてそれらの「つながり」の弱さの原因は、生徒のモチベーションやインセンティブ、情報、コミュニケーションの欠如や不足であると結論づけた。

第三サイトのRTミーティングが一番大変だったのではないかと感じるくらい、ここでのミーティングでは皆がファイナル・フォーラムを意識して、真剣な議論を行った。具体的には、高校生の教育というテーマに対し、我々は提案の一つとしてサマープログラムを作ることに決めていたのだが、果たして本当にそれで良いのかということに時間をかけてもう一度話し合った。結果、サマープログラムを作ることに関しては皆が賛成し、その方向でファイナルフォーラムでの発表をすることになったが、メンバーそれぞれのサマープログラムに対する考えが少しずつ異なることも明らかになり、サマープログラムのコンテンツにはあまりこだわらないこと、そしてサマープログラムというものを土台に、それまで浅い議論しかできなかったことを反省し、より深い、活発な話し合いを進めていくことで合意した。

第四サイトではファイナル・フォーラムが近づく中で、分科会の議論をどのように収束させていくかが一番の論点となった。第一の焦点は、サマープログラムの位置づけであった。サマープログラムは一つの例に過ぎず、そのような草の根運動が果たす役割と社会的影響に注目するのか、または、学生に影響を与えるために必要なサマープログラムの具体的内容に注目するのか議論したが、分科会として議論の中心は社会における教育であったということで、前者を選択した。これまで、情報を広く収集し、意見をぶつけるという拡散型の議論だったのに対し、発表準備のために議論を収束させていかねばならず、自らが根本的に重視していること、重要だと思っていることを各自が見つめなおす良い機会でもあった。

＜FT内容＞



① International School of Indiana

日時：2010年7月28日

場所：International School of Indiana

本会議中初の教育分科会のFTとして、International School of Indianaを訪問した。

この学校ではInternational Baccalaureate (以下IB) にフォーカスした授業を行っているため、IBについての説明を中心に、インターナショナルスクールの現状やアメリカの中等教育についてお話を伺った。生徒の母国語の勉強のサポートもしっかりあるところがインターナショナルスクールならではの教育内容だと感じた。

IBについては具体的な試験内容だけでなく、IBテストのための学習プログラムであるIBプログラムの説明や、APやSATといった他の試験との比較もしてくださった。また、公立学校、政府、生徒の3つの観点に分けてそれぞれ詳しくプレゼンテーションしていただいた。

インターナショナルスクールについてだけでなく、アメリカの試験制度や単位認定についても詳しく知ることができる貴重な機会だった。(森田 真弓)

② Teach For America Indianapolis

日時：2010年7月28日

場所：Sagamore Institute

Teach For America(以下 TFA)では、低所得者層の生徒が直面する教育環境の問題や、その解決を目指すTFAの具体的なプログラムの内容に関して伺った。

低所得者層の生徒は、同年代の生徒に比べ3学年ほど、学力水準が劣っており、約半分の生徒が高校を中退する。こうしたインディアナポリスの現状は、同州内の近接する他地区と比較しても著しく劣悪である。このような現状は、山積する教育課題に対応しきれない学校や学区域、地域経済や、国の方針など多くに原因を抱える。

TFAではまず、短期目標として低所得者層の生徒の学習環境の改善を据え、彼らが通う学校に学部を卒業したばかりの優秀な学生を教員として派遣することで教育をサポートする一方、長期目標としては、参加者がTFAを通して得た教員としての経験やスキルセットに基づいて、各セクターで積極的な教育変革を起こす先駆者として活動することを目指している。

比較的恵まれた教育を経験している私達ジャパデリにとっては、「教育へのアクセスにおける不平等」という新たな視座を提供してくれた他、政策的アプローチでは無く、草の根運動を通してボトムアップで問題の解決を目指すという新たなアプローチを考える契機となり、ファイナル・フォーラムに向けた議論を進める上で非常に有意義なフィールドトリップとなった。　（加藤 梓）

③ Department of Education, Office of innovation and improvement, Margo Anderson

日時：2010年8月6日

場所：教育省

教育省ではまず初めに、教育省から、州政府、そして学校特区というように情報が伝わるよう、組織化がきちんとなされていること、また教育省には財政的に、他の省と比べ、一番多くの予算が割り当てられていることをお聞きした。具体的なその使途は学校運営に最も多く当てており、それは外国語教育、あるいはチャータースクールといったところに投資されているそうだ。また、アメリカの学校には著しく教育水準が低い学校が存在するが、こうした学校の底上げに教育省は重点をおいている。というのも、教育省の本来の目的は、教育の平等性を確保することであり、それを満たしていない学校や地域のサポートを積極的に行っているようだ。同時に、専門家の評価の良し悪しでは、教育省からの資金援助を受けられるという取り組みもしており、これは学校間での競争をさせ、教育そのもののレベルの向上に貢献している。このFTでは、国の公的機関がいかにして平等性を保ち、さらに教育をより充実させたものにするため、様々な工夫をしていることがわかり、大変勉強になった。（山下 真貴子）

④ RSD：Louisiana Recovery School District, Superintendent, Paul Vallas

日時：2010年8月11日

場所：RSD本部

Recovery School Districtは、都市部と格差があるルイジアナの教育を改善することを目的とした機関である。具体的には正規化されたテストの回数を増やすこと、保護者や地域との連携を図ること、学校の選択肢を増やすこと等を推進し、競争によって教育の質的向上を図っていく方針を打ち出している学校教育復興地区である。

お話していただいた方は日本の教育を高く評価しており、それを引き合いに出しながらテストを基本とした競争が生む利点を強調した。財政的に都市部に劣る中で教育水準を高めていくには、国全体、もしくは州全体での共通テストを作って実施し、また、学期中に行う定期試験も中間テストを行うようにすることで、生徒・教師の両者に質的に向上する意欲を持たせ、貧困層から抜け出す可能性を含んだ選択肢を用意することで、その意欲を持続させることが必要だと主張していた。日本でテストによる競争の弊害と言われる事象をいくつも知っているだけに若干の不安を覚えたが、財政的格差の中では有効な選択なのかもしれないと

感じた。　（中澤 耕己）

■ファイナルフォーラム発表

日米の教育の問題点を分析した結果、当分科会としては二点に注目した。第一点は「生徒と外部社会とのコネクション」であり、第二点が「教育機会への平等なアクセス」である。前者においては学校の課題や塾通いなどで多忙な学生が、様々な経験を得るために必要な、外部社会との人的交流や情報共有等の重要性を検討した。後者においては財政的、地理的、あるいは情報的な格差により発生する教育環境の格差を考慮した。特にアメリカでのフィールドワークを通じて感じたが、教育の格差というのは様々な要因で生まれており、それは社会的格差を直接反映していることが多い。たとえ良いプログラムを導入したとしても、そこに格差が存在したままであれば恩恵は行き渡らず、かえって格差を増幅することになりかねない。

今回は対象を高校生に限定した上で、上記の二つの問題点に対し、私たち学生のレベルで何ができるか考察した。その観点から、法改正や指導要領改変などの大きな視点からの政策論ではなく、現存する制度を受容した上でその欠点を補完することが有効であると考え、草の根運動に注目した。草の根運動であれば実行に移しやすいということ、また、成功すれば他の地域や団体でも応用することができ、ゆくゆくは制度全体への影響力も出てくるであろうと考えた。また、地域・学校や生徒個人の個別の問題にも対処しやすいという利点もある。　（中澤 耕己）

ファイナル・フォーラムの後半では、教育における草の根運動として、私たちなりに考えた、高校生のためのサマープログラムについて述べた。これは、日本の教育の現状分析にあたって、将来像や、自己と社会や世界との繋がりを模索し始める高校生が、学校という箱の外部社会を知ることが難しい状況におかれているのではないかという問題意識に基づいて、高校生と高校外部社会との繋がりを生むことが重要であると結論づけたことからスタートしたものである。

ここでの外部社会というのは、高校生に影響を与えうる、大学生・社会人・地域のコミュニティ・海外のコミュニティという4つのアクターを指す。社会人とはいわゆるロールモデルや人生のテーマとの出会いを生む。そして大学生は、高校生の目の前のゴールである大学に通う一歩先を行く先輩であり、また同じように社会人への過渡期を過ごす者として、社会人と高校生の橋渡し役として重要である。地域のコミュニティというのは、その高校の地域の住人や、他の高校に通う同年代の若者を指し、彼らから刺激をもらうことが出来る。そして海外のコミュニティは、海外大学進学という選択肢を持たない“内向き”傾向にある日本の高校生の目をもう少し海外へと向けさせるために必要と考えた。このような分析のもと、これら4つのアクターと高校生とが交流し、社会人からの講義や、幅広い年代の人とディスカッションができるようなサマースクールを考案した。

しかし、これは当たり前の話だが、サマースクールは、学校教育そのものが抱える問題や経済的・地理的格差には何ら触れることは出来ない。ただ、これらの問題を解決する草の根運動・組織は、Teach For America や Recovery School District のように、既にいくつか存在している。そして彼らの取り組みとその成果は、草の根運動が持つ可能性を十分に示す例といえるだろう。ただ、彼らも全ての問題を解決出来るわけではないし、他の多くの運動・組織の助けを必要としている。そこで私たちは、教育問題をより細かい問題へと分類し、それぞれの問題へと解決策を提供するような、草の根の取り組みを生み出し、支援することが、教育全体の問題を解決するための第一歩なのではないかと結論づけ、発表を終えた。もちろん、サマースクールも、そんな草の根運動のひとつになる可能性を大いに秘めていると私たちは期待している。

（片山 直毅）

■分科会コーディネーター総括

私達が今回、扱ったRTテーマ、「教育」は多くの日米学生会議の回に取り扱われていたにも関わ

らず、議論の進め方・最終発表は全く色の異なる物だった。広いテーマであるがゆえに10人全てのメンバーが進め方に困ったことが多々あった。
だがそのような時にでも、巻き返すことができたのは、負けず嫌いで主体的なメンバー達がいたからだ。

同じページに立つのが難しい中でも、何がなんでもメンバー全員が同じページに立つことを諦めなかった。早朝に起きてフィールドトリップ内容をアメデリに聞いたジャパデリ、方向性がなかなか定まらない中で深夜に何度も集まり夜遅くまで起きていたメンバー達、全てのメンバーが主体的に取り組むことによって、全員で「なにか」を作り上げることに成功した。

もしかすると、私達がファイナルフォーラムで発表した内容は、日米教育について深く学んでいる方なら、すぐに考え付くようなものかもしれない。

しかし重要なのは、私達が一から考えて、ゼロから日米の全く教育バックグランドの違う人たちで集まってこの結論を迎えたことだと思う。

私達が一生懸命聴く耳と発言する口をもって議論に参加したこの1ヵ月の経験、そして何より共に苦難を乗り越えてきたこの教育分科会の仲間たちは永久に自分達にとっての理解者になるだろう。
まゆ、Ryosuke、こうき、Nichole, まっこ、Dan、なおき、Lisaそして一緒に分科会リダーを務めてくれたDianeに心から感謝している。

20代最高の思い出を一緒に作ってくれて、「ありがとう。」　（加藤 梓）

安全保障と日米

Security, Military and Peace: The US and Japan

■分科会メンバー

中村真理*
栗原隆太郎
齋藤友理絵
柴田真也子
山口寛明
Yudai Chiba*
Ashley Hill
Dillon Svec
Michael Berlet
Sho Igawa
(*は分科会コーディネーター)

■分科会概要

新日米安全保障条約の調印から50年。この間「日米同盟」の機能は変容し、1996年の「日米安保共同宣言」では、同盟の役割を「アジア太平洋地域の平和と安定の維持」と表明した。しかし東アジア地域には依然として多くの不安定要因が存在する。北朝鮮の核開発問題や中国の軍事的台頭、台湾海峡の有事などに対し、日米両国はいかに共同対処すべきだろうか。さらに近年では、国際テロや大量破壊兵器などの新たな脅威をめぐり、国際社会における日米同盟の機能と役割の拡大が求められている。「テロとの闘い」やイラク復興支援など世界規模での課題を抱える米国と、日本はいかに平和憲法との整合性を維持しながら同盟の役割分担を果たし、グローバルな安全保障に寄与しうるパートナーシップを築けるのか。

当分科会では、アジア太平洋地域の安定のみならず国際社会の平和構築をも見据えた日米協働の可能性を検討することで、現在、そして将来における「日米同盟」の在り方を問う。

■事前活動

1.春合宿

日時：5月3日（月）～5月5日（水）
場所：代々木オリンピックセンター
参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

「安全保障と日米」分科会の議論は、「安全保障とは何か」「『安全保障と日米』の意味するところとは」など、分科会テーマそのものについて意見を出し合っていくことから始まった。その過程において、各人がこのテーマに興味関心を抱くようになった経緯や印象的な経験、現在持っている安全保障観なども語られ、充実した議論をするために互いを理解していくという点でも良いスタートとなった。次に、議論を整理するため、安全保障の主体、手段、目的、分野などいくつかの項目を設け類型化していくということを行った。2日目にして夜中の2時まで粘ったこの作業の中で、uni-Lateral、日米同盟のbi-Lateral、multi-Lateralなど形態を整理したり、軍事に限らない経済、環境、食糧など多岐に及ぶ安全保障の分野を確認したりすると共に、知識や意見の相違を探ることと、共通に理解している点を浮かび上がらせることが、多少なりとも出来たように思う。また、同日に設

けられた留学生とのRTセッションでは、覚えたてのTやCのサインを使いながら協力して核問題に関する英語での議論を乗り切り、各々が課題を認識しつつも、本会議へ向けた準備の第一歩とすることができた。最終日には各人が特に興味を持つトピックを改めて確認し合い、核問題(山口、柴田)、地域的安全保障、東アジア共同体(栗原)、日米同盟、沖縄基地問題(齋藤)をそれぞれ挙げた。その上で事前活動の進め方やフィールドトリップ案を話し合い、参加者全員の前でのRT発表や他分科会参加者からのフィードバックなどを経て、春合宿を終えた。個人的には、4日間の選考合宿で実行委員が悩み抜いた分科会メンバー全員が揃い、目の前で言葉を交わしているということが大変感動的で、一生忘れられない時間となった。

(中村 真理)

2. 孫崎享様(元外務省国際情報局長、元防衛大学校教授)

日時：6月6日（日）

場所：孫崎様御自宅

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

2010年6月6日、JASC Heritage(同日開催)に講演にいらしていた元・外務省国際情報局長であり防衛大学でも教鞭をとられていた孫崎享先生のご自宅に伺い、勉強会を開いていただいた。孫崎先生は前・鳩山政権の普天間基地移設問題に関するブレーンの一人であっただけでなく、『日米同盟の正体 －迷走する安全保障－』という本を執筆されており、21世紀を迎えて新たな局面を迎えている日米同盟に対し、ご自身の確固たる見解を持っている方である。Heritageの講演でも日米関係や沖縄基地問題について触れられていたが、孫崎先生のご自宅に分科会メンバーのみでお伺いしたので、さらに深くお話を聞くことができ、個人の興味分野に関する質問も投げかけることができた。

興味深かったのは、孫崎先生が日米同盟に関するご自身の見解を、他者と一線を画し孤立的であることを自覚している、とおっしゃったことである。日本外交の一貫性の無さと戦略の無さを指摘し、また、同時に米国の問題点も指摘しつつ、日本の将来を真正面から考えたときにどうすれば良いのか、私たちも真剣に考えていかねばならないということを説いてくださった。

最後に、最も印象的だったのは、孫崎先生が、国際政治に限らず学問を深めていく上で最も大切なのはたくさんの書物を読み、自分が抱く疑問や考えと同じようなことを述べている学者がいないか探してみることだ、とおっしゃっていたことだ。私は国際政治に見られる負の連鎖を断ち切ることは可能なのか、ということを聞いたが、そうすると先生はローマ時代の学者の話をしてくれた。彼が同じようなことを指摘しているからだという。先人に学びつつ、自らの思考力を鍛えることで、今後について考えていく力がつく、というお言葉には、深く感銘を受けた。

(柴田 真也子)

3. 中国、韓国からの留学生との意見交換

日時：6月9日（水）

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

参加者：栗原、齋藤、中村、山口

中国及び韓国からの留学生が、アジア地域の安全保障について、また日米の同盟関係についてどの様に考えているのか、率直な意見を聞くことを目的として、慶應義塾大学の授業に参加させていただき意見交換を行った。

日本に来ている留学生が日本語で発言しているため多少のバイアスがかかってしまっているかもしれないが、今現在の日本に対する私達世代の留学生の感情は概ね好意的で、日本がリーダーシップを発揮しつつ東アジア地域の安全保障に貢献していくことに拒否反応を示す学生はいなかった。また、彼らは日米関係が東アジアに直接どのように平和をもたらしているかということについてはあまり考えた事がなさそうであったが、日米関係が中国の台頭などにより悪化することには懸念を示していたように感じた。少なくとも良好な日米関係が自国に対して悪影響を与えるという考えを持っている学生はいなかった。

そんな中で、彼らが口を揃えて言っていたのは、

「私達の世代では日本を好きな人が多いけれど、祖父母や両親の世代になると話が違ってくる。」ということであった。今後「東アジア共同体」といったものを構築し、平和と安定を東アジア、ひいては世界にもたらす可能性を探るならば、歴史認識問題、戦後賠償・補償問題や教科書問題といった過去の日韓、日中関係に起因する問題をいち早く解決していく事が重要になってくると改めて感じた。

東アジア諸国の間に存在する様々な問題を一気に解決することは難しい。その状況を改善する為には山積みの問題にプライオリティをつけ、一つ一つ片づけていくことが一番の近道なのではないだろうか。そのプライオリティをつける際のヒントをこのフィールドトリップは与えてくれた。今後の私達の活動に活かしていきたい。　（栗原 隆太郎）

4. 防衛大学校生とのディスカッション

日時：6月11日（金）

場所：防衛大学校

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

第62回会議公式の事前活動である防衛大学校研修に、分科会毎に防衛大学校生を交えたディスカッションの機会を設けた。当分科会では、防大を代表し、市川学生が、以前に世界各国の士官候補生が集まる会議でも行ったという「日本の平和構築活動について」をテーマとしたプレゼンテーションを、そして防大側の分科会リーダーを務めてくださった大門学生が「自衛隊の海外派遣について」のプレゼンテーションしてくださった。その後、日米学生会議を代表して、また過去2年間防大生として日米学生会議防衛大研修に参加してきた齋藤が、「沖縄基地問題」についてプレゼンテーションを行い、プレゼン後に全員での討論の時間を設けた。これらを通して特に印象深かったことが二点ある。一つ目は、防大生が発表してくれた自衛隊の海外派遣について、彼ら中にも、自分達が国際社会に貢献しているという確固とした誇りが感じられたことであり、「派遣国の人々は、復興支援を受けながら『日本の自衛隊である』ということや、その立場をきちんと認識しているのか、またその上で、自衛隊に対しどの様な感情を抱いているのか」という質問に対して、「自衛隊が、現地住民との距離を縮めるために、車両で移動する際に自衛隊員から市民に手を振る‘うぐいす嬢作戦’などの工夫を重ねていることで、支援を受けている現地の人達は日本の自衛隊を認識し、日本の自衛隊に対して感謝している」とまっすぐに答えてくれたことが印象的であった。二つ目は、その一方で自分達の意見や安全保障観を醸成し、さらにそれを人前で発表するということに、ある種の躊躇いの様なものが感じられたことである。「考えを持つということ以上に、戦地へ行けば僕達には tool としての役割が期待される」「だからこそ、将来私達の user となり得る皆さんには、日本の安全保障について、自衛隊ができることとできないことについて、しっかり勉強し、考えてほしい」といった彼らの言葉は、私を含む他の分科会メンバーをはっとさせ、重くのしかかったのではないだろうか。

（中村 真理）

写真：防大生の皆さんとの懇親会で

5. 納家政嗣様（青山学院大学国際政治経済学部教授）

日時：6月12日（土）

場所：青山学院大学青山キャンパス

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

青山学院大学において、青山学院大学教授、一橋大学名誉教授の納家政嗣教授に勉強会を指導していただいた。参加者それぞれの関心に基づいて、安全保障に関係する様々な事柄について質問した。栗原は東アジア共同体について、柴田は核問題について、齋藤と私からは自衛隊や沖縄の在日米軍問題につい

て質問がなされた。

東アジア共同体に関しては、包括的な地域共同体をアジアにおいて形成することは難しく、イシュー（問題）別の二国間・多国間制度を並列的・重層的に形成することがより現実的であるとの指摘がなされた。

核問題に関しては、特に核不拡散体制について話し合われた。先生は、NPTという制度だけで対応していくのは核不拡散を達成していく上で難しいという指摘をされた。というのも、イランや北朝鮮といった国々がその制度に上手く組み込まれなければ、他にどのような国々が加盟していても機能しないからである。制度の重要性は高いが、そのほかに六カ国協議などにより政治的対応が必要であるということであった。また、破綻国家などからテロリストに核開発技術を渡らせないために、その国の社会の安定性を確保し、国境を越えないように「水際」での対策がなされる必要がある、という指摘もなされた。

自衛隊に関しては、現在のように日本人の軍事忌避が根強くなった歴史的経緯の解説がなされた。曰く、確かに湾岸戦争を受け、PKO法の改正といった新しい動きも見られた。しかし、反軍備派と左翼的な考えとが結びついたことによって、自衛隊の在り方を保守的に考える人がなお多いという。在沖縄米軍基地に関しては、海兵隊や基地の移動は難しくとも、訓練の一部を他県に分散させる可能性は必ずしも否定できないとの考えが示された。以上の他にも多くの指摘がなされ、安全保障という広い問題を扱う分科会へ、本会議の下地となる見識をいただいた。貴重な時間を割いていただいた教授に感謝する。　（山口 寛明）

写真：納家先生を囲んで

6. 五百旗頭真様（防衛大学校長）

日時：6月30日（水）

場所：防衛大学校

参加者：齋藤、柴田、中村、山口

沖縄研修の2日後、防衛大学校にて、学校長である五百旗頭先生をお招きして勉強会を開催した。はじめに、日米関係について先生に講義をしていただいた。日米関係は、幕末にペリーが来航し条約を締結した時代には友好的な関係であったが、その後、日本の対露戦争における仲裁役を米国が務め、事実上の同盟国となる。満州事変後は日本による南進とアジアにおける排他的進出があり、日米関係は、パートナーでありながらもライバル関係へと変容していった。そして太平洋戦争に際して、この関係は破局を迎え、アメリカの産業力に対する知識のないまま、日本は「竹槍3千本でアメリカに勝てる」と豪語し、敗戦に至った。

現代の日米関係については、常にマイナスのイメージを引きずっている日本の安全保障に対して、鳩山政権はある意味でのコンセンサスを生んだ、とした上で、沖縄県の米軍基地について「最低でも県外」としたことは、「総理として罪深き行動」であった、と指摘された。そして、沖縄県にはどうしても地政学的宿命というものがあり、日本が経済的負担をしてでも、基地を維持しながら県の危険と騒音を減らす、というアプローチをしていく必要がある、とおっしゃっていた。「現在の日本の安全保障は、アメリカ抜きでは到底成り立たない。アメリカと協調しながら、日本独自の平和構築活動を模索していく必要があり、『侵略をしない』という態度を示すためにも、自衛隊の存在は必須である。日本の復興支援活動は高い評価を得ており、国内的制約の伴うものであったとしても、国民にとって充実感を実感できる活動をしていくべき」と強調されていた。

五百旗頭学校長のお話はとても興味深く、その後の質疑応答は学生からの積極的な質問で盛り上がりを見せた。お忙しい中勉強会を開いてくださった先生、本当にありがとうございました。

（齋藤 友理絵）

写真：五百旗頭先生を囲んで

7. 伊勢崎賢治様（東京外国語大学教授）

日時：7月5日（月）

場所：東京外国語大学

参加者：柴田、中村、他分科会希望者

2010年7月5日、東京外国語大学で教鞭をとられている伊勢崎賢治教授にお話を伺った。伊勢崎先生は国連でもその手腕を発揮され、国連の武装解除オペレーション(DDR)を、東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタンで率いた実績をお持ちであり、ご自身を「紛争屋」と称している方である。今回は、沖縄の基地問題や、国連の内実についてお話を聞くことができた。

伊勢崎教授は、実務経験をお持ちの教授であり、ご自身が武装解除を指揮してきた国の状況や、国連が内包する問題を丁寧にお話してくださった。沖縄問題に関してもご自身の見解を述べてくださり、ご自身が沖縄に行って講演をされた話から、日米安全保障条約は日本が不利な内容になっているが、日本が逆に優位な立場をとり、他国と不平等な同盟を結んでいる事実がある、ということを指摘されていた。

伊勢崎先生ご自身もおっしゃっていたが、安全保障という国際政治の分野は、アカデミックな面のみにとらわれず、実際の現場の話を聞くことも非常に重要である。現場経験がある教授のお話を聞けたことは、非常に有意義であった。

（柴田 真也子）

■本会議中の活動

第一サイトインディアナでは、分科会メンバー8人が事前に英語で作成したレポートを共有し、各レポートの内容に関して討論を行った。テーマは以下の通りである。

・日本側参加者

1. The imperativeness of strengthening US-Japan alliance and nurturing East Asia community building to keep a much sustainable and prosperous region(栗原)
2. Okinawa Problem(齋藤)
3. The Future of the US-Japan Security Alliance: Strengths and Challenges in Working Towards a Global Partnership(柴田)
4. The Balance between Policy-making and Democracy: The Problem and Future of American Air-Base Issue in Japan(山口)

・アメリカ側参加者

1. A US-Japan Alliance for the 21st Century: The US-Japan Alliance and Addressing Transnational Challenges (Ashley)
2. The Issue of the Constitution of Japan in Concern to the Regional Stability of Asia(Dillon)
3. Japan's Re-emerging Military Identity (Michael)
4. Addressing Terrorism and Piracy in Southeast Asia: Extended Possibilities for Cooperation between the US and Japan (Sho)

第二サイト Washington, D.C. では米国の安全保障政策を司る主要機関にアプローチが可能である地の利を生かし、フィールドトリップを多数行った。沖縄基地問題や自衛隊の国際貢献の可能性、トランスナショナルな脅威への対処、といった分科会で議論を進めていた問題について、現地の国務省や日本大使館、シンクタンクで日々それらの問題を扱っている専門家の講義を受け彼らの見解を学ぶ機会は非常に有意義であった。また、分科会の議論の方向性にも助言をいただくことができた。

第三サイト及び第四サイトでは、ファイナルフォーラムの準備に焦点を移していったが、発表項目や方法論のコンセンサスを取ることに苦労し、それまで進めてきた議論を深めることに集中でき

なかったことが反省点として挙げられる。

最終サイトサンフランシスコでのファイナルフォーラムでは、当分科会はそれまでの議論を踏まえ「沖縄基地問題」「JSDF について」「東アジアの安全保障」の3部構成の発表を行った。

（中村真理）

■本会議中のフィールドトリップ

1.Center for Strategic and International Studies 訪問

-Nicholas Szechenyi, Deputy Director and Fellow, Office of the Japan Chair

日時：8月4日

著名なシンクタンクである米戦略国際問題研究所（CSIS）を訪問しお話を伺った。

アメリカのアジアにおける外交政策の基軸として、アジア諸国と結んでいる同盟が最も重要であるという点を強調されていたとき、「アメリカの経済とアジアの経済のために」とおっしゃっていたことが非常に印象に残っている。アメリカのシンクタンクである以上「アメリカのため」という視点が入るのは至極当然であろうが、相手国の国益や発展に関して、はっきりと言及されていたことが興味深かった。同時に、対日本の外交政策の中で、表向きだけではない「日本のため」の理由がどれ程あるのだろうかということも感じた。

また、今後更に難しくなっていくであろう米中関係と米朝関係に関して、中国には“Engage, but hedge“，北朝鮮には“Engage, but pressure”という政策のもとアプローチしていくべきだとおっしゃっていた。たった三語で、非常に分かりやすく且つ印象に残る言葉で今後の政策のテーマを表現されたことに感銘を受けた。

普段は日本の立場から考える事の多い東アジア、日米関係を、アメリカの専門家の視点から捉えるきっかけになったという点で、大変貴重な経験であった。

（栗原 隆太郎）

2. 国務省 (Department of State) 訪問

-Joseph R. Donovan, Jr., Principal Deputy Assistant Secretary, Bureau of East Asian and Pacific Affairs,

-Kevin K. Maher, Director, Office of Japan Affairs

日時：8月6日

分科会として国務省を訪問し、上記二氏にお話を伺うことができた。

まず Joseph Donovan 氏より、「日米同盟」の現状について講義をしていただいた。「Foundation for security in East Asia」として最重要視していると述べた上で、とりわけ日本における米軍基地の重要性について、横須賀の Navy 7th Fleet(米海軍で唯一国外に基地を持つ空母戦闘群) など日本を拠点とする米軍部隊の例を挙げ、冷戦時はソ連へのプレッシャーとして、そして今日では東アジア域内の緊急事態に素早く対応するために、欠かせぬものであるとおっしゃっていた。一方で、現在沖縄の基地の数や訓練を減らす努力もしており、住民への負担軽減に努めながらも軍として技量が衰えないようバランスをとることが大事であると強調されていた。他に、「同盟」と「関係」の違いについて（alliance vs. relationship)、二国間関係を保つ文化交流の重要性について、など沢山の興味深いご指摘をいただいた。

続いて Kevin Maher 氏より「日米同盟」の地理上の利点について、中国及び旧ソ連から日本を捉えた特別な地図を用いて講義をしていただいた。冷戦時はソ連から太平洋への水路は津軽海峡と日韓の間のみであり、これらが維持できればソ連は太平洋側で身動きがとれなかったということ、また、三沢基地はソ連に、岩国は平壌に最も近い米空軍基地であり、与那国と台湾間が一時間強であることも加えて、朝鮮及び台湾に関わる作戦のロジスティクスは全て日本が拠点となることなど、米国から見た日本の地理的重要性を、具体的な事実と共に強調されていた。一方で、日米間ではより多様な協力関係が可能であるにも関わらず、基地問題のみが注目を集めているのは残念であると述べられ、自衛隊の予算不足や現在の米国の国防対策の難点など、基地問題に加え両国が解決すべき様々な問題を指摘されていた。

最後に、お二人にはここには書ききれない沢山の論点とご指摘をいただいた。日米学生会議分科会を快く受け入れてくださった二氏、そして当日まで調整を進めてくださったBrian Brendel氏に日本より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。（中村 真理）

3. 納冨中様（米国防衛駐在官）

(Mitsuru Nodomi, Major General, JGSDF; Defense and Military Attache)

日時：8月6日

場所：日本大使館

ワシントン滞在中、Security Forumに駆けつけてくださった納冨陸将補であったが、後日、RTメンバー全員を大使館にお招きしてくださった。思いがけない大使館再訪問であり、25年先輩の活躍する姿は、私にとって非常に励まされるものであった。防衛駐在官‘Attache’は、大使館付きの武官であり、駐在国の軍事事情を合法的に調査する外交特権を持っている。

初めに現在の国際安全保障環境について説明をしていただき、その後質疑応答を行った。私は、現在の日本国民の安全保障観について質問をしたが、「安全保障に対する日本国民の意識は変わった。もはやタブー視する風潮はなくなってきているのでは」という回答が印象的であった。特に自衛隊については、毎日のように自然災害などに対応しており、海外での活動においても、武器使用の制限がかえって地元の人々との交流を促進させているとおっしゃっていた。今後「制約」をどうしていくべきかということを尋ねると、「まさに日本の安全保障上の大きな問題であり、米国の見方は大事だが、日本自身がどのように決定をしていくのかが重要である。日本が、何をしていきたいのか、どの様にしていきたいのかを自分で考え、自分の言葉で発信できるようになればよい。別の言い方をすれば、日本の考え方、国益が米国の考え方、国益と100％一致しないのは当然であり、外交や安全保障対話を通じて、最大公約数を見つけ、それを大きくしていく努力を重ねればよいのではないか」という回答をいただいた。

お忙しい中貴重なお話を聞かせてくださった納冨様、どうもありがとうございました。

（齋藤 友理絵）

■分科会参加者の声

「安全保障と日米」分科会のメンバーとしてJASCに参加できたことは、多くの点で幸運でした。まず、RT内に留まらない議論が可能であったこと。また、そのトピックは自分が専門として修めてきた分野と密接に関連していたこと。そして、有能で啓発的なRTリーダー、メンバーに恵まれたことです。

いわば国家関係の根幹にある当RTのトピックは、参加者全体から強い関心を呼ぶものでした。沖縄研修や米国国務省訪問等のフィールドトリップは常に、RTを超えた議論を可能にしてくれました。

また、それは国際関係論を学ぶ自分にとって大きな意味を持つ経験でもありました。安保改定五十周年というこの年に、皆と知識を分かち合い、共に考え抜いたことは、私の安全保障への興味関心、理論的視座を根本的に改めるほどの影響がありました。

しかし、何よりの財産はやはり「人」との交流にあります。春合宿では、互いにどのような学問的興味・視点があるのかという探り合いの段階であったように思います。しかし、事前活動での語らいや（特に米国参加者とは）本会議を通じ、それら学問的関心が、それぞれの人生、ぞれぞれの強さ、弱さとリンクしたものとして捉えられるようになりました。より大きな視点で互いを認め合えるようになったことは、RTに方向性を与えました。

米国の参加者の意見は、意外にも日本の立場に始めから理解を示すものであり、驚きました。そういった意味では、典型的な米国側対日本側、といった構図でなく、むしろ個人間での意見の不一致、または共鳴が印象に残りました。

安全保障というテーマは重く、繊細です。それ

ゆえに、それぞれが自分をさらけ出さなければ議論ができません。しかしだからこそ、互いを完全に受容はできずとも理解することはできる。認め合える。それはfinal forumという最終発表会に向けて不可欠な過程であり、異文化や他者の理解という意味でも多くの点で示唆的でした。

（山口 寛明）

■分科会コーディネーター総括

今までの日米学生会議において、そして勿論様々な場面において議論され続けてきた「安全保障と日米」というテーマ。日米安保改定50周年という節目の、そして基地移設問題が連日報道されたこの年に、改めて両国の学生が議論をし、さらにそれを発表するということは、非常に難しい挑戦であったと感じている。

形として残る具体的な成果は、当分科会の意義は、と問われるととっさには答に窮してしまうことも事実である。しかし、一人一人が知識、見識を深めようと文献と格闘し、専門家に熱心に質問し、限られた知見の中で勇気を持ち発言をした姿、そして互いに相手の立場や背景を尊重し、辛抱強く耳を傾けた姿に現段階では価値を求め、今後も日米関係の中を歩んでいきたいと思っている。

また、国務省でのレクチャーにあった様に、「人と人のつながり」が両国の直面する問題を改善する一助となり得るならば、当分科会はそれを辛抱強く醸成していける素晴らしいメンバーに恵まれた。この場をお借りして一人一人に感謝を伝えたい。

真っ直ぐな姿勢で知識や経験を吸収し、持ち前の明るさと、皆の意見や気持ちを的確に代弁してくれる英語力で、何度も分科会を救ってくれた隆太郎。専門の国際政治の知識とその熱意によって、常に議論に深みを与えてくれる欠かせない存在だったアキ。パキスタンをはじめ様々な海外経験から生まれた大きな夢と共に参加し、その他者理解への態度から多くのことを学ばせてくれたマヤ。JASC史上初の防衛大からの参加には、100km歩行直後の合宿参加など困難も多々伴ったけれど、全てを笑顔で飄々と乗り越えてくれた友理絵。そしてアメデリの皆と、RTパートナーYudai。みんな本当にありがとう！

最後になりますが、当分科会にご協力をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

（中村 真理）

社会起業家

Social Entrepreneurship: The Power to Transform

■分科会メンバー

高田修太*
尾崎裕哉
郭ヒギョン
木本篤茂
高橋亜矢
Mariama Holman*
Bryan Burns
Kunihiro Shimoji
Patrick McCurdy
Yuri Hongo
(*は分科会コーディネーター)

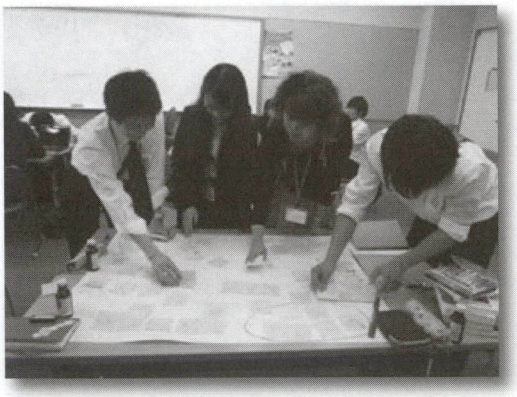
■分科会概要

貧困撲滅、子育て・高齢者支援、途上国支援などの役割は、これまで主に国や政府といった「官」の立場から担ってきた。社会起業家とは、その役割をビジネスの手法を用いて自ら担い、社会システム自体を変え、「民」の立場から解決策を世に広めていく者たちである。貧困層に無担保融資をする「グラミン銀行」から、病児保育を扱うNPO「フローレンス」まで、社会起業の種類は多岐に渡り、事業主体は営利団体から非営利団体、非政府組織、市民団体など様々である。それらが既存の枠組みを超えて、公の問題を民の力で解決しようとしている。

当分科会では、社会起業家への注目が高まるなか、日米における社会起業家のケーススタディを通して現状を探り、果たして利益の追求と事業の推進は両立可能なのか、なぜ社会起業家として問題に取り組むのかを議論し、その魅力を発信していく。日米から世界へ目を向けつつ、様々な観点から議論していきたい。

■事前活動

春合宿では、どういった分科会にしたいか、社会起業家とは何か、といったことを日本側参加者のみで話し合った。また、沖縄研修ではKunihiro Shimojiが同行したため、初のアメリカ側参加者を交えてのミーティングも事前に行うことができた。アメリカ側への知識の共有と共に、日本側が何をしてきたかということを伝える良い機会となった。



写真：春合宿でのワークショップ

本分科会では、フィールドトリップを重視し、それぞれをSocial Entrepreneurのケースとして扱った。その事前活動として、日本国内の関連企業や講演会に訪れ、本会議でアメリカ側と共有し

た。以下、その説明である。

1. 土井香苗様：ヒューマン・ライツ・ウォッチ東京オフィスディレクター

日時：6月21日（月）

場所：御茶ノ水　ヒューマン・ライツ・ウォッチ東京オフィス

参加者：高田 修太

国際人権保護NGOのヒューマン・ライツ・ウォッチの東京オフィスを訪問し、活動内容やNGOについてお話を伺った。活動の性質上、事業によって収入を得るわけではなく、寄付ベースとなってしまう資金源についてのお話や、人権保護と文化の衝突に関するお話をお聞かせいただき、社会的事業を行う上での資金調達の難しさについて学ぶことができた。

2. 電通

伊東美穂様　谷口隆太様　渡邊磨由子様

日時：6月16日（水）

場所：汐留　電通本社

参加者：高田 修太、尾崎 裕哉

日本最大手の広告代理店である電通がどのようなCSRを行っているのか、どのようにして社会的企業を支援しているのかを学ぶためにお話を伺った。電通としての関わり方や、どのようにすれば企業やNPOは社会事業を成功させられるのかといったことを、ホワイトバンドの失敗を例に詳しくご説明いただいた。

3. 市川裕康様　（株）ソーシャルカンパニー代表

日時：7月7日（水）

場所：渋谷リスペクトカフェ

参加者：高田 修太、木本 篤茂

日米学生会議のOBでいらっしゃる市川裕康様に、分科会におけるディスカッションの方向性について、また、米国における社会起業家、ソーシャルメディアなどに関してお話を伺った。Table For Two（日本発の、開発途上国へ食事を寄付するプログラム）のメニューをいただきながら、「社会起業家」という言葉自体の曖昧さや最近のソーシャルメディアのトレンドなど、非常に興味深いお話をお聞かせいただいた。

4. ルース・ジョーンズ様（ソーシャル・ベンチャー・パートナーズ・インターナショナル事務局長）と共に都内社会起業家訪問

日時：7月10日（土）

場所：みやじ豚、コペルニク、SHOKAY、JICA

参加者：高田 修太、尾崎 裕哉、高橋 亜矢

シアトルに本部を置く、社会的ベンチャー企業を支援する団体であるSocial Venture Partners International（SVPI）は東京支部を持っている。その投資先対象となる3企業をSVPIのディレクターであるルース・ジョーンズ様と共に周らせていただいた。各々の企業の事業や理念を学びながら、夜はルース様の講演会に同席させていただき、米国の社会的企業の現状やベンチャー・フィランソロピーの概況を学んだ。

5. ムハンマド・ユヌス 講演会（グラミン銀行総裁）

6. ビル・ドレイトン 講演会（アショカ財団創立者）

上記2つの講演会を、当分科会メンバーを中心に、分科会を越えてJASCerで訪れた。社会起業家と言えばこの2人、といっても過言ではない著名人の講演を聞き、彼らのマインドについて学ぶことができた。

（高田 修太）

■本会議中の活動

当分科会では、各サイトにおけるフィールドトリップを通したケーススタディの分析と、ファイナルフォーラムへの準備を並行して行った。本会議前に日本側とアメリカ側参加者は二人一組でのペアを作り、共通のトピックについて事前準備をし、本会議にて他の分科会メンバーに発表していった。毎回のプレゼンテーションを通じ、社会起業家についての理解を深めると共に、「持続可能な事業なのか」といった疑問について深い議論を繰り広げた。担当したメンバーと内容は次の通りである。（日本側担当者による執筆）

1. 高橋・Kunihiro：フローレンス

私は、ペアのアメリカ側参加者が日本人だったこともあり、アメリカ側へ日本の社会企業を紹介したいという思いから、病児保育・病後児保育を行っているNPOフローレンスについてプレゼンテーションをした。

はじめに、アメリカ側に病児保育が必要とされる日本の社会背景を理解してもらうため、日本の核家族化、女性の労働問題や保育施設の不足、などについて説明し、その上で、フローレンスの事業形態、活動地域、会員システム、料金システムを紹介した。私たちは分科会での議論を通じて、社会企業に必要な条件として、①直接的行動を取る、②複製可能なモデルであること、③持続可能であること、④革新的であること、⑤社会的価値に集中すること、⑥草の根（市民）を利用すること、の6つをあげていた。そのため、フローレンスがそれぞれの条件に当てはまり、社会企業と呼べるかどうか、また、社会企業の条件として以上にあげたものでのものでよいのかどうか、それぞれの条件に当てはめた特徴や問題点について話し合いを行った。

社会企業についての議論だけでなく、日本とアメリカの社会問題や家庭状況、女性の労働環境の違いなどについて議論をしたことは非常に興味深かった。それにより、地域や国によって異なる固有の社会問題に対し、社会企業がどのようにアプローチをしていけるのかを話し合うことができ、異なる地域での適用性や複製の可能性について議論を広げることができた。それが、ファイナル・フォーラムでのケーススタディの紹介にもつながり、有意義なプレゼンテーションとなった。（高橋 亜矢）

2. 郭・Yuri：CAMFED (Campaign for Female Education)

アフリカでは2400万人に至る女児が教育の機会を与えられておらず、貧困・HIV/AIDSと戦っている。こうした状況の改善のために教育支援を行う団体がCAMFEDである。こうした女性教育は、女性の地位を向上し、健全な社会を作ることにより、全ての子供に教育の機会を与えることができるというプロセスを目指す。CAMFEDは「Education can change everything.」というスローガンのもとで1993年から活動してきた。その成果として、女性が教育を受けることによって、25パーセントの収入が増えたとともに、HIV/AIDSの感染率が3倍も減ったことがあげられる。更に、5歳以下の子供の死亡率も40パーセントまで下がった。CAMFEDが他の女性教育支援団体と違うところは、長期的に見た支援を行う点である。ただ教科書や教育費を支援する一時的な支援と違い、一旦支援が始まったら全教育課程に至る教育費を援助することが特有である。また、独自のSeed Money Programを通じ、ビジネストレーニングや資金の運用、マネジメントなどの職業訓練も同時に受けることができる。加えて、CAMAというCAMFED卒業生のネットワークも持つ。女性の地位が低いアフリカ社会での女性支援において重要なアクターになるということや、CAMFEDからCAMAへの一次的支援から、CAMA同士での二次的支援までの波及効果も期待される。このようなネットワークは持続性のある支援ということから意義がある。CAMFEDが持つビジョンは社会的企業といえるかもしれないが、彼らの資金源はほぼ寄付に依存している。このためCAMFEDは社会的企業ではないが、普通の非営利組織ではあるという結論に至った。しかし、Webから気軽に寄付ができる、地域の現状に合わせた支援が行われる、その結果をWebに公開することによって透明性を保つというところは高く評価できる。（郭 ヒギョン）

3. 木本・Bryan：グラミン銀行

私たちは社会起業の草分け的存在であり、最も成功しているもののひとつであるグラミン銀行を紹介した。グラミン銀行は私たちが事前に日本で講演を聞くことが出来たノーベル平和賞受賞者のムハンマド・ユヌス氏により設立された。この団体は、社会的地位が低く、既存の金融機関から融資を受けることが出来ない人々に対し融資を行う「マイクロクレジット」という活動を行っており、グラミン銀行では特に女性たちをターゲットに定めている。

私たちはグラミン銀行に関する歴史・誕生の背景・実際に貸付を行う際の融資基準や手続き・他のマイクロクレジット団体と異なる特色・社会にもたらしているインパクト・団体の構成・事業の収益源と持続可能性・グラミン銀行が金融領域以外で展開している事業の概略を説明した。

このプレゼンテーションの中ではさらにグラミン銀行が、私たちがこの時点で考えていた社会起業の要件である「革新性」「社会貢献性」「持続可能性」を持っているかどうかについて検討し、グラミン銀行を社会起業であると結論付けた。それはマイクロクレジットの先駆けであると言う「革新性」、女性を抑圧的経済状況から解放するというミッションの保持と800万人もの女性に実際に融資を行ってきたという実績に裏打ちされた「社会貢献性」、無償の寄付を受け取っておらず、設立当初3年を除いて収入がコストを上回っているという経済的自立性・安定性に基づいた「持続可能性」があると考えたからである。

なおこのプレゼンテーションの後に行われたディスカッションの中では一般企業と社会起業を区別する最も重要な要素である「社会貢献性」が何を示しているかを具体化しようと議論が行われた。この際、「社会的弱者の救済につながっていること」「奢侈ではなく、生命権や自由権といった基本的人権に基づいたニーズに応えていること」「社会問題を解決していること」「言語化しうるものではなく、直感で判断するもの」といった意見が出た。結論は出なかったが、この部分に関するお互いの認識のずれを確認でき、その後の議論を行う上で役に立った。　（木本 篤茂）

4. 尾崎・Patrick：BAYCAT

Bayveiw Hunters Point Center for Arts and Technology (BAYCAT) とは教育と職業訓練を通じて、地域のマイノリティコミュニティーと住民にチャンスを与え、自立して生きる力を与える非営利組織である。貧富の差が激しいサンフランシスコ沿岸地域で主に活動をしており、地域の子供たちに、芸術活動による自己表現の機会を与えている。

BAYCATには主に、二つの構成要素がある。一つは、上質なデジタルメディア制作者を輩出するべく教育と訓練を無料で行っている教育部門である。生徒は自身の体験や身の回りの出来事のドキュメンタリーや映画をゼロから作り上げ、生徒同士がお互いのプロジェクトに関わり合い、手伝う事で健全な友情関係が芽生え、コミュニケーション能力の向上を可能にしている。行き場の無い貧困地域の子供たちはギャングに入ってしまう事が多い事から、この様な交流をもたらしているBAYCATは生徒達にとって大切な場所になっている。もう一つの要素は、企業の為の広告媒体を制作している営利組織のSTUDIO BAYCATである。STUDIO BAYCATで得られた資金はBAYCATの運営に使われる。しかし、営利企業といっても、彼らがこなす仕事の全てが有料という訳ではなく、200,000ドル以上のプロボノを提供してきた。地域のNPOやCitibank、Yahoo!の様な大企業、UC Berkeleyといった大学にも関わりがあり、それぞれに最新のスタイルのメディアを提供している。

日本にBAYCATが存在していたら、受講者は数十万円というお金を支払う事になるだろう。そして、日本人はお金を持っているため、芸術活動を学ぶ為にそれに応じた金額を支払うだろう。しかし、私はメディアによる表現の機会を提供する必要性はサンフランシスコと同じ位あると感じている。日本でも学校でいじめ等を体験して、心が傷つき、行き場を無くしている学生が沢山いる。彼らの為にも、BAYCATの様に無料でプロフェショナル・クオリティーの機材が使える交流の機会が存在すれば、彼らの自尊心を向上させ、表現する術を与えるだけではなく、より上質なメディア教育と訓練の機会を増やす事から、結果として日本のメディア技術のレベルの向上につながると考えられる。　（尾崎 裕哉）

写真：本会議中のディスカッション

また、アメリカ国内におけるフィールドトリップでは、毎回入念な事前準備・勉強を欠かさずに行い、実際に訪問した際に有意義な質問ができた。このようなケーススタディを通し、社会起業家とは何か、といった我々なりの定義を決定していった。フィールドトリップについては、次の通りである。

1. Lilly Endowment 財団

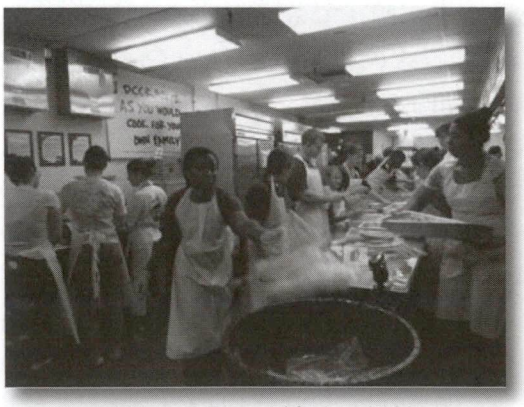
インディアナポリスにて上記の財団を訪問した。私たちは、彼らの寄付する基準や財団の理念などをお聞きすると共に、社会問題を解決するためにはどう支援すべきか、といったことも質問していった。彼らは主に Basic Needs と Art の分野を支援している。前者に関しては、数多くの社会問題に起因する市民のニーズである。これを解決しようとする団体に支援するとのことだ。彼ら曰く、社会問題には Technical なものと Adaptive なもの（幼児虐待や貧困）の2種類あり、前者は「技術」で解決できるが、後者は解決には時間がかかるという。後者をいかに解決するか、ということが社会起業家の使命であり、それを支援するのが彼らの役目であると述べられた。

2. Teach For America(TFA)

団体のインディアナポリス支部の方のお話を伺った。TFA は Harvard をはじめとする名門大学の学生に人気の就職先である NPO であり、アメリカ国内の一流大学の学部卒業生を、教員免許の有無に関わらず大学卒業から2年間、教育困難地域の学校に教師として赴任させるプログラムを実施している。インディアナポリスは全米でも特に教育水準が低く、ここに十分な教育を提供し、生徒を成長させることは大変困難なようである。その困難の中での、プログラムの内容や資金繰り、持続性についてお話を伺った。内容としてかなり厳しいプログラムにも関わらず、教師として参加する大学生が修了前に途中で辞めてしまう割合が低いことにも言及し、彼らのサポート体制が充実していることがわかった。

3. D.C. セントラルキッチン（DCCK）

D.C. セントラルキッチンは、残った食材や在庫などを安く仕入れて食事を作り、ケータリングで販売するというビジネスを行っている NPO である。特筆すべきは従業員の構成で、働く人々は皆ホームレスである。ホームレスの社会復帰支援として、この DCCK で職業訓練をしているのである。ここでは、概要や運営について色々とレクチャーを頂き、実際の調理場を見学させていただいた。驚くべきことに、年間の収入は6億円で、うち半分が寄付や援助金、残りは事業による収入だそうだ。持続可能な事業、そして社会貢献を両立し成功しているケースを見ることができた。



写真：DCCK の活気ある風景

4. アショカ財団

社会起業家の父と言われるビル・ドレイトン（事前活動として講演会にも訪問した）のアショカ財

団をワシントンD.C.にて訪問した。ここでは、財団の理念や、支援する企業を決定する基準などを聞き、革新性・倫理性・持続性を特に重視しているということがわかった。最後に、彼らの思う社会起業家の定義"someone who has an idea for changing something in the community, and won't rest until impact is made. Should have an impact on multiple levels (the people and the level)."から、議論をさせていただいた。

写真：Ashokaにて

5. Idea Village（ニューオーリンズにおける起業家集団）

ニューオーリンズは、カトリーナ以降の復興に際して多くの起業家が生まれた。その支援をするのがこの団体である。オフィスは広々とし、壁一面がホワイトボードでクリエイティブな議論ができる場となっていた。そんな中で、Feel Goodzという天然ゴム製のサンダルを作っている起業家Kyle Bernerとお会いし、お話を伺った。彼らの販売するサンダルはNatural, Comfortable, Ethicalと謳っており、環境的側面から社会変革を起こすというビジョンも持っている。我々は今後の展開や、彼らの理念について質問をさせていただいた。当初は社会的企業としてはじめたわけではなく、純粋にビジネスとして始めたというFeel Goodzであるが、現在では環境倫理を優先した社会的企業として注目されており、必ずしも社会起業家というものが理念から始まるものではないというケースとして見ることができた。こちらもDCCK同様、社会貢献と事業を両立しているものであった。

6. ビルディング・ブロック

建築関連でニューオーリンズで活躍する団体である。環境によく、安価で丈夫な材料を提供し、実際に壊れた家を作り直したり、コンペなどを行ってコミュニティの再構築を図っていたり、幅広く活動を行っている団体。彼らの製品の紹介やオフィスの見学をさせていただいた。

7. ラッキー・グナセケラ氏
（フロントラインSMS Medic）

JASCのOBでもあるMr.Luckyに彼の思う社会起業家や事業についてお話を伺った。「社会起業家」という言葉はばかげている、という意見など、我々には刺激的な内容となった。

以上と並行して、ファイナルフォーラムに向けて、社会起業は社会を変革する手段となりうることを発信するため、社会起業家に必要な条件やどのような分野に適用できるのかといったポイント等をまとめていった。

■ファイナルフォーラムでの発表内容

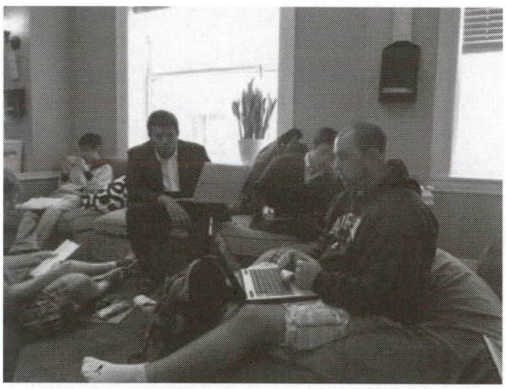
当分科会では、ファイナルフォーラムにおけるプレゼンテーション前に、自作のパンフレットを配布し、オリジナルのムービーを放映した。パンフレットは、第62回会議のそれぞれの分科会のテーマに対し、実際に取り組んでいる社会起業家を紹介する記事を提供し、ムービーでは、上から読むとネガティブな意味に、下から読むとポジティブな意味に捉えられるような独自に編集した文章を流し、プレゼンテーションの導入とした。

社会問題を解決する手段は数多く存在する。政府や国際機関といった公の立場、あるいは既存のNPOや企業でも可能である。そのような中で、社会起業家とは他の人々が解決できていない部分にアプローチしていく。我々が考えた社会起業家・社会企業に必要な条件は以下の通りである。

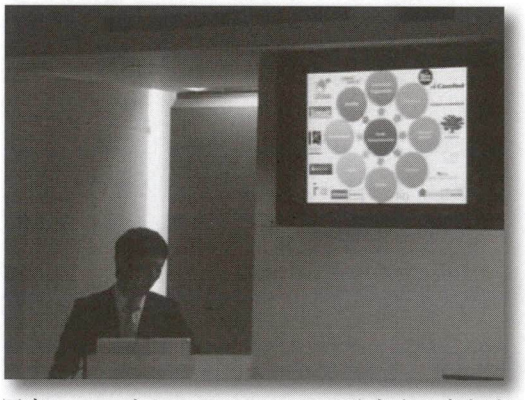
•Take Direct Action…直接的行動を取る
•Have a Replicable design or model
…複製可能なモデルであること

•Maintain sustainability …持続可能であること
•Be Innovative …革新的であること
•Focus on Social Value
…社会的価値に集中すること
•Utilize Grassroots
…草の根（市民）を利用すること

また、社会起業家に必要なマインドセット（創造性など）も、ケーススタディを元に述べた。以上より、我々は社会起業の定義を「革新的、持続可能かつ複製可能な直接的行動により脆弱な社会の問題を解決していく」とした。このような社会起業という手段を通して、今回の日米学生会議における分科会の扱う諸問題に関しても解決へのアプローチを取れることを紹介し、社会起業の可能性について、参加者を鼓舞してプレゼンテーションを終えた。



写真：ファイナルフォーラムの準備



写真：ファイナルフォーラムで発表する参加者

■分科会コーディネーター後記

第61回会議の終りにこの分科会を作ったとき、「社会起業家って自分も興味があるし、流行っているから分科会作ってみたら面白いかも。」という安易な理由があったことを思い出した。ただ、この分科会に込めた思いは強かった。日本はなぜ彼らの活躍できる土壌が整っていないのか、それをアメリカから学べるのではないか。そして、社会起業家として成功するためには何が必要なのか。アメリカでそれを見ることができるのを期待して作った。そして、期待した通りになったのではないかと思う。

本分科会を振り返ると、非常にフィールドトリップが多く、外にでて考える日々であった。眠たい目をこすりながら遅刻しそうな中全力で走ったり、うだるような暑さのニューオーリンズで朝早くから出かけたりしながら、実際の現場を見ることが私たちの分科会の原点であったと思う。ただ、それを「見学」するだけでは小学生の社会科見学となってしまうため、入念な事前学習・質問準備を行った。ここは自分たちながら評価できるところであったと思うし、十分にできたと思われる。はじめは「この団体、微妙じゃないか。一体何がやりたいんだ」と思っていたところでも、考えた質問をぶつけると、意外な答えが返ってきて、一同そろって感動したことも懐かしい。このような一つ一つの努力が分科会の議論を深いものにさせてくれたと思う。

また、「社会起業家」というテーマらしく、メンバー全員がクリエイティブで新しいこと、楽しいことを好んで活動を行っていた。ファイナルフォーラムに向けては、単なるプレゼンテーションではつまらない、周りをencourageしよう、という目的を共有していた。ある意味では、他のJASCerへのインフルエンサーであったと言えよう。ムービーも非常にユニークでクリエイティブであったし、出てくる意見も面白いものが多く、時には非論理的な意見に対してぶつかり合いながらも、皆でまとめていった。

あえて、反省点を挙げるならば、「日本語」が問題であったと言えよう。アメリカ側参加者5名のうち、2名が日本語を話せるため、時に日本語で

議論が盛り上がってしまうことがあり、T（通訳）を多発していたことだ。英語に disadvantage のある日本側参加者とアメリカ側参加者の足並みを揃えるためにもTは重要であるが、日本語→英語のTの多用は個人的にはあまり好ましくなかったのでは、と思っている。

最後に、フィールドトリップを受け入れてくださった皆様、そして私の稚拙な英語にも関わらず最後まで共に取り組んでくれたRTメンバーの皆、数多くのフィールドトリップをセットしてくれた上に粘り強く私とミーティングをしてくれたRTパートナーの Mariama Holman に対し、謝意を述べたい。本当にありがとうございました。

（高田 修太）

写真：ファイナルフォーラム後の
日本食レストランでの打ち上げ

写真：RTパートナーと。
左が Mariama、中央が高橋、右が高田

▼ファイナルフォーラムで配布した
パンフレットの一部（左）と表紙（右）

CASE STUDIES and RELATED RTs

TEACH FOR AMERICA * 21 *Education RT*

In order to alleviate students' achievement gap in schools of low-income communities, TFA provides young and well-trained teachers to help break the inequity in public education across the nation. This non-profit organization also aims for these corps members to become long-term leaders in reaching educational equality.

CONTACT : ***www.teachforamerica.org***

SEEDS of PEACE *Security RT* *National Identity RT*

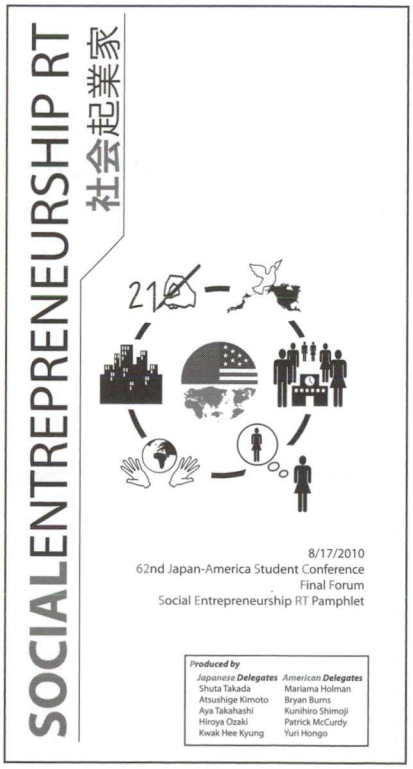
Founded in 1993 by journalist John Wallach. Seed of Peace is dedicated to empowering youth from regions of conflicts with the leadership skills, which is required to advance further understanding and coexistence among countries by offering a great number of leadership programs. Currently, the organization's focus is in the Middle East and South Asia, such as Egypt, Israel , Palestine, Iraq, and Saudi Arabia.

CONTACT : ***www.seedsofpeace.org***

D.C. Central Kitchen * *Sustainable Regionalism RT*

D.C. Central Kitchen is a "Community Kitchen" which turns leftover food into meals for homeless people every day. Its mission is "Combating hunger and creating opportunity." It makes 4,500 meals per day and 40 % of the meals are donated or recycled foods and 60% are purchased from local farmers. DCCK also offers Job Training Programs to the homeless, where they learn to cook and face self-empowerment. Some graduates of this training have started "Fresh Start Catering", which provides a contract foodservice for clients such as high schools and governments who require regularly delivered, nutritious and healthy meals at a reasonable cost. It is one of the most important sources of income and precious place to work in society for homeless people.

CONTACT : ***www.dccentralkitchen.org***



新興国と地球環境問題

Spreading Environmental Awareness in Industrial Developing Nations

■分科会メンバー

高橋央樹 *
有川慧
大井芳樹
斎田英恵
生板純一
Leah Flake*
Kseniya Vaynshtok
Alex Yu
Cameron Bradley
(* は分科会コーディネーター)

■分科会概要

中国、インドなどBRICsを始めとする新興工業国は、近年めざましく経済発展をとげる一方で、温室効果ガスを多量に排出し、地球温暖化を加速させている。ポスト京都議定書に向けた世界気候変動枠組み条約（COP15）では、先進国だけではなく、途上国も新たなCO2排出量規制に合意するかが重要な課題となっている。しかし新興国では環境に対する意識や知識の普及が充分とは言えず、環境保護と経済成長の両立は自国だけでは達成しがたい。そこで環境技術、クリーンエネルギー開発において先端を担っている日米両国は、いかにして世界を自然との共生社会に導いていけるのか。当分科会では持続可能な発展とは何かを改めて考え、どのようにして新興国が自国の社会的、経済的発展と環境保全を調和し得るのかを議論する。そのために環境教育やメディアによる意識啓発、先進国が果たすべき技術移転や援助など多角的な解決へのアプローチを検討し、地球規模での協働を模索していきたい。

■事前活動

1．春合宿5月3日（月）～5月5日（水）

地球環境問題は様々な切り口から見ることができる。そのため、合宿の初日では分科会メンバーでブレインストーミングを繰り返し、お互いの地球環境問題に対する意識の共通部分を探った。その結果、環境問題にはグローバルな問題とローカルな問題があるという共通認識に至った。気候変動問題やオゾン層破壊はグローバルな問題、大気汚染、水質汚染、ゴミ問題などはローカルな問題と分類した。また、環境問題に取り組むにあたって、国家間、世代間など様々なレベルでの「公平性」を考える必要があることも共通の認識として得られた。地球環境問題には経済発展する過程でこの問題に加担した先進国と、それによって被害を受けている途上国がある。その間に近年目覚ましく経済発展をしていて、開発する権利を訴えている新興国がある。そんな中、この問題における先進国と新興国の責務をどう扱っていくか、という大きな課題が残った。今後の方針として、グローバルとローカルの問題についてそれぞれトップダウン、ボトムアップのアプローチを考え、その際に現在や過去の地球環境問題に関する国際交渉に

ついて勉強をしたり、メディアの在り方についても考えていくことにした。　（生板 純一）

写真：発表の様子

2．防衛大学研修

日時：6月11日（金）　防衛大学校

6月の防衛大学校研修の分科会セッションでは、防大生が用意してきた「安全保障と環境問題」に関するプレゼンテーションを聞いた後、ディスカッションを行った。「今までの軍事力は死活的国益の確保のために使われていたが、冷戦後は脅威の様相の変化、人間の安全保障重視の傾向から軍事力の非軍事的使用が増えている」という軍事の変遷や、「軍隊は一般企業にはない強い組織力や運輸力を活かして、貧困や環境問題などの社会問題解決に貢献している」ということを分かりやすく説明して頂いた。また、「気象変動は陸・海・空の軍事作戦にも悪影響を与えていている」というように環境問題と軍事活動との関わりについても知ることができた。この後、日本の環境問題に対する政策、原子力発電の将来について議論が交わされた。「原子力発電所はテロの対象になり得るため、軍隊をすぐに出動させ対処することができない日本では原子力発電を促進すべきでない」など、私たちだけでは得られなかった「安全保障」という視点から、環境問題を見ることができた。

（斉田 英恵）

3．日本ドイツ学会第26回総会　シンポジウム

「〈環境大国ドイツ〉」

日時：2010年6月12日（土）　成城大学

ドイツにおける環境政策をテーマとしたシンポジウムを聴講した。環境先進国のドイツの事例から、論点や議論をする際の視点を学び、今後の議論に活かすことが目的である。

四名の教授による報告。一人目はナチズムと景観エコロジーについて。「望ましい環境」をある意味で押しつけるということであるが、我々の分科会における「新興国」に対する視点を見直す契機となった。二人目はドイツにおける環境政策の特徴を俯瞰するものであり、政策枠組みを考える上での有効な視点を得ることができた。三人目は「緑の産業革命」、すなわち90年代以降の、環境保護を通した経済成長について。我々の分科会の中心テーマである「成長と環境」という課題についてのヒントを得られた。四人目はドイツの環境政策と環境倫理との関係について。「持続可能性とは何か」「何の持続可能性か」など、より根本に立ち返っての議論であった。後の分科会での議論にとって有意義な論点となった。

ドイツに焦点を当てたものではあるが、いずれも分科会での議論に応用され、収穫の多いものとなった。

（大井 芳季）

4．電通訪問

日時：2010年6月23日（水）

参加者：有川慧、高橋央樹、生板純一

講師：株式会社電通　サッカー事業局　金大鐘様、第6営業局　飯沼瑶子様

環境問題について考える上で、人々の環境意識を変えるにはどうすればいいだろうか。今回の電通訪問では、近年様々な企業が着手しはじめた「環境広告」についてJASCのアラムナイである金さんと飯沼さんにお話を伺った。企業が環境広告を作るインセンティブとして、その企業のブランド力向上が挙げられる。特に株価などは企業のCSRにも強く影響されるため、企業が環境対策に積極的であれば企業の評価にプラスされ、そうでなければマイナスになる。電通の営業部では、この特性を利用し、企業とのミーティングで電通側がプロジェクトを提案して企業の参入を図るという。

例えば、FOOD ACTION NIPPONという食料自給率を上げ、より環境に優しい社会を作るプロジェクトでは、3000以上の企業や団体が推進パートナーなっているそうだ。企業にメリットがあるだけでなく、企業を介して消費者も環境問題に積極的に取り組むようになる。その点では環境広告は非常に効果的であるといえるだろう。また、環境広告のトレンドとして興味深かったのは「生活者の巻き込み化」である。企業が単独で消費者に環境保全を呼びかけるのではなく、企業と消費者が互いにコミュニケーションを取ることで、環境問題を個人レベルで捉えさせることが重要であるという。これからの時代は企業と消費者が一体となって環境問題に取り組む必要性があるようだ。

（有川 慧）

■本会議での活動

1. 本会議中の議論の流れ

第1サイトであるインディアナでは、環境という幅広いトピックに対するお互いの問題意識を共有するため、事前に書いたRT paperをもとにプレゼンテーションを行った。我々より一週間早くアメリカに滞在する米韓学生会議の学生とのディスカッションを終え、現状の環境対策に取り組むために我々学生がJASCを通してできることは何かを話し合った。環境問題を解決するためには第一に人の行動を変える必要がある。そのために必要なものとは一体何なのか？外発的要素である技術移転、補助金などのインセンティブに加え、人々の内面に働きかける教育など、さまざまな意見が挙げられた。

第2サイトのワシントンD.C.では、まず「Sustainabilityとは何か」について話し合い、我々の目指すゴールを明確化させた。Sustainabilityとは資源の持続可能性であり、エコシステムの循環であり、またフリーマーケット・システムを保ちながら環境にやさしい消費社会を実現させる新しい資本主義である。それでは何故、我々はそのゴールを達成することができずにいるのだろうか？人々は環境破壊を目の当たりにしているにも関わらず、なぜ行動を起こせずにいるのだろうか？我々の目指す持続可能な世界の前に立ちはだかる障害物を取り除くため、学生としてできること―我々の答えは「環境意識の改革」であった。

カトリーナや石油流出事故で多大な被害を被った第3サイトのニューオーリンズ、また最終サイトのサンフランシスコでは、自然状態の人々を如何に自発的に環境行動できる状態に移行させるかのプロセスに注目し、議論を行った。意識（awareness）から行動（action）を起こし、また行動した後に意識し直すという過程を経ることによって、より持続的な環境行動が可能になる。今まで学者や専門家によって議論され尽くしてきた解決策に固執するのではなく、人が環境的に行動する過程に注目することにより、一人一人の環境保全に対する自発的努力の大切さを深く実感することができた。　（有川 慧）

2. 本会議中のフィールドトリップ

① Cornerstone Environmental 訪問

Cornerstone Environmentalはビジネスの持続可能性や環境分野についてのコンサルティングを行っている会社で、二人の代表の方々からお話を伺った。話のテーマは「持続可能性」だった。持続可能性には社会的、経済的、環境の三つの要素があり、その全てが同時に満たされていなければならない。持続可能な社会であるためには、規制などを通して人々に何かを強要するのではなく、人々の「文化(culture)」を変えることが最も大切である。その一歩目として、私たちはある製品を買う時に、それがどこで、どのように、どんな労働環境で生産されたか、までを考えるべきである。人々の「文化」が変われば、持続可能な方法で生産をするように消費者側から生産者にプレッシャーをかけることができるというのが彼らの考えである。私たちは環境面での持続可能性というものをFTに行く前から意識していたが、FTを通してその要素となるものが複数あることを意識させられた。また、いかにして人々の環境意識（文化）を変えられるのか、という問題について深く話し合うきっかけとなった。ファイナル・フォーラムで私たちの最終目標を持続可能な社会を目指すこと、にしたようにこのFTは私たちのテー

マの根幹の部分を支えるものとなった。

（生板 純一）

Cornerstone Environmental の方々と

② LOYOLA 大学教授 Mr.Bob Thomas 訪問

8 月 12 日の 'Recovery from Natural and Man-made Disasters' をテーマとした Forum でも講演して下さる，Loyola 大学の Thomas 先生より「環境問題とコミュニケーション」に関するお話を伺った。前半では二つの具体例を使って講義をしていただいた。まず，「ある企業の製造プラント建設」の例を使って，環境問題を解決するためには産業間や専門家間でなく分野の垣根を越えたコミュニケーションを増やすことが重要であることを学んだ。次に，環境に良いと科学的に証明された選択肢があっても，消費者の習慣が正しい選択を難しくさせていることを「マクドナルドの紙コップ」を例に説明していただいた。後半の質疑応答では「環境に優しい消費者になるには何をしたらよいのか」，「すでに環境問題に対して認識を持っている人々をどのように問題解決のための行動に移すことができるのか」などの質問があがった。環境問題解決に対する先生自身の意見を伺うことができ，行き詰った分科会の議論を前進させるきっかけとなった。

（斉田 英恵）

3. ファイナルフォーラム発表

1. テーマの設定

「持続可能な社会の達成」にあたり、「環境問題に対する意識」と「環境に配慮した行動」の二点が大きなポイントだと考えた。

プレゼンテーションでは「意識」「行動」の二者の関係に焦点を当てて論じた。

2. 用語の定義

以下が本発表におけるキーワードである。

・「持続可能」＝人間の消費・汚染のペースが地球環境の回復ペースを下回る状態。

・「意識」＝地球環境問題に関する情報 を有し、納得している状態。

・「行動」＝地球環境に配慮した行動。

3. 先行研究に見られる二者の関係―アプローチ i

「意識」と「行動」という要素を用いて環境問題の解決策を論じた研究は数多く見られる。それらについて査読し、考察を加えた。

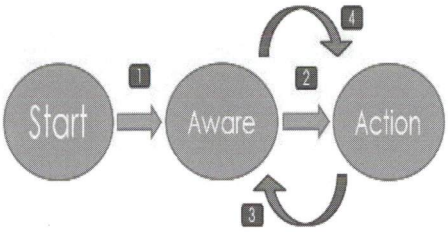


図1　アプローチ i

(1)「意識」と「行動」の関係　（図 1 参照）

①まず個人が環境問題に対する「意識」を持つ必要がある

②「意識」を持った上で、初めて環境に配慮した「行動」が可能となる。

③「行動」をすることで、「意識」が強化される。

(2) 問題点

①意識を持つことへの障害：環境教育の未整備、解決策への低い信憑性、無関心　等

②意識から行動へと結びつくことの障害

：対立する価値観・責任転嫁・行動の評価の困難等

(3) 考察

4-(2)- ②で述べた、「意識」→「行動」に於いて、このプロセスは困難を有する。個人の行動がどの程度環境保全に貢献したかという評価が難しいという面については、ある程度計量、表示することはでき、実際に試みられている。

しかし、各々の行動の貢献は微小なものであり、

責任転嫁の回避は難しい。究極的には「社会的な価値観の転換」等が必要になる。故に、このアプローチは(長期的には望ましいにせよ)困難である。

5. 我々の提示する二者の関係 ― アプローチii

従って、より効果的なアプローチとして、以下のものを提示したい。

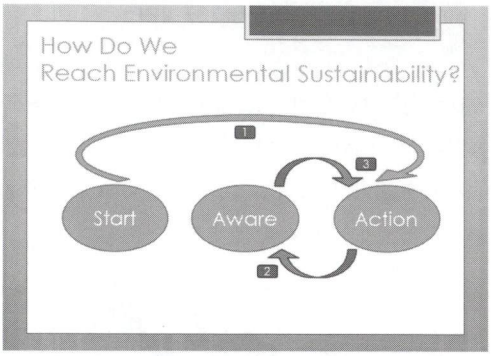


図2　アプローチii

(1)「意識」と「行動」の関係　(図2参照)

①外的な強制・インセンティブにより個人に「行動」を起こさせる。この時点で個人の「意識」は不要。

②「行動」の意味を考え、個人の「意識」が涵養される

③「意識」によって、外的強制・インセンティブが解除された後も、「行動」が促される

(2) 問題点・障害

①外的な強制・インセンティブを加えることの実現可能性への疑義。

②「行動」を通して「意識」がどの程度涵養されるのかが不明瞭。

(3) 考察

このアプローチは、まず行動を起こし、その後に意識を養うという意味で、従来提示されてきたものとは逆向きである。「意識」を伴わない行動という面において、これは最善策ではない。

しかし、短期間での効果という点においてこのアプローチは優れているといえる。

6. 結びにかえて

特に5-(2)-②の点への指摘が、フォーラム後の質疑応答でも数多く寄せられた。これを含め、今後更に考察を深める必要があるのは否めない。しかし、環境問題が喫緊の課題であることを鑑み、このアプローチによる解決の可能性を探っていくことに意義があると考えられる。(大井　芳季)

■分科会コーディネーター総括

何故環境問題に対して世界の全ての国々は解決に取り組まないのか？

そんな疑問から始まった「新興国と地球環境問題」分科会は、一年間アメリカ側実行委員であるLeahとともに何度も議論を重ねながら準備を行った。分科会リーダーとして議論できるほどの知識がなかった私は、読書や講演会に参加するなどして、無我夢中で環境問題について基礎から学んだ。ただ学べば学ぶほど、環境問題に付随する世界の国々の利害対立の複雑さが鮮明になり、果たして分科会として議論が行えるのかという不安が私の中で生じていた。

分科会メンバー選ぶ際は、面接や小論文を踏まえて、環境問題に対しての知識量ということも重要だったが、何よりも共に議論したいかという点を重視した。その影響があってだろうか、経済学のスペシャリストの芳季、常に周囲を見ながら議論を先導する純一、幅広い教養を持ちながら常に場を和ます慧、公害問題から環境問題を切りこむ不思議系の英恵、個性豊かな4人が環境問題分科会には集まった。事前活動として、環境経済や環境思想を取り上げた課題図書を読みながら、スカイプでの議論は白熱した。最初こそ互いに緊張していたが、本会議前には相手の主張が分からないときには、納得するまで質問を行うほどに互いの仲は深まっていった。

本会議に入ると、実行委員を含めたアメリカ側参加者が4人増えたために、まずこの分科会でどのように環境問題を解決するのかという議論から始まった。新興国と地球環境問題という大きなテーマだからこそ、メンバーは何から議論すればよいのかという不安に陥った。しかし共同生活や議論を積み重ねることで、環境意識という側面から環

境問題に対する解決の糸口を見出し、ファイナルフォーラム前日には皆で細部を詰めながら夜遅くまで作業を行っていた。私自身発表中は一か月間の議論の成果に感動し、人知れず涙を流していた。ファイナルフォーラム終了後には、インディアナサイトでの緊張が嘘であったかのように、笑顔で記念写真を撮影した。

最後に、常に真剣に議論に取り組み、主張をぶつけ合ってきた分科会参加者に感謝の意を伝えたい。私自身分科会リーダーとして足りない点は多々あったが、皆が協力してくれたおかげで、この分科会は成り得たのである。今後もこのメンバーとともに、更なる環境問題に対する議論を続けていきたいと思う。参加者の皆、本当に有難う。

末筆ではありますが、分科会フィールドワークにご協力して頂いた企業の方々を含め、この分科会に助言して下さったJASCOBOGの皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

（高橋 央樹）

▲分科会メンバーの描いた似顔絵

地域再生　— 都市、農村が生き残るために —

Sustainable Regionalism: How Can Urban Cities and Rural Communities Coexsist?

■分科会メンバー

大宮透*
新井良子
細井駿
丸山綾子
山田晃永
Marie Watanabe*
Benjamin Colon
Paul Horak
Henry Luu
Justin Perkins
(*は分科会コーディネーター)

■分科会概要

今「地域」の荒廃が世界的な問題となっている。IT化や経済のグローバル化の進行は、時空間を超越したコミュニケーションを可能にし、「世界の一体化」を加速させた。しかし、これは同時に、日米両国をはじめ先進国内における生産拠点の海外移転や雇用機会の喪失を招き、地域の経済や文化は危機的な状況にある。また、世界規模で行われる都市間競争の下、都市への人口や機能の集中が進み、大都市と地方、都市と農村など様々なレベルで、教育、医療、情報、交通等の格差が顕在化している。一方、大都市内部においても都市環境の悪化やスラムの形成など多くの問題が存在し、地域を取り巻く状況は決して単純ではない。

世界的に進行する地域の荒廃に、私たちはどう対処していけば良いのだろうか。当分科会は、日米両国の豊富な事例を参考にしながら、政治、経済、文化など様々な視点に立ち、いかにして地域がその特性を活かし再生していけるのか、その可能性を探りたい。

■事前活動

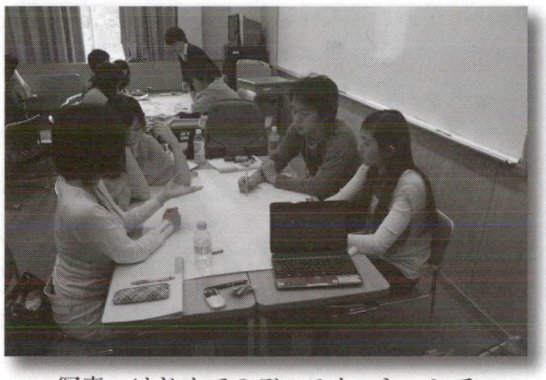
当分科会では5月の春合宿から本会議までの約3ヶ月間、分科会テーマに関するメンバーの知見を深めるため様々なフィールドワーク(以下「FT」)や勉強会を企画した。以下、事前活動で実施したFTや合宿のうち、3人以上のメンバー参加を伴ったものについて報告する。

1. 春合宿

日時：5月3日（月）～5月5日（水）
場所：代々木オリンピックセンター
参加者：全日本側参加者

「地域再生」というトピックを考えるにあたり、春合宿ではまず基本的な定義づけを行うことから取り組んだ。すなわち、①「なぜ」日米で地域再生を話し合うのか、②「何を」地域再生の問題として捉えるのか、③「どうやって」地域にアプローチするのか、の3点である。①に関しては、日本とアメリカを関係付け、またそれぞれの地域に影響を及ぼしてもいる重要な要素として、「成熟社会化」と「新自由主義」の2つを挙げた。成熟社会化とは高齢化の進行や社会成長の鈍化を意味し、新自由主義とは経済活動の規制緩和や、合理的な

政治体制の追求を指す。これらの特徴が、日米両国の地域に様々な問題を引き起こしていることが認識された。②に関しては、県や○○地方といった規定の行政単位から着目すべき地域を抜き出すのではなく、地域の諸問題を考える際に有効な様々な切り口（グローバル化・医療・人と人のつながりなど）をもって考察を重ねる中から自然と見えてくる範囲を「地域」とすることにした。最後に③については、都市および田舎の両方を考察対象として捉え、個々人が興味のある切り口によって都市や田舎の問題を捉えていくこと、さらに、最終的には日米以外の国にも有益な示唆を与えるような地域再生の普遍的な解決策の提示を目指すことが決定された。　（丸山 綾子）



写真：はじめてのディスカッションで

2．長野県小布施町・佐久総合病院　訪問

日時：7月3日（土）・4日（日）

場所：長野県小布施町・佐久市内

：市村良三氏（小布施町長）

：関悦子氏（(株) あ・ら小布施代表）

：内坂徹氏（小布施町新生病院元院長）

：色平哲郎氏（佐久総合病院地域ケア科医師）

参加者：全日本側参加者

最も大きな事前活動として、独自の町づくりで有名な長野県小布施町、高度な地域医療で有名な同県佐久平を訪ねるFTを行った。小布施町では、株式会社形式で町の文化･経済発展を担う（株）あ･ら小布施代表　関さん、市村良三小布施町長のお二方よりレクチャーを受けた。関さんのレクチャーでは、株式会社という経営形態の強み・町づくりの成功に寄与した小布施の特徴などについて伺った。市村町長からは、従来の都市志向から抜け出し、地域の資源に価値を再創造することの重要性・地方自治体と中央政府のあるべき関係・町づくりにおけるソフトとハードの関係・今後の町づくりの展望などについて、ご持論を伺った。続いて佐久では、地域医療の先駆者として著名な色平哲郎医師に案内して頂き、現地にお住まいのチヅさんを訪問した。現地での生活を実際に体験させて頂く中で、疲弊が進む地域社会の中でも確かに息づく、自然と共にある暮らしの素晴らしさを感じることが出来た。また、色平先生からは、ただ病気の症状を診るのではなく、患者さんの人生そのものの重さに思いを致しながら治療を行うことの大切さをお教え頂いた。現場に行ってこそ分かる地域の文化のよさや、個々人のお話の中にもマクロな社会・経済の動きを読み取ることの大切さを学んだFTであった。　（丸山 綾子）

写真：㈱あ・ら小布施の関さんと

3．片山善博 元鳥取県知事、現総務大臣　訪問

日時：7月7日（水）

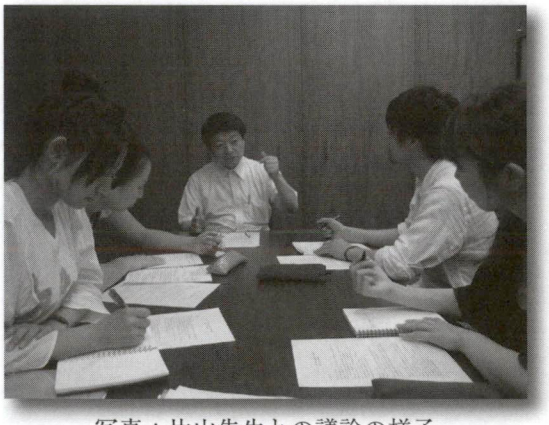
場所：慶應義塾大学三田キャンパス

参加者：大宮、山田、新井

行政側の視点から見た地域再生について考えるため、元鳥取県知事（現総務大臣）の片山善博氏にお話を伺った。メンバーの質問に対し片山氏からのご返答を頂く形式のもと、活発な議論が交わされた。議論においては、住民との信頼関係構築やリーダーシップの重要性など行政の原則論的な

お話から、大型店舗立地の問題や地産地消への取り組み、「鳥取自立塾」や地域拠点としての図書館整備への取り組みなど片山氏が県知事時代に実際に行ってこられた政策まで、様々なトピックについてお話を頂くことができた。特に印象的だったのは、「地方分権時代の行政においては、住民に一番近い存在としての基礎自治体（市町村）が主要な役割を担うべきである」という、片山氏の一貫した姿勢であった。地域で解決できる課題は地域に任せ、できない部分をより高次の行政が担うという「補完性の原理」は、小布施町で私たち自身が考えたこととも大きく重なり、その後の分科会において重要な視点となった。

（大宮 透）



写真：片山先生との議論の様子

4．小田切徳美 明治大学農学部教授　訪問

日時：7月13日（火）

場所：全国町村会館内レストラン

参加者：大宮、山田、新井

写真：小田切先生と

農村政策論や地域ガバナンス論を専門とし、中山間地域研究の第一人者である小田切徳美先生に地域活性化についてのお話を伺った。まず、中山間地域をはじめとした条件不利地域の格差是正と、地域の自助努力や競争力を高めようとする内発的発展の両立可能性について伺った。また、2010年問題（農山村に関係の深い過疎法・市町村合併特例法・中山間地域直接支払い制度の3つの重要な制度の改定のこと）について、資金の使い道をハード面のみならず集落支援員（市町村に雇われた集落を見守る人材）等のソフト面に充てる工夫、市町村合併の弊害と住民のコミュニティ作りの重要性についてもお話頂いた。それに絡めて、国の官僚機構は縦割りである一方、地方自治体は総合的な支援を求められる行政の「中央分権・地方集権」の問題点、さらに調整組織の存在とソフトにおける二重三重のカバーの必要性についても伺った。

最後に先生は農山村の可能性と当事者意識についても触れられ、潜在的なsocial capitalや6次産業の発展性を指摘された上で、かつてオープンマインドだった農山村の開放性を復活させ、当事者意識をいかに高められるかが地域活性化の鍵であるとおっしゃっていた。

（新井 良子）

5．内閣官房地域活性化統合本部　訪問

日時：7月14日（水）

場所：内閣官房地域活性化統合事務局

：和泉洋人氏（地域活性化統合事務局　局長）

：坂本成次氏（同局　参事官補佐）

参加者：大宮、山田、細井

「地域活性化」というテーマによって各省庁を横断的に繋ぐ組織が、内閣官房地域活性化統合本部である。それまでのFTで主に学んできた地域の内発的発展の可能性や地域活性化における地方自治体の役割という視点に対して、ここでは、戦後国が取り組んできた政策年代史や今後の方向性について、事務局長の和泉氏よりレクチャーを頂いた。国がナショナルミニマムの充足をめざして全国一律の支援策を提供していた時代から、現在は

地域がそれぞれの個性や特性を活かして、自立的な活性化を模索する時代に移行してきているという和泉氏の現状認識は、それまでお話を伺ってきた多くの識者の方々と同様の見解であった。しかし、地方自治体の自立性を重視するあまりに「やる気のある自治体」のみを支援する制度設計では、そもそも条件の恵まれない地域がないがしろにされてしまう。「補完性の原理」のなかでも最後の砦となるはずの国が、それぞれ事情のまったく異なるまだら模様の地域をどのように支援していくべきなのか。国も地方も、財政的な余裕がない現状における地域支援のあり方について、それまでとは違った視点から考える有意義な機会となった。

（大宮 透）

6．直前合宿

日時：7月24日（土）～7月26日（月）

場所：代々木オリンピックセンター

参加者：全日本側参加者

アメリカでの本会議に向けて、事前活動の総括を行った。各自の事前学習やRTペーパーの進行状況を確認し合うとともに、改めて分科会の方向性についても議論した。

■本会議活動

1．本会議の流れ

本会議では、まず、各分科会メンバーが各々の興味に従って事前に作成したRTペーパーの共有を行った。また、5月～7月にかけて充実した事前活動を行ってきた日本側メンバーからは、日本でのFTや議論の経過報告がなされた。その過程において、日米双方が描く分科会へのイメージに若干の相違点が見られたため、今後の分科会としての方向性や新たなテーマ設定について話し合い、結果として英語の原テーマ「Sustainable Regionalism」から「Sustainable Revitalization」という新たなテーマ（新たな「SR」）を、メンバー間の共通認識として設定するに至った。

次に、リーダーを含めた10人の分科会メンバーを、2人ずつ（日米から1人ずつ）、5つのペアに分割し「ペアワーク」を行った。ペアワークは、設定したテーマについてペアの2人が議論のたたき台や情報源をメンバーに提供し議論を先導する形式で行われた。この狙いとして、①日米でペアを組むことによる、分科会内での日米メンバーの融合、②リーダー主導のみではなく、参加者全員が議論を主導できる環境づくり、③興味関心分野別に、より深い理解と議論を進める仕掛けづくり、の3つであったが、これらの目的は概ね達成できたと感じている。

なお、ペアごとのテーマは以下の通り。

- How human and social capital contribute revitalizing the community (Paul and Ayako)
- Importance of leadership in the process of revitalizing the community (Ben and Akie)
- What is the ideal balance between rural and urban (Justin and Ryoko)
- Post-disaster Recovery: Case study of New Orleans (Shun and Marie)
- Role of transportation in revitalizing urban communities (Henry and Toru)

ペアワーク終了後は、それまでの議論で得られた知見や興味をどのように最終的な分科会発表に繋げていくのかという点を集中的に話し合った。その結果、ある特定の地域を取り上げ、それまでの議論やそれぞれの興味分野を生かしながら私たちなりの提案を作成することを決定した。対象地域は、今回の第3サイトでもあり、ハリケーン・カトリーナによる甚大な被害を受けたニューオーリンズのLower 9th地区を取り上げることとなった。

（大宮 透）

2．本会議中のフィールドトリップ

本会議中には、最終発表の準備に専念したサンフランシスコを除く3つのサイトにおいて複数のフィールドトリップを実施した。以下にその概要を記述する。

●インディアナ

(Indy Partnership / STEUBEN COUNTY

Economic Development Corporation 訪問）

まず、州都インディアナポリスを中心に周辺自治体を含めた広域圏における地域活性化を推進するIndy Partnershipを訪問し、企業誘致における経済的インセンティブやコミュニティの重要性について伺った。また、インディアナ北東部において同様の企業活動を行うSTEUBEN COUNTY EDCの方からもお話を伺う機会を得た。

●ワシントンD.C.

（D.C Central Kitchen / Metropolitan Washington Council of Governments 訪問）

写真：Metropolitan Washington Council of Governmentsにて

ワシントンD.C.では、まず、低所得の居住者が多く生活必需品へのアクセスに乏しい地域において、料理人としての職業訓練等を通じて居住者の社会復帰を支援するD.C Central Kitchenを訪問し、その取り組みについて伺った。また、ワシントン広域圏を対象として都市計画的提案を行っている非営利団体のMetropolitan Washington Council of Governmentsでは、広域的な視点から地域活性化を達成するための戦略について、ワシントン広域圏における実例に基づいてお話を伺った。

●ニューオーリンズ

（Make It Right 訪問 / Lower 9th 地区調査）

ファイナルプロジェクトで取り上げたLower 9th地区において、環境に配慮した建築を地元住民に供給している非営利団体のMake It Rightの取り組みについて、実際に地区を歩きながらお話を伺った。また、Make It Rightや同じく非営利団体として被災地への住宅供給を行っているHabitat for Humanityなどの取り組みについて、実際に現地に住んでいる方に聞き取り調査を行った。

（大宮 透）

3. ファイナル・フォーラム

本会議前の事前学習、FT、インターネットを利用したリサーチなどを通して学んだことをそのまま発表するのではなく、実在する地区の再生に当てはめたモデルケースを発表することにした。2005年のハリケーン・カトリーナで甚大な被害を受け、5年経った今日も荒廃したままであり、私達が実際に訪れた、ルイジアナ州ニューオーリンズ市内のLower 9th地区の再生をモデルケースとした。同地区の再生を考える際、(1)経済発展 (2)地域の結びつき (3)教育 (4)交通を切り口とした。

(1)経済発展では、まず雇用状況、産業の比率、法人税、人口のデータを示し、経済が停滞していることを訴えた。そして、このような状態から脱却するための「住人を増やす⇒企業を呼び戻す⇒持続可能な産業を育成」という3つのステップについて述べた。

(2)地域の結びつきでは、防犯と定住人口の増加に注目した。定住人口の増加のためには、『住みたくなるまちづくり』が必要であるとし、歴史あるジャズ文化を活かした音楽ホールなどの文化施設の創設、放課後プログラム（スポーツイベント、フットボール応援の音楽隊、ボランティア活動etc.）の強化が必要であるとした。防犯対策に関しては、近隣住民によるパトロール、警察への予算増加などが挙げられた。

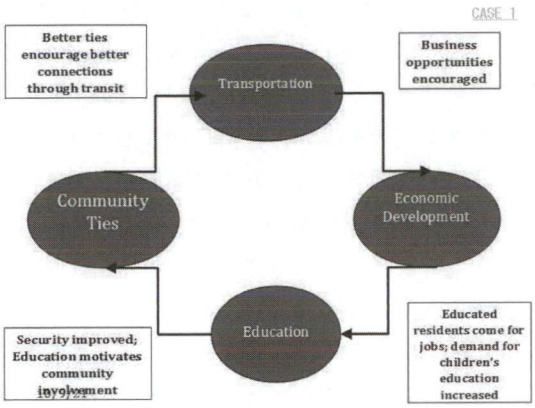
(3)教育では、教育システムが混在していることから生じる様々な問題を挙げた。その上で、これらの問題を解決するには、大学生による貧困地区での学習サポート、教師の待遇改善、到達度確認テストの利用方法の変更、教育システム間の教育計画の統一などが必要だと提案した。

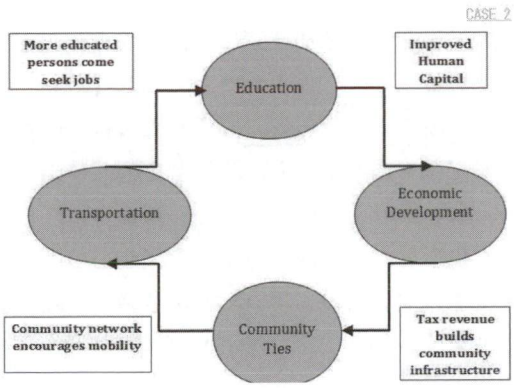
(4)交通では、まず地区内に公共交通機関が無く、

車に依存せざるをえないことを指摘し、その解決策として、地域住民を運転手として雇い、スクールバスを利用するバス網の開発を挙げた。

最後に、これら4つの切り口は相互依存関係にあり、地域再生を考えるには、各分野の専門家が独立したアプローチを取るのではなく、分野横断型のアプローチをし、相乗効果を生むことが必要であると示した。また、これは第62回の理念である“To Understand, To Unite, To Act: Continuous Evolution Through Integrated Perspectives”に通ずることにも触れた。

（山田 晃永）





■分科会参加者の声

【新井 良子】

みながみな、個性派揃いといわれた分科会であった。特にAmedelesと初めて互いの考えを共有したときは、こんなにそれぞれで考えが違うのかと頭に新しい風が吹き抜けるようだった。数多くのFTと度重なる意見の交換を通して、少しずつ着実に分科会全体の結束は強まっていった。

頻繁に行ったAmedelesとJapadelesによるペアワークを通して、アメリカ側・日本側と意見を分かつのではなく、あくまで個々人の意見を尊重しその意見を深めることができたように思う。

またこの分科会には欠かせない存在、ファイナルフォーラムでのモデルケース地となったNew Orleans出身のJustin Perkinsがいた。彼はハリケーンカトリーナの被害者であり、親戚や大切な友達、住居、何もかもを失うという壮絶な経験をしていた。New Orleansサイトにて行った住居再建のボランティア、lower 9th　地区における新たなコミュニティづくりの見学、musician villageに居住する日本人jazz奏者からの話、ユースホステルでの宿泊、夜の街に繰り出して感じた独特の空気、そのどれもが「地域に入る」ということを身をもって感じる体験であったし、何よりもはにかみ屋のJPの存在は、私たちに「その地に住む人の声を聴くこと」「草の根に入ること」の重要性を教えてくれたように思う。

またあの時間に戻りたくなる。分科会のメンバーたちは、どんなにたどたどしい英語でも辛抱強く耳を傾けてくれ、理解や発言を支えてくれ、ディスカッションで私が置いていきぼりにならないように温かく包みこんでくれた。英語のジレンマに苦しみ、分科会の足を引っ張っているのではないかと不安だった。でも、仲間はいつも待っていてくれた。まるで家族みたいに。

数え切れないほど多くの貴いことたち。ここで得たことは、これからの私の課題として時間をかけて向き合い取り組んでいきたいと思う。地域への情熱を与えてくれたこの分科会で、かけがえのない仲間とかけがえのない時間を過ごすことができて、私はこの上なく、幸せだ。

【丸山 綾子】

私は都会っ子だ。物心ついた時から繁華街のチェーン店で買い物していた。モノやヒトが集まる都会の刺激にわくわくしてしまう。それが当た

り前だったので、「地域再生」の個々の地域に寄り添ったミクロな価値観を頭では理解しながらも、どこか肌に合わないものを感じていた。だがSRの活動が私にくれたのは、理屈抜きで地域に触れる経験だった。

農業体験先の農家で、穴が開いた規格外のトマトの色と曲線がものすごく芸術的に見えたこと。若い農家の方は、「自分が作った野菜を町の人がおいしく食べてくれることが生きがい」と目を輝かせた。小布施はそこだけ時間の流れが違うような懐かしさで、家族や大事な人を連れてまた一緒に訪れたくなった。山村に住むおばあさんの闊達さに触れ、つい老人扱いした自分が恥ずかしくなった。

幅広の道路にごつい車が行き交うアメリカのさすがの車社会ぶり。延々ととうもろこし畑の海が続くインディアナ。ワシントンでは中心部の整然とした町並みと、少し殺伐とした郊外のギャップを感じた。ニューオーリンズではSRメンバー大勢とジャズクラブに繰り出して、夜の街のエネルギーを全身に浴びた。けして声高には主張しないけれど、故郷への愛と、ハリケーンで奪われたものへの憤りと悲しみを真剣に語ってくれたメンバーJP。素敵！住みたい！を連発したサンフランシスコ。

たくさんの「地域」が私に会ってくれた。どれも色があって、そこに住む人がいた。開発や画一的な風景を好む人と、土地独自の暮らしを好む人がいる。互いに自分の好みを押し付けるとしたら横暴だ。これからも多分都会嫌いになりはしないが、素朴にそう思えている。自分自身、活動を通じ反省すべき点はものすごく多い。だが議論やFTの中で個性溢れるメンバーと共に地域に迫ることができた経験は、私の中に確かに残るし、それはすごく嬉しいことだ。このRTに参加出来たこと、そしてメンバーの皆に心から感謝したい。

【山田 晃永】

思うに、日米学生会議の面接を受ける直前に八ツ場ダムを訪れた時から、私の地域再生分科会での活動は始まっていた。元々地域再生には興味があったが、実際に極限まで疲弊した地方を見るのは初めてで、衝撃を受けた。人口流出により高齢化が加速し、莫大な国費を投資して建設されるダムのみが希望の光であり、反対派・賛成派が真っ向から対立しコミュニティが分断している。地方で起きている問題に目を向けるきっかけになった。同時に、野宿者や孤独死など都市部での問題にも元々関心があった。分科会活動は、地方・都市部問わず、地域の立て直しということを体系的に学びなおすきっかけになった。

言語の壁に加え、分科会の名称の違いから日本側とアメリカ側の想定するものが異なったため、初めのうちは議論がスムーズに進まなかった。また、アメリカ側は地域内での繋がりといったミクロなアプローチを嫌い、経済発展などマクロなアプローチが有効であると考える傾向があった。しかし、日本側が小布施町や竹富島などの例を挙げ、アメリカ側が日本の都市部にも通ずる解決策などを挙げるうちに、互いに歩み寄り、ファイナルプレゼンテーションでは、日米双方の考えを盛り込んだ地域再生のモデルプランを提示することが出来た。

日米学生会議に参加せずに、同じ1カ月間本を読めばもっと知識を得られたかもしれない。しかし、私に多くのことを教えてくれたのは、一生懸命読んだ数々の本よりも、分科会を通して出会った人々だ。長野県の山奥に住むおばあさん、地域医療を専門とする医師の方や、町民想いの町長さん、快くお宅に泊めて頂いたお医者様、沖縄の離島のおじさん、DCに貧困層の職業訓練施設を作った方…ここでは列挙しきれない程たくさんの出会いがあった。自分の住む地域を愛し、精一杯生きる彼らの姿に刺激を受けたことは一生の財産になると思う。

■分科会コーディネーター総括

会議の性質上マクロな視点からのアプローチが大半を占めてきた当会議分科会にあって、「地域再生」という身近な問題を扱うテーマは異質な存在

であったように思う。会議には、自然と「グローバルな視点」を前提とした参加者が集まるが、彼らのうち「地域」という単位への眼差しを持ったメンバーがどれだけいるのだろうか。61回会議で訪れた長野県小布施町での経験が私にそんな思いを抱かせ、アメリカ側実行委員のMarieとこの分科会を立ち上げるきっかけを与えてくれた。

分科会活動は、初期において非常にミクロな経験を積み重ねることから始まった。誰ひとり同じ人間がいないように、地域も多様である。まずは実際に地域の中に入り、その地で暮らす人々の声に耳を傾けること。その過程での自分自身の変化を丁寧に読み解くこと。日本側メンバー全員で訪問した小布施や佐久でのFTをはじめ、各メンバーが個人的に企画した”実地体験”の一つひとつが、分科会としての「原体験」を形成する上で非常に重要な機会となったように思う。

アメリカ側メンバーも合流して始まった本会議では、経済的インセンティブや交通などといった地域再生におけるマクロな議論が、日本側の「原体験」と徐々に融合していったことでバランスのとれた議論が展開された。また、日米メンバーの融合を目指したペアワークによる議論進行は、国籍や言語にとらわれず、メンバー一人ひとりが「個人」として議論を作り上げる環境を提供してくれた。議論終盤、メンバー同士が意見をぶつけ合い一つの提案を作り上げていく様子は、まさに62回会議全体のテーマである「衝突と共鳴」を体現した瞬間だったといえるだろう。一人ひとりが分科会の方向性や自分自身の問題意識について悩み、格闘しながら作り上げた地域再生分科会は、アメリカ側参加者のHenryの口癖だった「Best RT ever」そのものだった。

おいしいものには目がない一方で、常に議論の方向性を気遣い整理してくれる綾子。強い共感力と使命感を持ちながらも、一人ひとりの意見に丁寧に耳を傾ける良ちゃん。Divaとして会議全体を盛り上げる一方で、議論のスパイスとして冷静かつ大胆に自己主張を繰り広げる駿。普段は自由奔放にも見える行動で分科会リーダーを困らせながらも、様々な視点から冷静に物事を分析し議論を引っ張ってくれるあっきーえ。冷静沈着の中にも様々なものに対する好奇心を併せ持つ、まさかの19歳Paul。文句なしのムードメーカーとして参加者全員から愛され、常に周囲への配慮を忘れない頭脳明晰なHenry。日本人より日本人らしい繊細な心を持ち、友人と家族、故郷ニューオーリンズを誰よりも愛するJP。そして、飽きっぽくお調子者に見えて、その実、人一倍まじめで優しい心を持ったニューヨーカーのBen。一人ひとりのずば抜けた個性が、分科会を色彩豊かな空間にしてくれたことは間違いない。それから、1年間スカイプを通じて一緒に悩みながら分科会を運営してきたRTパートナーのMarieには、彼女が学ぶ上海に向けて精一杯の感謝の気持ちとエアーハグを贈りたい。彼女がいなければこの分科会はここまで素晴らしいものにはならなかっただろう。本当に、本当にありがとう。

最後に、陰日向で当分科会を支援して下さった全ての方々に感謝の気持ちを表して、分科会総括とする。1年に渡り、多大なるご支援とご協力を本当に有難う御座いました。

（大宮 透）

国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ

The Role of National Identity in Globalizing Society

■分科会メンバー

杉本友里*
飯倉江里衣
竹内智洋
庭野啓太
松下マエス
Ikuno Naka*
Ian Cross
Deidra Denson
Anthony Taylor Luczak
Christina Ryu
(*は分科会コーディネーター)

■分科会概要

アイデンティティの違いはときに集団間の対立を引き起こす。第二次世界大戦中の米国では、日系米人への警戒の念や差別感情から強制収容が行われ、また近年中国の新疆ウイグル自治区では、漢族とウイグル族の対立から暴動が起こっている。一方、カナダやオーストラリアでは多文化主義政策を採り、多様な言語や民族の調和を目指す国家形成が図られている。国境を越えてヒトやモノが盛んに行きかう現代において、どのようにナショナルアイデンティティが形成され、変化しているのか。そして、国民国家は今後どのようにして維持されていくのか。当分科会では、これらの問いに答えるべく、世界各国の事例をもとに、政治、文化、歴史認識など様々な側面からナショナルアイデンティティや国民国家について考察する。ナショナリズムや愛国主義に関する議論を通じて、多文化共生のために必要な政策、教育、メディアなどの在り方について検討する。

■事前活動

公式のプログラム（春合宿など）を含め、計8回の事前活動を行った。一部の活動について以下で報告する。

・春合宿
・勉強会＋ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』の上映会に参加
・東京朝鮮高級学校公開授業訪問
・防衛大学校研修
・ダライ・ラマ法王日本東アジア事務所訪問
・靖国神社、遊就館見学
・朝鮮大学校訪問
・直前合宿

また、これらの活動に加えて、各自がナショナルアイデンティティの問題について興味ある事例を選び、理解を深めるべくRTペーパーを作成した。

1. 春合宿

春合宿では、分科会で取り扱うトピックや全体の方向性について話し合い、グローバル化する時代に生じるナショナルアイデンティティの問題を根幹にすえた上で、個々人が興味ある事例につい

て調べるという方針を決めた。また、国家の中での結合と排他が生じるのはなぜなのか、何をもって多民族の“共存”が果たされるのか、何がナショナルアイデンティティを形成するのか、などについても議論した。特に、国民がそのナショナルアイデンティティを形成する際に強く影響する主体について注目し、その主体として、私達はメディア、教育、政治に焦点をあてることにした。

グローバル化を概観で示すことは不可能に近く、現象として起きている全体的なグローバル化の末端で、具体的にどのようなアイデンティティの衝突が起きているのかに注目していくべきだと感じた。（庭野 啓太）

2. 勉強会＋映画『ウリハッキョ』

日時：5月22日

参加者：飯倉、杉本、竹内、庭野、松下

『ナショナルアイデンティティ論の現在』（編：中谷猛／川上勉／高橋秀寿、晃洋書房、2003）を講読し、ナショナルアイデンティティの学術的な定義や、グローバリズムとナショナリズムとの関係などを再確認、共有した。しかし、抽象的な話ばかりでなかなかしっくりこない。そこで朝鮮学校についてのドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』（朝鮮語で「私の学校」の意）の上映会に参加した。

私は在日朝鮮人のことをあまり知らなかったが、見慣れた授業風景と、日本の学校と同じように部活に励む様子に驚いた。しかし世間からの風当たりは厳しく、生徒数は減っている。それでも在日3世、4世は民族の誇りを絶やさず、朝鮮語を話し、チマチョゴリを着て、祖国の歌を歌う。彼らは消え行くアイデンティティを、差別と戦いながら必死に守っているように思えた。また、朝鮮学校だけが高校無sugi償化から除外されているという事実も初めて知った。ナショナルアイデンティティの理論と実践について、今後の議論のベースを得た一日だった。（松下 マエス）

3. 防衛大学校研修

日時：6月11日

参加者：飯倉、杉本、竹内、庭野、松下

日々“日本人”であるという事を意識させられる防衛大生の生活は大変興味深く、彼らが思う“国家”や“日本人”の定義など聞きたい質問は山ほどあった。特に印象に残っているのは、ある防大生が指摘した、現在の日本人は「個人」を重視し過ぎるという事だ。曰く、もともとアメリカで考えられていた市民が持つべき、イギリス（＝他国）から束縛されない「自由」の概念が日本に伝わった際、それは一切の束縛が無い「自由」という風に間違って捉えられてしまったという。この「自由と国民意識」については、本会議でも議論された。

ナショナルアイデンティティを語る上では、国民意識という目に見えない繋がりがどのように形成されるのかを知る必要がある。防衛大ではこの点をはっきりと見ることが出来、以後の活動に大いに役立った。（竹内 智洋）

4. ダライ・ラマ法王日本代表事務所訪問

日時：6月12日

参加者：飯倉、杉本、竹内、庭野、松下

チベット問題について、チベット亡命政府側の意見を学ぶべく、ダライ・ラマ法王日本・東アジア事務所の代表で自身も幼少期に亡命しているラクパ・ツォコさんに現在チベットで問題になっていることや、将来像について伺った。

「事実」を隠し続ける中国政府、寺院等がいつも監視されていて、言論の自由がない。環境汚染や貧富の差なども加わり、今でも毎年多くの人が亡命しているそうだ。ダライ・ラマ法王は、解決策として、独立はせず、外交・防衛以外は自分で管理する、「高度な自治区」という案を中国政府に提案している。なぜ命を危険に曝し、民族のために抗議運動をするのかと質問をした。「チベット文化は、世界最古の文化の一つである。仮に国がないとしても、私たちのアイデンティティや文化＝ダライ・ラマ法王、チベット仏教、基本的人権は護らなくてはならない。」という答えが印象的だった。中国政府側の主張と比べつつ、更にこの問題を考えていきたい。

（松下 マエス）

5. 靖国神社　遊就館

日時：6月13日

参加者：杉本、竹内、庭野、松下

靖国神社についてはA級戦犯合祀の問題が取りざたされることが多いが、今回は靖国神社の役割について神社の方にお話しを伺い、神社側の理念を理解することを目的とした。靖国神社の根本的な役割は、国家のために亡くなった方を絶えず慰霊することだ。この点について誤解が多いが、２点を挙げて靖国の正当性を説明していた。まず、近代国家の成立により、その国の犠牲になった方々を祀る仕組みができたのは靖国神社のみではなく、他国でも見られることであり、それ自体は問題ないということ。２点目に、戦前を振り返っても、国家による靖国神道への強制力はなかったこと。事実、靖国神社は日本人に一番なじみ深い“神道”を通して、犠牲者を国家で祀るという論理を持っており、遺族が個人的に追悼する際には各々の宗教による慰霊を認めていたということだ。

遊就館では日本の近代に関する資料が保守的な立場から展示がされており、第二次世界大戦の部分だけをみても、沖縄研修で訪問したひめゆり祈念館とは全く異なる描写がされていた。どちらが正しいというわけではないが、歴史認識についてはその描かれ方がどのようなスタンスに基づいているかをしっかり把握した上で、自分の価値観と照らし合わせることが重要だと思った。今回受けた説明や遊就館の展示が、本やメディアなどで自分が今まで知っていた靖国神社や歴史のイメージと異なっていたために、若干戸惑いを隠せず、メンバーとも靖国神社に対する色々な考えについて話し合った。さらに、靖国神社前を保守派の街宣車が活動していたり、失った戦友を讃えてか、軍服姿で木製銃を持って境内を行進し、参拝する人もいた。それぞれに違った価値観があり、自分はそれを干渉する権利もなく、そういった意見があるのだという意識を持つことが大事だと感じた。

（庭野 啓太）

6. 朝鮮大学校訪問

日時：6月17日

参加者：飯倉、竹内、松下

朝鮮学校唯一の大学教育相当機関である朝鮮大学校を訪れ、在日の歴史と高校無償化問題を中心とした講義を受け、校内見学と学生との座談会を行った。今回の訪問の中心となった任京河先生の講義では、在日と朝鮮学校の歴史、現在の在日が抱える問題、高校無償化問題の発端と現在までの進展状況について、戦後の朝鮮半島との関係の変化に伴う朝鮮学校の教育目的や内容の変化、在日にとって帰化が意味すること、そして高校無償化対象からの排除はどういった差別の問題なのか等についてお話を伺った。また、映像を通して過激な右翼団体「在特会」(「在日特権を許さない市民の会」)による京都朝鮮学校襲撃事件についても知り、差別の問題の深刻さを身近に感じた。座談会では日本のマスコミ報道をシビアに受け止める朝大生の姿が印象的であり、訪問後、知ろうとしないことや無関心であること、社会的な差別を黙認してしまうことは私達自身が差別に加担してしまうことではないかという話をした。

（飯倉 江里衣）

写真：朝鮮大学校にて

■本会議活動

IN、DC、NOの各サイトではテーマやメンバーの興味に沿ったフィールドトリップを行い、ベトナム系アメリカ人や在日朝鮮人についてのケーススタディ、ファイナルフォーラムに向けた議論を並行して進めた。一部のフィールドトリップについては、下記で報告する。SFサイトでは、最終発表の準備とともに、様々なナショナルアイデンティティに関する問題解決の一歩となることを目的に、ビデオとブログを作成した。

●フィールドトリップ先一覧

・Mona Bahn 教授によるレクチャー
・American Council of Trustee and Alumni 訪問
・国連開発計画　ワシントン D.C. 事務所訪問
・Arlington National Cemetry 訪問
・Holocaust Museum 訪問
・VAYLA(Vietnamese American Young Leaders Association) 代表とのディスカッション

本会議中のフィールドトリップ

1. Mona Bahn 教授によるレクチャー

日時：7月28日

Bahn 教授による講義では、現在のナショナルアイデンティティが複雑になった要因としての Globalization や、Cosmopolitanism など、議論の基本となる概念や用語について説明していただいた。

また、ナショナルアイデンティティについて2つのモデルを議論した。一つは、アメリカ型/"multi cultural model" とした多様なアイデンティティを認めるもの。もう一方は、フランス型/"over arch model" とした異なるアイデンティティを包括するような、より上位のアイデンティティを認識するものだ。

最後に、「文化は流動的であり、衝突しない。（個人のアイデンティティとして）同時にアメリカ人であり日本人であることも可能だ。」と『文化の流動性』を強調していた。　（松下 マエス）

2. American Council of Trustees and Alumni

日時：8月4日

Bradley Project というアメリカの教育に関する企画について話を伺った。説明して頂いた Ms. Neal は、アメリカに年々増加する移民の流入により、アメリカ国民としてのアイデンティティが失われつつあると問題意識を持っており、これを解決すべくアメリカ史を大学の必修科目に取り入れようという運動をしている。私たちは常に、多様性を守る事を第一に考えた議論を進めていたため、彼女の考え方はそれと全く異なり、大変興味深かった。

『白人が勝ち取った自由』を意識させることで、アメリカに対する帰属意識を植え込むべきとした彼女に、私達は多くの疑問を投げかけた。「愛国心」は何故必要なのか。必要である場合、教育を通してでも植え込むべきものなのか。多様性を重視する中で、白人を「ヒーロー化」するべきなのか。ここでの議論を通して、分科会の最終目標について考えさせられた。　（竹内 智洋）

3. 国連開発計画ワシントンD.C.事務所

日時：8月5日

UNDPはEnd Poverty by 2015というプロジェクトを掲げており、今回の訪問ではこのプロジェクトの説明と、それに対する質疑応答を行った。特に興味深かったのは、国連組織の説明の際に伺った、UNDPの計画が各国にどのようにして同意を得られ、実行されていくかという部分だ。説明して下さった職員の方は、UNDPの計画は国連加盟国によって署名されるが、国家横断的に計画を実施する際には、地域のCultural Sensitivityを尊重していくべきだと述べていた。End Poverty by 2015のstand upというプロモーションでは、国連というグローバルな立場から各国政府に対してスローガンを掲げるだけでなく、市民の草の根レベルでも実行していくプロセスを見て取れた。国家という枠組みを超えて活動する方のお話を伺い、Global Citizenshipのイメージが少し明確になり、有意義な機会となった。　（庭野 啓太）

4. Arlington National Cemetry

日時：8月6日

日本側参加者の要望で、アーリントン国立墓地を訪れた。渡米前に靖国神社を訪れていた為、それぞれの国においてどの様な扱いになのか興味があった。

真っ白な十字の墓石が延々と並ぶアーリントン墓地は我々にとって初めはただただ驚きだった。墓地では、笑顔で写真を撮っている人を数多く見かけ、観光バスの様なものも通っていた。靖国神社の場合は、第二次世界大戦やA級裁判が連想され、ネガティブなイメージを抱かれがちなのに対し、ここは人々にとって自由の象徴のようだった。私達は、もし日本が戦争に勝っていたら靖国神社が日本人にとって自由の象徴となっていたのか、など議論した。　（竹内 智洋）

5.VAYLA(Vietnamese Amerian Young Leaders Association)

日時：8月12日

VAYLAは公益事業や文化の繁栄、積極的な社会変革を通じてベトナム系アメリカ人の権利獲得と若者の意見反映を目指す、ニューオーリンズのコミュニティーベース型、青年主導型組織だ。この組織の創設者であり執行役員でもあるMinh T. Nguyenさんから、組織の取り組みやニューオーリンズのベトナム系アメリカ人コミュニティーの問題についてお話を伺った。また、訪問後に自主制作映画「New Orleans: A Village Called Versailles」のDVDを観賞してディスカッションを行った。

これらから、1975年以降アメリカに移住したニューオーリンズのベトナム系アメリカ人第一世代と第二世代の若者達が、ハリケーン・カトリーナをきっかけに一丸となって政治的な声を上げ、自分達の権利を訴えてきたということを知った。特に、彼らが「アメリカ人」としての権利を訴えている点は、アメリカの市民権を持ったマイノリティーと日本国籍を持たない日本のマイノリティーの問題の違いについて考える機会となった。

（飯倉 江里衣）

■ファイナルフォーラム

私達は、移民や少数民族に対する社会の問題意識を高め、適切な考え方を広めることを発表のゴールとした。今回はアメリカと日本の問題の事例として、特にベトナム系アメリカ人と在日朝鮮人に着目した。

まず、『知覚されるアイデンティティ』(Identity Perception) と『投影するアイデンティティ』(Identity Projection) という二つの概念を紹介したい。前者は、他人がみる個人のアイデンティティであり、後者は個人が自分で認識するアイデンティティだ。私達は、この2つのアイデンティティ間に「ずれ」が生まれたとき、様々な問題が起こると考えた。実際にこのモデルを各事例に当てはめてみると、ベトナム系アメリカ人も在日朝鮮人も、社会から見た彼らの姿と彼らの実情は全く異なっていた。それらが社会的な差別や不満につながったのである。

そして、「理解を促す」社会の実現が、この「ずれ」を解消し得る一つの答えだろう。それは、ひとりひとりが違いをタブー視せず、社会と個人が常に対話をし、お互いを理解しようと試みる中で実現する。また、実現への一歩として、ブログとビデオを制作した。これらを通じ、会議終了後も議論を継続し、広くこの問題を知ってもらいたい。

Video URL:Identity Construction & Social Integration in the Globalizing World

http://www.youtube.com/watch?v=H9OQSJPJLkA

Blog URL: Identity and Integration

http://identityandintegration.blogspot.com/

■分科会参加者の声

【飯倉 江里衣】

事前活動、本会議活動を通して、私がRTペーパーで取り上げた朝鮮学校の高校無償化問題に対して他のメンバーが興味を示してくれ、活動の中心に据えて皆で議論し考えることができたことが私にとっての大きな成果だと思っています。私のJASCへのイメージは多くの学生が日本、或いはアメリカへの関心を持ち、日米という枠組みの中で議論を進めるというものでした。まさにそうしたイメージを崩すことのできる場、自ら土俵を作ることのできる場が私にとってのJASCであり、RTでした。

NID分科会はとことんぶつかり、衝突を繰り返しながら分かり合おうとするメンバーが多く、本当に様々な意見が出ました。自分達の日常の常識を超えてどこまで議論ができるか、考えることができるかということが一つの課題だったように思います。

一番苦労したのは、最終フォーラムで何をどのように発表するかを決める段階であり、結論部分で何を主張するのかということでした。私達RTの提言でもあり、私達がこのRTを通して学んだことは、まさに議論を止めず、考え続け、あらゆる人々の声を尊重し理解することでした。どこまでそれが本会議中に実践されたかは分かりませんが、本会議後も作成したブログ等を通して引き続き多くの人々と対話を続けていきたいと思っています。

【竹内 智洋】

第62回日米学生会議でNID分科会の一員となれてよかった。私は人生のちょうど半分ずつを日米で過ごしてきたが、その中で自分が経験した事全てを振り返り、活用させてくれた。国際化と共に広がる多様性。そして、多様性と共に世界各国で起こるアイデンティティの衝突。これらの問題を通し、現代の国家の意義や人々が持つ意識の欠点に気がつくことが出来た。また分科会を通して本当に貴重な経験をさせてもらった。一番印象に残っているのは、国立にある朝鮮大学に実際に行き、在校生と話をしたことである。メディアを通して色つきメガネで見てしまっていた私であったが、実際に同じ年の彼らと話す中で、例えある国が何をしようとその恨みを個人的関係に反映させてはならないと強く感じた。

また、会議の中で最も長い時間を共にしたのも分科会メンバーだった。分科会を通して出会った尊敬出来る仲間から教わった事は数えだしたらき

りが無い。事前活動を含めた3ヶ月ほどを共に一つのゴールを掲げ過ごした時間、期末や課題に苦戦しながらも常に互いに励ましあい困難を乗り越えた。自らに課せられた仕事を淡々と行うメンバーから常に私は身を引き締め、頑張ろうと思えた。

分科会を通して私は知識面のみならず人間として少し成長できたのではないかと思う。まったく個性の違う10人のメンバーが何故ここまでうまく出来たのか私は未だに不思議だが、分科会で得た経験を今後に生かし、分科会で得た絆な一生守っていきたいと思う。

【庭野 啓太】

第62回日米学生会議のテーマが「衝突と共鳴」、ということから、分科会でもためらわずに自分の思いをぶつけることを個人的な目標に抱えていたが、それが十分にできたかというと、全くそうではない。特に第3サイトのニューオーリンズでは自分の体調があまりすぐれなかったこともあり、議論に妥協を重ね、自分の頭でしっかり考えることもなく、その場の雰囲気に流されてしまうようなことが何度もあった。そうした中、他のメンバーが目の前の問題から逃げずに議論を重ね、ひたむきに前に進もうとしている姿を見て、申し訳なくも思った。実際、ファイナルフォーラムの後に皆で集まって開いた分科会のリフレクションの時間には、後悔の念がよどみ出てくるような思いだった。

しかし、最高の仲間に巡り会えたことに感謝せずにはいられない。こんな自分でも1ヶ月間支えてくれ、ともに笑い、たわいもないことで議論しあった仲間がいたということは本当にありがたい。「自分に自信を失うことは、自分を信頼してくれる人に失礼だ」とジャパデリの一人が言っていたが、彼らは確実に自分を信頼してくれる人たちだった。会議も終わり、分科会も解散してしまったが、彼らとの関係がこれからもずっと続くことを思うと、本当にこの会議に参加して良かったし、これからも自分なりにがんばっていこうと心から思う。

【松下 マエス】

なぜ日米学生会議に応募したのか？とよく聞かれる。アメリカに行ったことがないから、という理由もあるが、やはり一番は興味のあるNID分科会があったからだ。「私は何人なのか」というのは以前から、そして今でも個人的な葛藤課題である。パーソナルな事を10人で議論する勇気をくれたという意味でも、まず分科会リーダーの友里とIkunoにExcitingなテーマを選んでくれたお礼を述べたい。ありがとう！

メンバーになってから、ただアメリカに行って楽しむプログラムではないと知った。ダライ・ラマ法王とお会いし、朝鮮大学校を見学したり、アメリカでベトナム村に行ったりなど、NIDでなかったら絶対できなかったことや、興味がある分野が増えた。メンバーと議論することで、もっと考えさせられた。そんな自由でChallengingな雰囲気を共有してくれたNIDメンバーのみんな、ありがとう！

世界にある様々な問題を、学生がすぐに解決をすることは不可能だ。しかし、できないと諦めていては何も変わらないままである。何かアクションを起こし、前進することの意義を教えてくれた、分科会活動でお会いした様々な分野の活動家の皆様、ありがとうございました。

来年は歴史教育やマイノリティーなど、NIDに関連したテーマも多いので、これからはぜひOGとして日米学生会議に関わっていきたいと思う。

■分科会コーディネーター総括

「ナショナルアイデンティティ」は、現代や、そこに生きる私たちを捉える一つの視点として、とても興味深く、そこから示唆されるものは膨大だった。育った環境、教育、メディアなど様々な要素から、無意識的／意識的に他者への描写ができあがり、それは時に彼らへの暴力として働く。しかし、在日朝鮮人、チベット人、ベトナム系アメリカ人、様々な場所に生きる様々な人々に出会い、対話する度に、他者について絶対的に正しい描写などあり得ないと痛感した。また、相対的だからこそ多

様に存在する描写を許容する「寛容さ」の重要性にも改めて気づかされた。そして、この描写は、変わり続ける社会と、自らの経験を通してさらに変化するものであり、私たちには今後より一層の想像力が求められるだろう。

出身も人生経験も全く異なる10人による議論は尽きることなく、まさに十人十色の意見が飛び交った。激しい議論の中で、戸惑いながらも、最後まで真摯に向き合い、気遣い合い続けたメンバーには本当に頭が下がる。「多様性」とそこから派生する「衝突と共鳴」は、私たちにとって、テーマであり、手段であり、ゴールであり、私たち自身だったように思う。また、作成したビデオとブログは、一人でも多くの方に見ていただきたい。これらが少しでも多くの「衝突と共鳴」のきっかけとなることを願う。

1ヶ月間、あるいは1年間、実行委員として奮い立たせてくれたメンバーには感謝してもしきれない。最高のパートナー、最高のメンバーに恵まれ、誰が欠けても成り立たなかった。この分科会の一員であることを心から嬉しく思う。

最後に、事前活動、本会議中に当分科会の活動にご理解、ご協力いただき、大変有意義な機会を与えていただいた全ての皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

（杉本 友里）

写真：インディアナサイトにて

写真：ワシントン D.C. サイトにて

第5章
参加者の声

新井　良子

JASCとは、いったいなんだったのだろうと会議が終わった今でも思う。

この「声」を書いている間も、これを書くことによってある一側面で自分にとってのJASCをまとめた気になってしまうのではないかと、危惧する気持ちもある。

正直、わからないのだ。JASCがなんであったか。そして言葉にできないのだ。JASCでの日々を思い返すと、私の心は忙しく動き回るから。

合格通知をもらって信じられない思いで始まった春、そこからいろんな毎日が変わっていった。読む本が変わった。生活スタイルが変わった。ものの見方が変わった。

春合宿に参加して、どの参加者の目も輝いていた。誰もがいきいきしていた。そしてECがどれだけ私たちひとりひとりを悩みながら選んでくれたかを思い知った。

一緒に受験して（私よりもずっと受かってほしかった人）一緒にJASCに参加することを楽しみにしていた人と一緒に参加できなかったことがわかったときから、私でよかったのか、という思いはずっと離れなかった。何かしなくちゃ、JASCの役に立たなくちゃ、そればっかりが先立って、プレッシャーで押しつぶされそうになった。

けれどそんな思いとは裏腹に日本での本会議までの毎日は飛ぶように過ぎて、JASCの醸し出す独特の雰囲気はときにこのプレッシャーをあおった。日本語でも伝わらないことがあると知って唖然としたり、自分の気負いに息苦しさを感じることもあった。こんなに自分の厭な部分を見たのは初めてだった。しかもこの感情にどう対処していいのかわからなかった。ただ、苦しかった。
この閉塞感がピークを迎えたのが直前合宿。楽しみは消え、本会議は不安でしかないと涙がこぼれた。

飛行機で再び反省し、さんざんネガティブになった私を迎えてくれたのはAmedelesの笑顔だった。JASC songを歌って出迎えてくれたAmedelesを見たら、とうとう会えたんだ、という思いと、ここから私たちがJASCの伝統をつないでいくんだ、という思い、そんないろいろが入り混じって、心が揺さぶられて涙が出た。泣いてばっかり。

所属した分科会地域再生はみんながみんな個性派揃いといわれたが、やる気と向学心と思いやりのある、素敵な分科会だったと思う。RTリーダーは忙殺される日程の中、身を削って分科会を支えてくれた。英語が苦手な私にいつも助け舟を出して理解を支えてくれたり、分科会が回るようにさまざまな工夫を凝らしてくれた。

特に本会議中の思い出に残るエピソードはフォーラムでの質問をRTメンバーのAmedeles全員が添削して背中を押してくれたこと。忘れられない一日となった。

毎日が刺激的だった。毎日が冒険で発見にあふれていた。毎日、新しい仲間の新しい部分に出会い、新しい自分に出会い、それでいて自分のコアに近づくような気もした。

こうして書いていると、JASCが本当に終わってしまったのだという事実が突きつけられる。そしてとても、悲しくなる。どうしようもなく。私たちは62nd Almuniになってしまう。

ひとつだけいえるのは、あの日々が明らかに非日常だったこと。そして、そこで出会った仲間は、私たち自身の人生のみならずきっと世界ごと変えるパワーを持っているということ。若者の戯言じゃない。たぶん本当にそうなる。

私の大切にしているお茶の言葉で「一期一会」というものがある。JASCで得た「一会」は未来につながる「一会」だ。それきりで終わりなんていうことは絶対に、ない。でも、あの非日常は確実に「一期」だった。あの場で出会ったことにはきっと、大きな大きな意味があるのだろう。

まだ、わからない。けれどいつかわかる。

その日までそれぞれがそれぞれの夢を持って、多種多様な舞台で活躍して、またいつかあの頃の笑顔を交わせる日が、私はほんとうに待ち遠しいのだ。

有川　慧

アメリカでの一ヶ月は本当にあっという間だった。日米70人の学生が作り出す笑いの絶えない空間はあまりにも心地よく、帰国してからというもの、日本の生活に上手く溶け込めてない自分がいる。毎日のようにコーヒーと栄養ドリンクを飲み、たわいの無い話に抱腹絶倒した思い出の一つ一つが、今でも私の心に鮮明に残っている。一ヶ月という限られた期間の中で、私は異なる価値観を持つ人々と出会い、またディスカッションやフォーラムに参加することにより強く刺激を受け、様々なことを学ぶ機会を得た。

私が日米学生会議に参加した第一の理由は、「平凡な日常から抜け出し、新しいことに挑戦したい」と思ったからである。そして、自分と全く異なる分野を専攻し、また異なる人生を歩む学生が、日々起こっている社会問題に対してどのような問題意識を持っているのか、新たな観点を得たいという思いがそこにはあった。これからどんなJASCerに出会えるのだろう—そんな期待抱きつつ参加した春合宿。初めて会った日本側デリゲーツは私の想像した以上にユーモアに溢れ、濃いキャラクターの持ち主が多く、初対面にも関わらずすべてをさらけ出す彼らのオープンさとテンションの高さといったら忘れられないものがある。本会議で私が出会った日米合わせて70人のJASCerたちは、一人一人ユニークで意識が高く、情熱溢れる議論をする学生ばかりであった。

分科会では、環境という幅広いテーマの下、9人のデリゲーツの持つ様々な価値観から一つのものを作り出すということの難しさを実感した。医学や経済学、工学など、多様な切り口から生まれる問題意識から一つの結論を導くこと自体、そもそも間違いなのではないか？—最終発表までの限られた時間の中で、各自の関心をある程度妥協しなければならないという現実は、以前から「あれも議論したい、これも議論したい」と胸を膨らませていた私をひどく歯痒い気持ちにさせた。
また、今まで専門家によって議論し尽くされてきたのにも関わらず、未だ解決法が出されていない環境問題を、自分の問題として考えることが如何に困難であるかということを改めて思い知らされた。政治家でもなければ研究者でもない我々学生が一ヶ月間話し合ったところで、この問題を解決することは可能なのか？—諦めの念が私の脳裏を過ることも幾度もあった。JASCerとしてできること、役割とは何だろう？この問いは本会議の間、常に私の頭を悩ませた。

JASCを通して私が何を得たか、人々に何を与えたかを説明することは難しい。まだ自分の中でもこの一ヶ月をリフレクトしきれていないのもあるだろう。ただ一つ確かなのは、JASCで得た刺激や貴重な経験はきっかけにすぎず、これを生かすためには自分たちで掲げた問題についてこれからもずっと考えていく必要があるということである。JASCの終わりはファイナルフォーラムでもなければ、本会議最終日でもない。私はただ「楽しかった！」という一言でこの経験を終わらせたくないのである。

これからの将来を担う人材として、実現が困難かつ差し迫った問題に自ら立ち向かうということは、多大なる勇気を必要とする。今までその問題から逃げてばかりいた自分が、JASCのメンバーとして、日本とアメリカの学生の代表として議論の場に立つことで、数々の困難にぶつかり、また多くのフラストレーションに悩まされた。しかし、この会議を通し、苦しみの中でも諦めず、たとえ偉大な功績を残すことはできなくても、その問題と真正面から向き合い自分たちの問題として考えることの大切さを知った。日本とアメリカが互いに協力し、その小さな努力を積み重ねることによって、我々の住む社会に変化を齎すことができると信じている。

最後に、この第62回日米学生会議を作り上げてくれたECの皆、いつも支えてくれた環境分科会の皆、その他サポートをしてくださった全ての人々に感謝と敬意を表したい。本当にありがとうございました！

飯倉　江里衣

誰にとっても貴重な夏休みの1ヵ月、或いは日本での事前活動を含めた4ヵ月、またECにとっては1年半近くをJASCに注いだことはどれだけの意味を持ったでしょうか。私にとっては、特に1ヵ月の本会議を通して、自分にとってのJASCの持つ意味が大きく変化しました。学部時代とは異なり、自分の研究と論文に集中した学生生活を送る私にとって、ECのようにJASCに長期間尽くすということは考えられず、なぜそこまで熱心になれるのかということが理解できませんでした。しかし、本会議を終えてみて私もECを経験してみたかったと思えるほど、気づけばJASCが大好きになり、私の中でJASCの存在がとても大きなものとなっていました。

私が感じたJASCの良いところは、学年や年齢、出身、国籍、人種、信条、様々な価値観や考え方を超えて一人一人が相手を理解しようとする場であることです。ありのままの自分を受け入れてくれる仲間がいて、自分自身もそういった姿勢を知らず知らずのうちに身につけられる場です。そして自分の良いところや悪いところを含めて理解してくれる仲間がいるからこそ、自分が素直になれる場でもあります。笑いたい時に笑い、怒りたい時に怒り、泣きたい時に泣き、苦しい時や困った時にはそれを隠さないでも周りが助けてくれる、お互いがお互いを助け合い補い合える場なのです。更にそうした1ヵ月、若しくはそれ以上の密度の濃い時間を共に過ごし、一生付き合える友人に出会えるのがJASCの最大の魅力でもあるでしょう。私がこれからのJASCやJASCerに望むことは、諦めず自分の中でとことん考え抜くということです。これは本会議前の事前学習から心掛けて欲しいことです。そして、本会議でこれを伝えたい！これを言いたい！という自分の気持ちを持って行くことをして欲しいです。更に自分を最大限に相手にぶつけ、他者との衝突や対話を通じて自分自身ともしっかり向き合うことが大切だと思います。一人一人が満足のいくRT活動のために、RT活動の在り方を考え直すことも今後の課題として必要かもしれません。何らかの達成を目指し、その後のJASCや自分達に繋がるものを作り上げることも提案の一つとして考えます。私はこれからもJASCで知り合った仲間達と親密な関係を保ち、世界の様々な問題について共に考え、またその重要性をこれからのJASCer達にも伝えていきたいです。

井上　聡美

私が日米学生会議を通して目指したものは「自分」を見出すことである。私は日米学生会議に参加するまで自分に自信がなく、他者の視線や考え方をいつも気にしていた。他者の評価や意見によって自分が形成されているように感じ、その周りから作られる自分という像に違和感を覚えていた。周りに左右されない、何か確固としたほんものの「自分」の像を掴みたいと思い、この日米学生会議に参加した。

そのような目標を持つ私にとって、分科会は目標を達成する絶好の場であった。そのため私は学生の社会参画分科会の中で自分の意見をはっきりと持つこと、そしてそれをしっかりと主張することを重視した。当然そこで分科会のメンバーとの意見のぶつかりは生じ、議論は私の思った方向から外れていってしまうことがたびたびあった。私は自分の意見を分科会のメンバーにわかってもらおうと、決して流暢ではない英語で精一杯説明したが、その思いは必ずしもいつも通じるわけではなく、何度も何度も悔しい思いをした。しかし一方で意見がぶつかるたびに嫌でも他のメンバーの意見に向き合って理解し、そしてその意見と自分の意見を照らし合わせまた新しい自分の考え方を発信していかなければならず、意見がぶつかるたびに自分の意見はより深いものとなっていった。

その時私は、他者に左右されない「自分」をほんものの「自分」だと思っていた私自身の考え方がいかに愚かで意味のないものであるかに気づいた。「自分」というものは他者と関わることによって深まっていくものであり、変化していくものであること。そしてそれが自分を形成してゆくこと。

そして「自分」を深め、変化させてくれる他者の存在に感謝して生きていかなければならないこと。ほんとうはそれらが大切であることに初めて気づかされた。今回の日米学生会議では分科会活動に限らず多くの「他者」と出会い、多くの「自分」に出会った。多くの妥協をし、多くの新しい考えを見つけた。このたくさんの発見の中で確実に私の考え方は大きく変わり、見える世界が明るくなったように思える。このように私を変えてくれたすばらしい「他者」たちに感謝したい。第62回日米学生会議のみんなに、ありがとう。

大井　芳季

「やはり非常に空白感を感じる。単なる時差のLAGだけではなく、それ以上に強烈なLAGだ。けど、これほどの空白感があるというのは、それだけ昨日までが強烈なimpactだったということだろう。そしてそれこそ正に自分が欲していたものかも知れない。」

この報告書を書くために、JASC中の日記を読み返していたら、最後の日付(帰国した夜)の日記の中にこう書いてあった。(ところでJASC中の日記にはこのように中途半端な英単語が無意識に混じっていてどうも可笑しい)。

終わって直後の、消化される前の感情をそのまま書いたものだ。なので、少し時間が経った今、自分に「C」(= Clarify; 内容を平易に説明すること)してみようと思う。(本会議中、米国側参加者にCを大量に要請した記憶があるが、自分がCする立場になるのは今が久しぶりである。うーむ。)。

一つ目のCは、何が「強烈なimpact」をもたらしたのか？ということ。大きな要因は、個性的なメンバーが二十四時間一緒に居ること。今アパートでPCを打っている環境からは想像もできない。そして、最大の要因は、何でも挑戦できる環境だと思う。「一秒も無駄にしたくない」という想いを多くの人が持っていたと感じる。専門外のテーマでも議論の司会に立候補してテーブルをリードしたり、講演会のQ&Aで失礼覚悟で率直な疑問を聞いたり、お互い知識不足は認めつつもルームメイトとハイエクの思想について議論したり、歌の経験は無いがタレントショーでボーカルをやってみたり、及び腰にならない限り何でもできる。失敗しても誰も蔑まないし、それどころか今の自分の弱点／課題はここなのだナという発見が次々もたらされる。

二つ目のCは、「正に自分が欲していた」とは？ということ。当初の参加目的は二つ。一つは培った議論力や知識を試したいということ。二つは経済学をやっていると大きな存在感で迫ってくるアメリカという(少し面白い)国で、市場主義やリベラリズムが、普通の人、特に学生の間でどう捉えられているか議論したいということ。これら二つの目的には、大きな手応えを得られたのは確か。そしてそれに加え、前述の「impact」に満ちた生活、そこで得られた自分の課題の発見や仲間が、予想以上に非常に素晴らしいものだったといことだろう。

以上、自分にCを試みてみた。そうして今見返すと、「空白感」という表現に違和感を覚える。今は寧ろ、前向きな姿勢と力が手元にあるのを強く感じる。

大宮　透

「自分にとってのJASCとは、いったい何だったのだろうか。」

おそらく、参加者感想を書くにあたって、殆どのJASCerたちが自問自答してきただろうこの問いを目の前にして、私は今なお、その答えに窮している。何か「もっとも」らしい答えを必死にひねり出そうとしては、これまで幾度となくパソコンの前で途方にくれ、髪の毛を掻きむしる日々を送ってきた。どうしても、うまく感想が纏まらないのだ。

1年間にも及んだ実行委員としての活動を経て、昨年とは比較にならないほどJASCについて詳しくなったはずの自分が、いったいどうして感想ひとつ纏められないのか。私なりに思いを巡らせていくうちに、最近その理由がなんとなく見えてきた。

ひとつのキーワードはJASCの「内部化」だ。61回参加時点での私は、どこかJASCという団体や活動を「外側」から捉えていた。だからこそ、比較的容易に、客観的視点からJASCを観察することができたのだと思う。しかし、1年の月日は、JASCを私の体の一部のような存在に変え、JASCもまた、私をその歴史の一部へと迎え入れてくれた。「内部化」されたJASCを、客観的な視点で捉えることは非常に難しい。これが1つ目の仮説である。

もうひとつは、私自身の「変化」である。この間、本会議中の写真を何度も眺める中で、ひとつ気づいたことがあった。たとえ同じ写真であっても、それに対する自分自身の感じ方が、日々変化しているのだ。それと同様に「JASCとは何か」を考えてみても、その答えとなる部分や重要だと感じるポイントが、少しずつ変化してしまうのである。「情報」としての写真やJASCでの経験自体に変化がないのであれば、これは「見つめる側」としての私自身の変化を示しているのだろう。この事実は私にとって喜ばしいことである反面、故に感想文を書き上げても、次の瞬間にはなんとなく違和感を持って、それを捉えてしまうという現象が起きた。

これが2つ目の仮説である。

もしこれらの仮説が正しいのであれば、内部化されたJASCを客観的に捉え直すには、もう少し時間がかかるように思える。私にとってのJASCが持つ意義もまた、私自身の変化とともに変わっていくに違いない。70名のかけがえのないメンバーとともに過ごしたアメリカでの1ヵ月が、今後どのような意味を有していくのか。今は想像もつかないけれど、その変化を、私は精一杯楽しみたいと思う。未来のある地点でJASCを振り返ったとき、また新しい発見ができる人間であるように、私自身も前進を続けていきたい、そう思える自分がいる。

常にそこにあって、自分自身の立ち位置や変化を指し示してくれるJASCという存在に出会えたこと。出会わせてくれた友人。そして、開催を可能にして下さったすべての人々に感謝の意を表して、私の感想文としたい。本当に、ありがとうございました。

奥谷　聡子

渡米してすぐにEarlham Collegeに到着した時、アメリカの学生がJASCソングを歌い、日本人学生を温かく迎えてくれたのを今でも鮮明に覚えている。あの時、初めて70人全員が集まり、日米学生会議はいよいよ始まったのだと実感した。今振り返ると、1カ月間の分科会活動は本当に充実しており、一生の友人に出逢うことができた。しかし、そこに辿り着くまでは決して楽しいことばかりではなく、多くの困難にも直面した。最初は皆自分の意見を出しきれておらず、第二サイトまで順調に進んでいたかのようにみえた議論も第三サイトからはファイナルフォーラムの発表内容や形式について議論は行き詰まった。更に分科会内でうまく英語でコミュニケーションがとれずに何度も同じ議論の繰り返しが続き、メンバーのストレスは限界まで溜まり、ある時点では諦めの雰囲気が漂った事もあった。そんな時、私は言語の壁を越えて一生懸命に意見を伝え、理解しようとしていた日本とアメリカメンバーの姿に何度も励まされた。だからこそ、どうにも抜け道のないように思えた案もそこから妥協案を考え出せないか、私は諦めずに提案し続けた。その結果、全員の当初の思い通りの最終案にはならなかったものの、全員の意見が反映された素晴らしい最終発表ができたと確信している。今年のテーマにもある「衝突と共鳴」という言葉だが、私がこの1カ月から学んだ事は、理解するということは時に妥協するという事でもあり、どんなに解決不可能にみえる問題に直面した時も諦めずに理解し、伝えようと努力し続けることが最も重要だと感じた。お互いに理解しようとすることを止めた時点でその問題の解決策は二度と見えてこない、同様に自ら学ぶことを止めた時点でその人の成長はそこまでで終わってしまう。国籍も言語も違う学生が共に過ごし、様々な問題について議論する日米学生会議の意義とは何か考

えてみた。特定の利害関係に縛られない学生だからこそ、そのような立場に縛られている人々が率直に話し合えない、タブーとされている繊細な問題についても学生レベルで正面から堂々と議論し、理解し合い、その後には何もなかったかのように笑顔でジョークを交わし、友人としてお互いを尊重し合えることなのだと思う。最後に、国際教育振興会をはじめ、実行委員の皆さん、会議の実現にご協力して下さった全ての方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

尾崎　裕哉

＜非現実の28日間＞

私は日米学生会議の最中、常に「日米学生会議だから出来る事」にこだわり続けた。だが、正直、今現在もこの夏の経験を完璧に消化しきれているとは思えないし、納得の行く答えが見つかっているとも思えない。考えてみれば、米国や欧州で10回以上夏期プログラムに参加した事があるが、この様な気持ちは実感した事がない。日米学生会議の濃密さと独自さが伺える。独自であると分かっているにも関わらず、それを私の中で言語化できはしなかった。でも確かに、この非現実の28日間は私や仲間にとって凄く重要な意味を示している。何故だろうか？

二ヶ月間の事前活動や本会議では日米同盟や沖縄基地問題等、これまで深く考える事無かった問題や、世界での日米の役割を真剣に考えるきっかけになった。この会議に参加していなければ知る由も無かった歴史を知った。そして、自分の今の限界、自分の無知さ、そして心の狭さを気付かされる様な出来事が幾度もあった。どんな時も私の頭の中でこだましていた言葉は、62回日米学生会議のテーマである「世界の問題を私達の課題へ」という言葉だった。当事者意識を持つ事の難しさと同時に真義を問う事の大切さを学んだ。そして、より良い世界の共創はそこから始まるのだと強く感じるきっかけになった。

日米学生会議は「Life Changing」を唱っているが、参加して数日が経つ今だからこそ、これは嘘ではなかったと言える。自分を含め、70人の参加者それぞれが会議参加前と後の顔つき、物事に対する姿勢が変わっている事は間違いない。自分では気付かない様な小さな変化から実感出来る大きな変化まで、幅広い変化を遂げた仲間達を私は目の当たりにしてきた。日米学生会議はこれまでの世界観を変える気付きの場であると同時に、人生において重要な絆を築く場あると言えるだろう。沢山の気付きの中には、挫折を味わう様なものもある。しかし、それを乗り越える事が出来たのはJASCという特別な場に集められた、頼れる仲間達と共に悩み、共に議論し、共に歩む事が出来たからかも知れない。私は彼らと世界を駆け抜けたい。

日米学生会議とは、成長する会議である。時代の背景と共に分科会も、理念も、そしてプログラムさえも変化し続けてきた。会議は毎回姿を変えていて、前に習い、全く新しいものへと毎年進化し続けてきた。でも根本にある、「学生視点」という核は変わらない。学生が学生の為に、沢山の支援を頂きながら、創り上げている。JASCでしか出来ない事、それは本当の意味で学生同士が掛替えの無い青春を共に創る事だと思う。そして、私はこの伝統の一部になる事がとても光栄に思える。

郭　ヒギョン

3回生の夏に参加した第62回のJASCは、自分にとって大きなチャレンジだったと言っても過言ではない。合格すると全然思えなかったきびしい選考の瞬間から、JASCの本会議が終わって振り返ってみる今の瞬間まで全てがあっというまで夢のようである。日本全国での学生と全米から集まった学生で70名近い人数が、毎日24時間を一緒に同じ場所で生活し、アカデミックで議論を行うという経験は誰にも接しやすいものではないだろう。個々人が持つ個性もバッググラウンドも様々で、皆の経験を聞くだけでも楽しい環境がJASCだった。しかも、高いモチベーションを持っている彼らと話していると、何気ない会話からも学べることが多くあり、そうした何気ない会話からいつの

間にか深い議論になっていく雰囲気もJASCの魅力ではないかと思う。5月のGWに行われた春合宿から6月の沖縄研修、7月の直前合宿、アメリカでの本会議などのメインイベントだけではなく、RT関連のFT、事前勉強の一環としての勉強会、様々な講演会やフォーラムへの参加など、事前準備にも力を注いだ。また、MLやSkypeを大活用し、時間・空間を超えてアメデリとの事前活動をしたことも、非常に勉強になった。しかし、何よりもJASCの最も有意義なところは、その活動が本会議中だけにとどまらず、そこから得られたものを自分の人生にどうやって生かせていくか悩むきっかけ、そして一生の仲間に出会えたことだと思う。こうした大事な経験を与えてくれたJASCに何かで貢献できるように頑張りたい。

片山　直毅

JASCを知った経緯はもう忘れてしまったが、HPで第62回のテーマ「世界の問題を私たちの課題へ～異なる個の生む衝突と共鳴から～」を目にした時の衝撃は、今でも忘れられない。それまでの大学生活に、どこか物足りなさを感じていた自分にとっては、心の奥に秘めていた何かを揺り動かされるような、そんな衝撃だった。「本気で語り合える仲間と出会いたい。」帰国生でもない、留学経験もない自分には縁遠く感じられながらも、この思いが自分を動かした。参加が決まり、期待が日増しに膨らんでいく一方で、歴史と伝統があり、多くの企業や財団、そしてOBの方々に支えられているこの会議の意義と、参加者としての責任について、考えるようになった。事前活動で訪れた防衛大学で、如何に国を守るかを日々学んでいる防大生や、普天間米軍基地から飛び立つヘリが、頭上を行き交う沖縄国際大学に通う学生達と語った時、私は、同世代の彼らの眼差しが突き刺さるように感じられた。“日本の代表として”アメリカに向かう学生。私たちは彼らの目にはそんな風に映ったのかもしれない。そんな経験から、「JASCの意義とは何か、JASCerとしての責任とは何か。」しばらくこの問いが頭から離れなかった。というより、早くその答えを見つけなければ、という強迫観念すらあった。しかし、会議を終えた今振り返ってみると、そのような問いにあまり意味はないということに気がつく。JASCの意義も、JASCerがそこから何を得たのかも、人それぞれである。私にとってのJASCの意義は、「本気で語り合える仲間との出会い」という一言に尽きると思う。始まる前からそうだったし、終わった今も変わらない。“世界の問題を私たちの課題”として取り組むためには、もうしばらく時間がかかる。しかし、このJASCで出会った仲間や培った経験は、この壮大なテーマに挑戦するための糧になる。その意味で、JASCはまだ終わっていないし、JASCerとしての“責任”はこれからの人生をかけて果たすことになるのだろう。

Once a JASCer, Always a JASCer.

加藤　梓

＜小さなことの積み重ねという教え。＞

一年間かけて作り上げた第62回日米学生会議が終了した。今の自分の気持ちを上手く表現できないのが率直な感想だ。嬉しいのか、悲しいのか、悔しいのか、寂しいのか。全てなのかもしれない。自分の気持ちを整理するまでにもう少し時間がかかりそうだ。

日米学生会議から学んだのかを考えても、答えが出ない。友好関係が危ぶまれている中で感じることが出来た日米間の絆の強さ、参加者の一人一人の表面上に見えない強さ、何か不具合があった時に自分から行動しようという責任感、信頼されるためにはどれほど努力が必要で、どれほど難しいことなのか、心を許せる友人を持つことがいかに幸せか、私という一人がどれほど無力で、どれほど周りに支えられながら生きているかなど多数のものが頭をよぎる。

言葉にしようとすると大切なものが表せなくて、心が苦しくなる。

理念の決定から始まり、広報、財務活動、選考、コンテンツ作成と8人のJECと8人のAECと共に一つ一つのJASCのパーツを作り上げてきたこ

の一年間は、私にとって自分を崩し、固める繰り返しだった。形の見えない、正解などないゴールに向かって16人で右往左往しながら一歩一歩進んでいった。

今思えば私達が通った全ての道の重みを感じられるし、物事は小さなことの積み重ねで作り上げられていくのだということを痛感出来る。日米学生会議を企画運営していくことも、信頼を得ることも、そして今後の日米関係に関しても、同じことが言えるだろう。

日米関係が危ぶまれていると騒がれている中、日米学生会議のような学生の小さな動きの積み重ねが求められるのだと思う。アメリカと日本という国単位で見るのではく、マリアマと梓がというように、個人単位で見ることが今後より必要なのだと思う。鈍感さと勢いと不完全な面をたくさんもっている学生だからこそ小さなことの積み重ねで大きな影響を社会に起こすこ可能性があるのだと考える。

1934年から始まる日米学生会議は62回分の参加者の強い絆を結ばれている。何十年も前の参加者の想いを背負いながら、受け継ぎながら私達はこれからも毎年開催していく。

私は第62回日米学生会議の実行委員として、いつまでも日米学生会議を守り続けていきたいと思う。今まで日米学生会議を守ってきて下さったOBOGの方々、あらゆる面でご支援して下さった方々、私を選んでくれた第61回の実行委員、第62回の参加者全員、そして最後にこれからも日米学生会議を守っていくと決断してくれた第63回の実行委員に感謝の気持ちを記しつつ、私達が作り上げた第62回日米学生会議を心の宝箱に大切にしまいたいと思う。

木本　篤茂

日米の優秀な学生にもまれながら、JASCでしか行けない場所にいったり、ここでしか出来ない経験を積んだりするという目的をもって参加していたが、その目標はよく達成されたと思う。「優秀な学生」という点に関して言えば各人が1ヵ月間専門的に学ぶ分科会のトピックに関するものでないディスカッションでも意見が途切れることなく飛び交ったことに象徴されるように、常日頃から様々な社会問題に目を向け、情報収集をし、自分の頭で考えることに慣れている人が多く、真剣なディスカッションの場や日常のちょっとした議論からも刺激を受けることが多かった。またJASCでしか出来ない経験と言う意味では、米国の国務省に入ったり、ニューオーリンズ復興の一環として家を建てる手伝いをしたり、といったことが出来たのは本当に有意義だった。

またそういった特殊なイベントとは別に、街中では環境意識、貧富の差の大きさ、サービス意識など様々な分野で日米の差異を感じることが出来た。現地にいったからこそ肌で感じることが出来るものだったと思うのでアメリカに行ったことの意義が感じられた。

栗原　隆太郎

第62回日米学生会議に参加できたことは、今後の人生にとって大きな糧となり、大きな影響を与えてくれるであろう事を確信している。特に印象に残った事について述べていきたい。

まず初めに、分科会活動が非常に思い出深い。「安全保障と日米」という非常に大きな分科会のテーマだったが、本会議前のジャパデリだけの事前活動、様々な人にお話を伺ったフィールドトリップ、本会議中のアメデリ、ジャパデリ共に繰り広げた数多くのディスカッション、その全てが私の興味分野である「安全保障」について多くの新しい視点、刺激を与えてくれた。分科会のメンバーとは時にぶつかる事もあったが、学生だからこそ、JASCだからこそ、お互いの本音をぶつける事ができたのだと思い、そしてそのような貴重な経験をさせてくれた分科会メンバーのみんなに感謝したい。

分科会メンバーをはじめとした、JASCer達との日々の会話やスペシャルトピックでの意見交換も大変印象に残っている。日本の政治の問題点やオイルスピルについてお互いの意見を交換したこともあれば、アメリカ史上最高の作家やベースボー

ルの素晴らしさについて熱く語られた事もあった。一ヶ月も一緒にいれば、真面目な話題からふざけた話題まで色々な事を話す事が出来る。確かにまだあまり話していない参加者もいるが、69人と思い立った時すぐに語り合えるという”非日常”がJASCにはあった。それがすごく楽しかった。

最後に、JASCに出て一番良かったと感じるのは、ベタではあるが、69人の新しい友達が出来たことだ。分科会でどれほど安全保障について語ろうが、著名な人から為になる講演を頂こうが、JASCが終わったあと一番心に残っていたのはJASCで出来た友達の存在だった。例え一ヶ月という短い時間でも、寝食を共にし、時に真剣に、時にふざけて語り合った友達はこれからの自分の人生に多くの良い変化をもたらしてくれると思う。そんな友達に会えたことが、JASCに参加して良かったと心から思える何よりの根拠だ。ありがとう！

斉田　英恵

アメリカで過ごした本会議は私の人生で最高の一カ月となった。楽しかったことは多かったが，それだけではなかった。辛いことや悩んだこともあった。しかしみんなの助けを借りながらそれらを解決していき，その分成長できた。自分がこれまで生きてきた環境とは全く違う環境で育ってきた69人と出会えた日米学生会議(以下JASC)は私にとって人生の交差点のようなものだった。ここに参加しなければみんなに決して出会うことがなかったかと思うと，JASCの経験がいかに貴重なものか実感する。それぞれの個性を尊重し合い，妥協せず本音で話せるみんなは私の一生の宝となった。

JASCへの参加は私にとって挑戦だった。今までこのような学生会議に参加したこともなければ，他分野の人と同時に議論したこともなければ，自分の考えを相手の考えと衝突して共鳴させたこともなかったからだ。それでもJASCのパンフレットの裏から聞こえてくる歓声，伝わってくる熱気に一途にあこがれ，一員になりたいと思い参加を決意した。合格通知をもらったときの喜びの後は，実は不安の連続だった。この貴重な経験を最大限生かさなければという気負いと大学との両立をさせることは，自分との闘いだった。

私はこのJASC参加の目標として，国際問題の議論に関して自信を得ることをあげた。将来につながるような自信を得たかった。しかし分科会(以下RT)の中でそれを形成することは，初めは難しかった。自分の考えが浅いため他のメンバーの主張に押され自分の考えが見えなくなってしまったり，勉強不足のため議論に加われなかったりしたからだ。しかしメンバーと米国4都市で時間を共にするにつれ，同じRTのメンバーによって自分の自信が支えられているのを実感した。英語での議論の内容を全員で確認し合ったり，誰かが発言の内容をわかりやすく言い換え合ったりした。お互いの成長を喜びあえる，信頼しあえる仲間だからこそそれが可能になったのだろう。

自分とは専門や生きてきたバックグラウンドが違うJASCで出会った69人から，異なる価値観，考え方など多くのことを学び，吸収した。しかし得られた多くのことを消化し自分のものにするまでは至っていない。最高に楽しい1ヵ月はもう終わってしまったが，私のJASCは今でも続いている。今後は自分の専門性を追求するとともに，他分野にも理解を深め，考えをブラッシュアップし，みんなと考えを共有し合っていきたい。

本会議が終わり，1週間が経った。大海原にぽつんと一人いる気分だ。この後どこへ進むかは自分次第である。しかし，JASCを通して自分の指針を示してくれるツールや仲間ができた。あとは自信を持って進もうと思う。

JASCのみんな，JASCを支えてくださった方々，大学の先生，友人，家族，私を支えてくださった方全員に感謝を伝えたいです。ありがとうございました。

齋藤　友理絵

振り返ると、アメリカで過ごした1ヵ月は、本当にあっという間の出来事であった。些細な冗談

から真剣なディスカッションまで、今の私にとっては全てが宝物だ。多様なバックグラウンドを持った学生たちが、JASCerという平等な立場と機会を与えられ、切磋琢磨しながら成長する。そこでは、全員が自分以外のメンバーに対して尊敬の念を持っていた。全員が他者に対して自分を表現する能力を持っていた。たまたまバスで隣に座った人と、ルームメイトと、人生や自分の悩みについて、会議の疲れも忘れ、時間の許す限り、いつまでもいつまでも話していた。たくさんの「あのときのあの人とのあの時間」を積み重ねて、今の私がある。そして、そのひとつひとつがかけがえのない財産だ。

私は参加者唯一の防衛大学校出身であり、安全保障に関する分野において意見を求められる機会が多かった。必ずしも正確な論拠に基づく回答が出来ない悔しさや、自分のアイデンティティについて考えさせられると同時に、予想以上に自衛隊や日本の安全保障問題に関する知識を他の学生が持っていたことに驚かされ、議論を深めることが出来た。それは同時に、大きな喜びでもあった。JASCer達の率直な疑問が私にとっては新鮮で、彼らの一言一言に、自らが負う責任を感ぜずにはいられなかった。この体験を生かすためにも、近づく任官の日が楽しみである。

JASCのみならず、1ヵ月過ごしたアメリカという国についても、自分の抱いていた印象を変える契機となった。日本では考えられないほどの貧富の差が、現実として存在していた。小さな子供が路上でダンスを踊ってお金を稼いでいた。ホームレスは皆、手に手にコップを持って、また手のひらをおわんにして、1ドルをくれ、と言ってくる。路上でドラッグが吸われている。世界の大国アメリカの抱える内在的な諸問題を目の当たりにし、少なからず衝撃を覚えた。

JASCとは、集団の中の自己、自分の中の自己について深く考えることのできる場であると思う。よく言われる‘JASC is a life changing experience’とは、誰が言い出した言葉だろうか。誰がこんなにもぴったりな表現を思いついたのだろうか。いや、ぴったり過ぎたからこそ、自然と共有される言葉となったのかもしれない。JASCで得た絆には、大きな力がある。短い人生における短い1ヵ月の、本当に本当に貴重な体験であった。Once a JASCer, forever JASCer! Thank you for all !

坂田　奈津希

「好きなものこそ追及しなさい」という言葉をよく聞く。でも、「好き」なものなんて何ひとつない私はどうしたらいいのだろう。そんなことを考えていた矢先、出会ったのが日米学生会議でした。集団、議論、英語。苦手意識を持っているものすべてが凝縮されたようなこの会議。でも、なぜかひきつけられるこの会議。自分を変えるならここしかない。そう思いながら、私はJASCerとしての道を歩み始めました。

しかし、いざ61回会議が始まると、苦手意識ばかりが募り、それらを克服することはできませんでした。拒絶されることが怖いから、嫌いといって諦める。自分がうまくできないから、苦手と言って逃げ回る。周りがどんどん前進して行く中、私は「嫌い」の一点張りで、ひとり立ち止ったままでした。「衝突と共鳴」を引っ提げての62回会議では、そんな自分を変えるべく努力してみたものの、やっぱり私は私でしかなくて、臆病で、へそ曲がりで、内向きのまま。表面上でいくら態度を変えても、必ず弱くて醜い自分に戻ってきてしまいます。

しかし、この1年半で私は何も成長できなかったのかというと、それは違う気がします。JASCは、一人でいることが心地よかった自分に、他者と共に生きる喜びを教えてくれました。初めてみんなが集まったとき、すごくわくわくしたということ。不安でたまらなかった分科会も、信頼できる仲間ができて心強かったということ。本会議後すぐ試験だというのに、みんなが気になって連絡してしまうということ。こんなこと、昔の私には想像もつきません。

また、「好き」も「嫌い」も「できる」も「できない」

も自分次第であることも学びました。辛いと思っていたら辛いし、無意味だと思っていたら無意味。でも、限られた時間の中で、ひとつひとつの出来事を自分のものとしていくには、自分自身が「ここから何か学んでやるぞ！」という貪欲な精神がなければならない、と今では強く思っています。

結局のところ、JASCで私が何を得たのかはよくわからないままです。きっとそれは、これからの私にかかっているような気がします。でも、こんな風に思える自分が今いるのは、ECの仲間、デリのみんな、そしてJASCという場に関わって頂いた全ての方のおかげであることはたしかです。これからも落ち込んだりすることもあるとは思いますが、JASCで学んだことを胸に刻みながら、精進していきたいです。大好きなみんな、本当にありがとうございました！

柴田　真也子

日米学生会議に参加して得た最も大きな財産は、人との「出会い」である。会議を通じて、多くの新しい人間に出会い、感化された。自分とは全く異なる発想や意見を交わし合うことで、自分の中の新たな側面に気づいたり、成長したりする機会をもらった。何より、自分の中の惰性と可能性を見たことは大きかった。参加者の中には、しっかりと将来を見据え、それに向かって日々邁進している人たちがいた。彼らは会議だけではなく、多様な活動に携わっていて、そういう人間と話をすることで、自分がもっとがんばらねばならないこと、がんばれることに気づけた。この気持ちは会議が終わっても忘れたくないし、そのために努力したい。そして、会議を通じて得た出会いを今後もあたため、お互い切磋琢磨していける関係を維持したい。

しかし、反省点も多くある。先に自分の中の「惰性」と述べたが、やはり「学生」団体というものの特有のぬるさみたいなものに甘えていた自分がいた。学生団体が悪いというのではない。学生団体だからこそ持ちうる尊さもある。一ヶ月間の共同生活は決して容易なものではない。悩む人がいたら声をかけ、夜中まで話しをし、壁にぶつかりながらもお互いを励まし合う。そこから互いを知り、あたたかさに触れ、人間関係を構築していった。このような人間関係が構築できたのは、学生団体の会議だったからこそである。社会に出たらこうはいかないだろう。すべての人間が自分の話に耳を傾けてくれるわけではないし、受け入れてくれるわけではない。それを前提として、会議の持っていたあたたかさに気づく一方で、馴れ合いに甘んじている自分がいた。だから、会議に対して全力で望んだかと言われれば、疑問を呈する。正直に言えば、最初は会議自体の持つ雰囲気に対して不満を持っていたが、途中から自分の関わり方でそれはどうとでも転ぶことに気づいていた。しかし、そのために何か大きなことをしたかと問えば、否である。この結果は、私が私自身と向き合わなければならない重大な欠点要素のひとつだ。目の前のことに対して全力で望む、これは一生に一度の人生ということを考えれば非常に重要な点である。

後悔は残っているものの、会議に参加したことで感じたこと、学んだこと、得たものは自分にとって代え難い経験のひとつとなった。この中で見つけたものを今後にも活かし、自らを成長させていく糧にするよう邁進したい。

杉本　友里

近年、地方からのJASC参加者は決して多くない。

今期、実行委員としての目標はいくつかあったが、私は特に『地方におけるJASCの活性化』に注力した。今回、自分が住む京都を拠点に、立命館大学での核問題フォーラム、同志社大学での説明会、京都市内の各大学へのネットワーク拡大、関西のアラムナイネットワークの構築など、様々に試みた。

結果的には、応募者の規模を見ても、合格者の数を見ても、まだまだ関西、ひいては地方学生のプレゼンスは弱い。地方におけるJASCの知名度の低さや、有効な情報源の少なさは依然として課

題である。

ところで、地方学生が参加することのメリットとは何か。私は、情報も経験も既に飽和した都内より、地方からの学生が参加してこそ、JASCの可能性と持続性は向上されると考える。地方に住む学生にとって、JASCに参加することは、新しい考え方や価値観に出会い、自分の世界や、将来の選択肢をも広げられると、自分の経験からも確信している。そうした機会を学生に提供することもJASCの本分ではないだろうか。また、そうした学生が地方に増えることは、その大学にとっても、地域にとっても喜ばしいことだろう。今後、様々な地域から一人でも多くの学生がJASCに参加し、ここで出会いと挑戦の機会を得て、そして、自分自身のみならず自分の大学や地域にその成果を還元してくれることを心から願う。

途方もなく長いと思われた一年間も、あっという間に終わってしまったが、振り返ると、ただただ感謝の念に尽きる一年だった。54人の素晴らしい参加者たちとこの1ヵ月を過ごせたこと、そしてアメリカ側の8人、日本側の7人の実行委員とこの一年を共にできたことは、自分にとって本当に幸運だった。特に、実行委員たちと、分科会のメンバーには感謝してもしきれない。

最後に、62回開催のために、ご尽力いただいたすべての皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。関西での広報活動や選考の実施にご協力いただいた同志社大学アメリカ研究科の皆様、亀田尚己教授、立命館大学国際部の皆様、他大学関係者の皆様、国立京都国際会館長の天江大使はじめ、御厚意でJASCにご支援や、ご助言をいただいた皆様、そして関西在住アラムナイの皆様、本当にありがとうございました。実行委員として至らない点もありながら、熱心にご指導いただけたことは自身の今後にも大きく影響すると確信しています。

学生たちによって、この会議の存在意義や、成すべきことは問われ続けている。今後も最高の会議を目指して、その問いに挑み続け、改善し続けてほしい。今夏1ヵ月に起こった、70人の70通りの経験が世界の新たな架け橋となり、また今後も、日米学生会議が日米、世界の架け橋として、多くの学生の挑戦の機会となることを切に願う。

高田　修太

日米学生会議とは、何を得られるのだろうか。そして、日米学生会議とは、何なのか。自分にとってどんな意味があったのか。これらは、参加者であった去年からずっと自問自答していることである。そして、数多くのJASCerが自問自答していることでもあるだろう。私自身は帰国子女でもなく、留学経験もなく、英語もままならなかった学生であった。であるから、英語やアメリカ文化をはじめとするたくさんの「未知」を経験したため、「何を得たのか」という質問には、私自身の経験を答えることは可能だ。では、果たしてそこから、JASCとは何か、という問いに答えられるであろうか。

先述したように、私にはアメリカに対するバックグラウンドは何もない。大学での専門も工学であるし、英語圏に住んでいたこともない。だから、この会議を通して沢山の未知なる知識を得ることができた。たとえば、それは「日米安全保障」や「沖縄問題」に始まり、「リーダーシップ」「語学力」「人間関係」など、多種多様なものだ。そして多くのものに興味を持てたため、会議後も進んで学習をしている。これは私にとっては大きな進歩である。理系の学生は日本の大学では学ぶことが偏りがちで世間に興味を持たない、とも言われている中で、理系とは程遠い内容を学ぶJASC。おかげで、私の部屋の本棚は理系とは程遠いものとなってしまった。また、私は「自分なりの」リーダーシップを学ぶことができたのではないかと思っている。分科会をコーディネートする実行委員として今年は取り組んだのであるが、英語というディスアドバンテージがある中で、いかに自分がコミットできるか、そして参加者の声を引き出せるか、どのように議論を進めるか…といったことに頭をひねった時間こそが、私にとって財産であったといえよう。分科会パートナーであるMariamaと

協力し、衝突しながらも作り上げた「社会起業家」分科会は、私のJASC中の家族のような存在であった。

会議を通じて学んだ最大の要素は、ひとりでは何もできない、ということである。ありきたりのことではあるが、自分がいかに多くの人々に支えられているか、そして依存して生きているか、ということを今回ひしひしと感じ、ますます感謝しなくてはならないな、と思っている。英語にしても、拙い英語を聞き取ろうとしてくれるアメリカ側参加者、そして助けてくれる日本側参加者、また、誰でもチャレンジを喜んで受け入れる精神。このような助け合いの精神こそが、またJASCのひとつの魅力でもあると思った。

ではJASCとは何なのか。なぜ存在するのか。この問いに今一度立ち返ってみる。いくら日米関係が現在危ぶまれているといっても、もはや戦前戦後の日米関係改善という側面は薄れているのは間違いない。それでもなお、このプログラムが存続する意義、それは、私は「未来への投資」なのではないかと思う。この年齢で70名もの国籍の異なる学生と1か月間共同生活をし、何かしらストレスを感じたり楽しんだり学んだり、様々なことを体験する過程を通して、学生を少しでも成長させる機会。そしてそれを共に終えた学生たちの、JASC卒業後のつながり。そういったもの全てが現在のJASCであり、未来の日本への投資となっているだろう。この仮説が証明されるのは数十年後だが、実際に自分がこの仮説を証明しなくてはならないと考えている。そして、数多くのJASCerもそうなってほしいと心から強く願っている。

高橋　亜矢

JASCが終わり、日本に帰ってきてからすでに1週間以上が経過した。日常に戻り冷静になった今はじめて、JASCがいかに‘非日常’だったかを実感している。その‘非日常’の経験を、いまだに私は整理しきれていない。振り返れば、春合宿から今日までの4か月はあっという間だった。けれど、あっという間に感じる日々も、一日一日を振り返るとたった4か月の間に起ったこととは思えないほど濃密で刺激的な日々だった。

改めてこの4か月を振り返ってみると、JASCとは挑戦の場であり、自分と向き合うための時間であったのだと思う。4か月の間、チャンスはどこにでも転がっていた。フォーラムや講演会など貴重な話を聞く機会がたくさんあり、個人では訪れることができない場所へ行くことができた。目標を決めてそれに対し真摯に取り組む人、他人と理解しあうことを諦めない人、もがきながらも努力し続ける人、そんな尊敬できる69人の素晴らしい人に出会い、語り合うチャンスが与えられた。そして、常に誰かの挑戦を歓迎し、人の考えを受け止め理解しようとする姿勢が空気に表れていたように思う。

しかし、その与えられたチャンスの一つ一つを自分がどれだけ真剣に受け止め、挑戦してこられたのだろうかと考えると、悔しさがこみあげてくる。特に本会議の一か月間には、普段見ないふりをしていた自分の弱い部分や逃げていた壁に何度もぶつかった。私は自分の自覚と意志の足りなさから、多くのチャンスを逃し、受け身に回ってしまっていたように思う。言いたいことや聞きたいことがあっても、言葉を飲み込むことのほうが多かったし、挑戦することを諦めて楽なほうへ逃げた場面もたくさんあった。英語の能力や知識が足りないことに対する悔しさだけでなく、そんな自分の姿勢に対する悔しさが大きい。

けれど、悔しさが残ったことはマイナスなだけではない。自分と向き合い弱さを自覚できたからこそ、心から尊敬でき刺激してくれる素晴らしい人に会えたからこそ、そんな風に自分も変わりたいと本気で思い、悔しさが残ったのだと思う。JASCで出会った人たちから、これから私が変わるための課題をたくさん出してもらった。この悔しさを忘れないで課題を一つ一つこなしていくことで、私も変わっていけるだろう。そういった意味で、JASCは私にとってもまさしく‘life changing summer’であった。2010年の夏を私にとって特別な夏にしてくれたこと、私に大きなきっ

かけをくれたこと。JASCで出会ったすべての人に心からの感謝を伝えたい。ありがとう。

高橋　央樹

実行委員として活動してきた一年間をふと思い返すたびに、苦しいこともあったが、自然と笑顔に戻る自分がいる。たくさんの人々に支えられながら、走り抜けてきたこの一年は私の中でかけがえのないものの一つになっている。

初めてアメリカ人と一か月間を共に過ごし、私に大きな変化を与えた日米学生会議を自分の手で作り上げてみたい。そんな思いから第62回日米学生会議実行委員に立候補した。最初の頃はそんなに仕事もないだろうと安直に考えていたが、広報、報告会、選考、春合宿などなど、毎日新たな仕事が目の前に存在し、夜通しでスカイプ会議をした日もあった。何よりチームとして活動する実行委員会では、一人の仕事が他の全員の仕事にも影響するため、全体に迷惑をかけないために全力を尽くさなければならなかった。チームとして活動した経験があまりない私にとっては、他の実行委員に迷惑をかけることも実際多く、自分の不甲斐なさにどうしようもない苛立ちを感じることもあった。実行委員というレンズを通して見える自分は、あまりにも未熟なことに気付き、ただただ悩む時期もあった。

そんな時も助けてくれたのは、他でもない61回参加者や他の実行委員だった。自分が足りない部分を率直に伝えてくれる人、ただただ自分の愚痴を聞いてくれる人、いつの間にか実行委員の仕事を忘れさせるぐらい笑わせてくれる人、多くの友達に支えられながら、忘れかけていた日米学生会議への想いを取り戻していった。悩んだ時にはいつでも真摯に相談してくれるような素晴らしい仲間と巡り合えるような会議をまた創りたい、私の中で確固たる自覚が根付き、いつの間にか実行委員としての仕事は苦でなくなっていた。また本会議中も、自分の最大限の力をぶつけようと心の中で決心し、一か月の本会議に臨んだ。

本会議が始まると、あっという間に毎日が過ぎていった。毎日夜遅くまで話合う実行委員のミーティング、日々の雑務などこなす仕事も多かったが、実行委員同士互いに助け合いながら一つ一つこなしていった。ただ日々を過ごす中で、本当にこの会議で良かったのだろうかと自身に問うたこともあった。しかし最終日に空港で、互いの別れを惜しみながら涙を流す参加者を見ていて、実行委員として活動して本当に良かったと心から感じることができた。

本会議が終わり、この一年間を振り返ると普段できない多くの経験を積み、私自身確実に成長できたと感じている。また同時に今まで自分を振り返ることが少なかった分、反省や後悔も感じている。しかしこの会議で多くの人に支えられながら生きてきた自分という存在を再認識し、素敵な仲間と出会えたこの日米学生会議に本当に感謝したい。この経験が私自身の将来にどのように関わってくるのかということはまだ分からない。ただここで得た仲間とともに、私の人生を今後も歩んで行きたいと思う。

最後になりますが、今までお世話になった国際教育振興会の皆様、アルムナイの皆様、多大なる支援を頂く皆様に、心からのお礼を申し上げたいと思います。
本当にありがとうございました。

竹内　智洋

私が日米学生会議（JASC）を知ったきっかけは参加者であった知人だ。彼女から様々な人間と出会うだけでなく、自分を見つけることにも繋がったと聞いた当時高校生の私はJASCという未知の世界に憧れを抱いた。そして今年、2度目の挑戦にしてやっと未知を経験するチャンスを掴んだ私はこの会議に2つの目標を持ち臨んだ。

1つ目は自分を試すということだ。

今まで興味を持った事にはとりあえず手を出してきた性分、近年過去を辿るとそれらの経験から得た物はあるのだろうかと不安になっていた。そして、私はこれをJASCという最高の環境、仲間がそろった舞台で確かめようと考えた。実際

JASCでは毎日このチャンスがあった様に思う。日々行われた分科会ミーティングやフィールドトリップに始まり、ワシントンDCで開催された日米安保フォーラムでのスピーチ、そしてサンフランシスコで行われたファイナルフォーラムの代表スピーチ。自らの考えを公共に表現する度に自分をしっかり見つめなおす機会となり、仲間から受ける日頃のフィードバックから『自信』をもらいつつも今後の『課題』も明確になった。

2つ目はアメリカで会うJASCer全員、1つずついいところを見つけ自分のものにするというものだった。そしてこれは難しくなかったと振り返り思う。アメリカに行った私は本当にすばらしい仲間と出会う事が出来た。私が最も驚いたのはJASCという場では国境を越えた者同士がいかに早く溶け合えるかという事である。誰もが自分を主張する以上に残り69名のJASCerを知ろうとするため、1日目にして周りには大親友の様に並んで話すジャパデリとアメデリが大勢おり、この中で私は一人一人とまじめなディスカッションをし、時折ふざけ、いつしか全員に対し『信頼関係』を築いていた。そして、一ヶ月共に生活する中で日々、私は参加者の良さに気がつき、同時にこれを自らのものにしようと努力した。まだこれからというところだが、意識して取り組む事は出来たのではないかと思う。

学生の力というものは一般的に大人のそれに劣るものと解される場合が多い。しかし、一ヶ月を通し、私は「それは違う！」と胸を張って言える。学生は大人と異なり、信頼さえあれば心のうちを素直に明かすことが出来る。私はJASCを通して、成長するきっかけ、『自信』、『課題』を得る事が出来た。また、国家間で今までタブーとまで考えられていた問題も学生間の『信頼関係』があれば、熱く議論する事の出来る議題へと変わるという事も体験した。今夏、私がした経験は今後人生において糧となり、私を励まし続けるだろう。62回日米学生会議は幕を閉じるが、私は自らがしたこの最高の舞台を63回にも作り出すため、実行委員として貢献していきたい。

中澤　耕己

JASCは自分にとって、これまでにない類の経験だった。

例えば高校まででは、部活やクラスなどの集団で何かに取組み、そこから一生忘れられない経験を得ることが出来た。JASCも同年代の集団が何かに共に取組み、何かを得るという点でこれらに似ているし、間違いなくいずれも自分の中では大切な経験だが、それらと比べた時のJASCの一番の特徴は、そこで出会う人であると思う。日米両国から集うJASCerとの出会いであり、JASCだからこそ会える人との出会いであり、アメリカという異文化との出会いである。出会いが自分自身に与えるインパクトの大きさという点で、JASCは他のどのような経験にも勝ると思う。

この1カ月を振り返ってみれば、質の高いJASCerとの出会いが現時点ではやはり最も印象的であり、自分に影響していると感じている。他のJASCerの話すこと、考え方、問題に対する姿勢、人生に対するスタンスなど、それまでの自分の中には全くなかった可能性が手の届く範囲に無数に存在していたあの環境は、間違いなく1ヵ月間の自分の成長の土壌となったし、今となっては夢のようですらある。この1カ月間、様々な「出来ないこと」に直面した時、JASCerの時に温かく時に斬新な言葉や、無言で挑む背中に励まされながら、困難をただ消化するのではなく、新しい方法で、それも自分の足で乗り越えたという感覚が、個人的には非常に強い。表現するのがとても難しいが、参加者それぞれが全く異なる壁に挑戦しており、時にそれに挑戦することすら辞めたくなる中で、支えになったのは仲間の何気ない言葉であり、温かさであった。そして、自分なりの答えを出すことができたし、自分としてはその答えの正当性は別として非常に清々しく、納得がいっている。自分にとって今回のJASCの「世界の問題を、私たちの課題へ」というテーマは、世界の問題を噛み砕いて内在化し、それを自分なりの形で消化し形にするということであったように思う。副題の「異なる個の生む衝突と共鳴から」という

のは、必ずしもプラスとマイナスのような正反対の個が衝突するのではなく、それぞれにくせのある独特な個性の出会いが自分にとっては貴重な「衝突」だったし、そこから成長へと向かうことが出来たことそれ自体が「共鳴」の一つの形なのだろうと、振り返ってみて感じる。

これからも62nd JASCerとして人生を歩んでいく中で、こんな69人の同世代がいるんだという素直な驚きに支えられることも多いだろうし、この経験や出会いを他の誰とも違う、自分なりの形でこれからに活かすことが62ndJASCerなら出来ると思う。

中村　真理

JASCが終わりもう2ヵ月が経とうとしているのに、JASCer達の表情やあの日のあの場面は今までと変わらずに私の時間の中にとても自然に流れ込んでは、またそれぞれの場所に戻っていく。こうやっていつまでも、JASCerとして生きてきた1年数ヵ月の間の諸々への後悔が絶えないことは、次のステージへ進まなければいけない私を苦しめる。

「世界の問題を私達の課題へ」。1年前、事務所で何日も、実行委員が朝から晩まで顔をつき合わせて決めたとても前向きな理念だ。だけれども実行委員として必死に活動をした1年の間、幾度も懐疑的になってしまう瞬間があった。世界の問題-文字通りの「世界」だけでなく身近な不和から、世の中の格差から、worldwideな争いまで-は結局は大人たちの利害関係の調整であって、学生が力を尽くしたところで何かが良くなるのだろうか、と。多くの学生たちが夢を描き、理想を語り、友情を育んだJASCで、私は何度も立ち止まりそうになりながら、それを許す余裕は無く、また前に歩き出すということを繰り返した。

Life Changing Experience'と謳われるJASCは、いつしか気づかぬうちに、私の'Life'そのものになっていた。この1年間、私はJASCを通して人に出会い、人と関わり、世界に気付き、強く怒りや悲しみを持ち、泣き、諦めかけたものを信じ、感動し、仲間と笑った。それは決して、達成感に溢れきらきら輝くばかりのものではないが、人の醜さと美しさが、そして人と人がつながる時に生まれる苦しさ、辛さ、明るさ、温かさがこれでもかというほどに詰まった、誇るに値するものであると自負している。そしてもう既にそうであるように、私はこれらを今後一生かけて無意識に回顧し、後悔し、反省し、未来に生かし続けていくのだろう。それほどまでに莫大な時間と労力をかけて向き合ったJASCが、私は大好きなのだと思う。1年間で最も苦労した仕事は担当の選考だった。

どういう会議にしたいのか、そのためには何を問い、どの様な基準を設けるべきなのかといった8人での議論を半年がかりでまとめていく難しさ。作業に追われ毎日事務所に通った2、3月、分刻みのロジに気が張り詰めながらも、150人の受験者一人一人の背後にある人生を懸命に掴もうとした面接、そして選考合宿。春合宿では、この36人が一つの空間にいるということが奇跡のように嬉しくて、感動が涙になった。日常を、世界を照らしていけるのは、私達学生も含めた「人」なのだと思えた。2010年の夏を共有した62回会議実行委員の皆、参加者の皆に心からの感謝を伝えたい。本当に「ありがとう」。

生板　純一

私にとって第62回日米学生会議は、とことん考える場所であった。帰国子女である自分の一面から、自分のアイデンティティを再確認したいと思い、たくさん考えた。就活生である自分の一面から、自分の興味、関心、将来のビジョンなどについてたくさん考えた。JASCに参加する以前の自分は、物事をここまで突き詰めて考えたことはなかった。得た知識や人が言ったことを全てそのまま受け入れてしまうのではなく、「どうしてだろう？」と常にその背後にある意味を追求した。これを繰り返すことによって、自分の視野が広がったと思う。

JASCerの面白さは、皆それぞれ自分の視点を持っていて、その視点に至った根拠などを語れるところにあると思う。どんな話をしても様々な意

見が飛び交って、非常に面白く、自分の考えを深める助けとなった。

日米学生会議とは文字通り日米の学生の交わりの場であるが、日本と米国では、文化、生活習慣、食生活、使用言語等、様々な面で異なっている。まずその違いに背を向けず、認識することに努めることが大切であると考える。様々な違いがあることは当然のことであり、その違いの先に見える自分との共通点を見出すことによって初めて理解が生まれると思う。JASCer は常に自分を表現しようと努力し、また相手との違いがどこから来るのか理解しようとしていた。その結果、参加者間の理解が深まり、異文化交流がなされていたと思う。

日米学生会議に参加するに当たって、皆それぞれ違う理由や動機で臨んでいる。JASC は、そのような一人ひとりのニーズを満たしてくれる場所であると強く感じる。しかしそのニーズは簡単に満たされるものではなく、一人ひとりがその目標に向かって、もがき苦しむことが大切である。そうすれば、それを支えてくれる仲間がいて、時には導いてくれる仲間が必ずいる。事前活動から本会議までの4ヶ月間、私は自分や他の参加者と正面から向き合えない時もあり、苛立ちを覚えることもあった。様々なことに納得がいかなかったり、投げ出してしまいそうになったりしたこともあった。そのような一つ一つの困難に直面する度に私は成長できたと思う。日米学生会議での経験を通して、私は何か言葉にできない大きなものを得た気がする。何年か経って振り返ったときに、この素晴らしい経験を上手く言葉にできるようになるのかもしれない。その日が来るのを楽しみにして今後の人生を精一杯生きて行きたいと思う。

庭野　啓太

今回の日米学生会議に参加するにあたり、ひとつ心がけたことがあった。自分の思いを相手にぶつけるということ。第62回日米学生会議のテーマは「衝突と共鳴」で、自分の思いをぶつけ、「衝突」という壁を乗り越えてみたいと思った。そのためには、ためらわない。そんな思いで参加したつもりだった。それでも、会議を通じて、その姿勢を貫くことはできなかったように思える。分科会では、自分の意見と議論の方向性にしっくりいかなくても、妥協を重ねてその場の雰囲気に流されてしまったり、ただ相手の意見に同調するだけ、といった楽な選択を選ぶことが多かった。分科会の進むべき道が定かでないときに、しっかりとイニシアティブをとって自分の考えを伝えるRTメンバーの根気、頭の回転、発言の強さには頭があがらなかった。

一方で、会議を通じてこれからもずっと続く友達というかけがえのない財産を得ることができた。本当にいい人たちばかりで、直前合宿で不安になって流した涙は、どこへ行ったのやらという感じだった。全員と十分仲良くなれたわけではないが、JASC で同じ経験をしたことで強い一体感と特別な感覚を持つことができた。本会議終了まで秒読みになったサンフランシスコサイトの街を自転車で駆け抜けたときの気持ちも、最後のリフレクションでみんなと流した涙の感覚も覚えている。この感覚をいつまでも忘れずに持つことができたら、と思う。

JASC では、恥ずかしがりやな自分でも、自分らしく仲間と楽しむことができる貴重な一ヶ月を過ごすことができた。チェアの言うように、これから自分たちが出て行く世の中は厳しい。自分に自信を失うこともあるだろうし、人間を信用できなくなることもあるかもしれない。そんな時に、ともに一ヶ月を過ごし、助け合い、お互いを認め合った JASC のメンバーがいることを思い出したいと思う。

橋本　遥

・きっかけとしての日米学生会議

2009年11月末。私は長い期間を捧げ、私に多くのことを与えてくれた一つの役割を終えて、新たなものへの挑戦を模索していた。自分に足りないものは何か、必要なことは何か、何をすればそれを補ってくれるのか。日々それを探していた。

といっても何かやりたいことが明確に見えていたわけではない。いくつもある興味の対象に関して、それを実際に体験してどんなものかより深く知るための活動がしたかった。何に熱中できるのかわからなかった。一つのことに没頭することが他を見えなくしてしまいそうで、それを拒んでいた。だからこそ興味のあることすべてを経験してみようと思っていた。そんな日々の中で見つけた活動の候補の一つとして出会ったのがJASCだ。JASCの説明を聞いたときその内容が面白そうだとは思ったが、正直当時私が渇望していた要求が直接的に得られるものではなさそうだなと思った。しかし間近にそれを経験したことのない私の勝手な判断で可能性を切り捨てるのはいかがなものか、第一の要求を満たすものでなくとも今の私に思い浮かばない何か他のものを与えてくれるのではないか、そう思い、始めなければ始まらない、と応募してみたのがそもそものきっかけだった。

知ってもらうには伝えることが必要だ。しかし的確に伝えることは難しく、正確に理解してもらうことはもっと難しい。何かを伝えたければ、その相手の思考は何に基づき、その背景はどのようなもので、どのような思考のマナーを有するのかを知る必要がある。自分の得意とすることをどんどん伸ばせばいいというものではない。だから自分の関心と一見関わりがなさそうな分野を知らないでいるのは賢明ではないとの思いの下、敢えてそういった分野に関わっている人の考えを聞くために飛び込んでいった。これが、私がJASCに参加する意義の一つだった。

そんな思いをもって参加したJASCは私に数々の衝撃を与えてくれた。自分の興味を追求し、それを深めている人がいる。そのために多くの活動に関与し、知識を吸収しながら自らの理論を強固にし、それを発信する練習を重ねている人がいる。その事実に圧倒された。社会への意識の欠如、組織感覚の重要性、同志の存在の大切さ、知識・経験の乏しさ、自己の思考の脆弱さ。自分の至らなさを思い知らされた。私は何がやりたいのか、何で自分を活かせるのか、私は何を求めているのか、そもそも私はどんな存在なのか。私にとってのこの至上命題に向きあわされ、悩まされ、たくさん考えさせられた。見えてきたのは社会の広さと社会という土壌の価値の高さ、自分の前にある選択肢の豊富さとその可能性の大きさ、掴もうとすればそれを掴めるということだった。

「目の前にあることを一生懸命にやりなさい。」そうすればそこから繋がってあれもこれもやりたいことができる。道はおのずと開かれていく。

そんなことはずっと前からわかっているつもりだ。本会議中にもある方からこのお言葉をいただいた。だが頭で考えることは簡単でもその基本的なことを見失わず貫徹し遂行することは簡単ではない。強い信念と持続力、焦りに耐える忍耐力が必要だ。しかしこの言葉の意味するところが自己の理論形成において一つの核心を突いていることは確かである。一つのことを集中して見てみたときにその内実を知ることができ、そこから次へのリンクが見つかる。その繰り返しで複数のことを網羅的かつ深く知ることができ、やっと自分が活用できる手札として備えることができる。それが自らの考えの根幹を成し、論のよりどころとなる。先ず隗より始めよとはまさにこのことだと痛感した。

JASCでの出会いは、どれも刺激的で衝撃的だった。多くの多様な声を聞き、JASCerたちと語り合い、悩み、他者とも自己とも衝突することができた。JASCにはそれをありのまま受け止めてくれる人、環境、雰囲気があった。JASCは私に考え抜く機会と多くの新たな気づきを与えてくれた。そして目の前のことから始めてみる勇気、自分の世界を広げていく多くのきっかけも与えてくれた。自信を持って言えるのは、こんなにも素晴らしいものを与えてくれる、人との繋がりはなにものにも代え難いということ。私はJASCをきっかけに次のステップへと挑戦していきたい。

JASCerとJASCを通して出会えたすべての人に心から感謝して止みません。

敬意を表して、ありがとう。

細井　駿

私が在籍する東海大学から日米学生会議への参加が初めてであったことから、参加することが決まって教授たちはじめ多くの大学関係者から沢山の応援メッセージを頂いた。私個人としては昨年参加した日露学生会議での経験から、留学したことのあるアメリカの学生とも二国間関係についてのディスカッションを通じで相互理解を深めたいという理由から応募したのだが、次第にそれは個人の目的だけではなく、大学の代表として今後も日米学生会議参加者を輩出できるように会議を成功させなければならないという責任へと変わっていった。

5月に始まった事前活動の中でも、特に印象に残っているものは防衛大学校と沖縄での研修である。基地建設について賛成派、反対派、異なる観点、レベルでの考え方を聴くことができ、日米関係を語る際に必ず出てくる沖縄米軍基地問題を自分なりに考察、咀嚼する貴重な機会となった。他にも、分科会フィールドトリップやOB/OGとの交流を通して、普段は話を伺うことができないような方と実際に会う機会を持てたことはまさに日米学生会議の大きさとその歴史の長さのためだと改めて会議に参加できたことを光栄に感じた。

アメリカでの本会議中の出来事に関しては、留学経験もあることから渡米すること自体にはあまり新鮮さを覚えなかったが、1ヵ月間生活をともにしていく中でアメリカ側参加者とも本当に深い関係を築くことができた。日本側参加者からも事前活動中には見えなかった個々の良い部分を日々沢山発見することができた。「1ヵ月間ただ一緒にいるだけでは友人関係で終わってしまうが、学生会議のように難しいトピックを議論することで関係はもっと深いものになる。」誰かがこんなことを言っていたが、本当にその通りだと思う。こんなに素晴らしい関係を築かせてくれた日米学生会議に感謝したい。

最後に、私が日米学生会議に期待することは、もっと様々な大学の学生が会議に参加できるような環境を作ることだ。優秀な学生が集まることはもちろん大切なことであるが、内向き傾向にある日本の若者を積極的に海外と繋がる機会を持たせることは日本の将来にとって非常に重要であり、異なるバックグラウンドの人間が集まることで議論も面白いものになるはずである。日米学生会議はそれを経験できる最適なプログラムであると信じている。私は参加者として日米学生会議に関わったが、「Once JASCer, Forever JASCer」としてできる範囲で貢献していきたいと考える。今後の日米学生会議の発展に期待したい。

松下　マエス

直前合宿にてJASCメール―ポストに手紙を投函すれば、次の日届けてくれるJASC内システム―を知った。住所は「名前」。はじめはとても覚えられなかったが、いつしか全員分が言えるようになった。それだけではない。最終日に全員にJASCメールを書こうとしたとき、70人一人ひとりとのエピソードを鮮明に思い出すことができたのだ。

このひとつの成果を取ってみても、「JASCの一員でよかった」と言える理由である。帰国してまずしたことといえば、弟にJASCを勧めたことだったし、一週間後JASCリユニオンでは、会う人会う人に「久しぶり、会いたかった！」を連発したくらいだ。

もちろん、JASCの経験を美化するつもりはない。もしかしたら一年後には疎遠になって、何人かの名前もおぼろげになるのかもしれない。それでも私自身に起きた変化は、ずっと私と生き続けていくと思う。その限り、JASCは一生の宝物である。

変化その①。他人と比べることで、自分を知ることができた。たとえばレクチャーを聞くにしても、今までなら聞いてそれで終わり、「私の感想」のみで満足し、それが普通の考え方だと思っていた。レクチャー内容について後ほど仲間と語ってみると、意外とみな受け止め方や考えることが全然違う。それは個々の問題に対する意見でも、生き方などの広いトピックに関しても同様だった。

私はそういった話題に「巻き込まれる」形で、（恥ずかしながら）初めて人の心の奥深さを知り、集団をまとめ上げる難しさを知り、そして相手を理解する楽しさを学んだ。他人と比べるため、つられて自分の意見を声に出してみると、「私ってこんな人だったのか！」と衝撃的大発見の数々・・・。変化その②。私の役割を疑問視するようになった。EC 選挙の際、来年就職をする身なので立候補する選択肢もなく、迷いなく投票者という役割に徹していた。しかしみなのスピーチを聞くうちに、私だったらどのように話すだろう、この一ヶ月でどのように見られ、評価されたのだろうという考えが浮かんだ。浮かんだ瞬間、怖くなった。ただただ考えなしに毎日を過ごしていては、失うものも少ないが、得るものも少ない。だから、もっとグループのためにできることを考え行動するべきだと思った。

多くの JASCer にとって、私の「大発見」は幼稚すぎて、当たり前のことなのかもしれない。しかし、まぁ、マイペースな自分は無理して変えずに、楽しく次に進もうと思う。これが次の夢へのスタート地点。卒業する前に最後の学生生活を謳歌し、社会に出てスーパーな経験を共にした JASCer と一緒に、日本を、世界を変えることをやってみようじゃん！

丸山　綾子

JASC の思い出を数えればきりがない。夜が更けるまで、お互いの人生や大切にしているものについて本音で語り合う。幅広い社会問題について、利害関係のない学生にしか出来ない踏み込んだ議論を交わす。アメリカという国をざらりとするような違和感も含めて生身で感じ、それをアメデリにぶつけて話し合う。JASC という場でしか味わえない貴重な経験が確かに出来たと断言できる。

そうした私にとっての JASC の魅力を踏まえたうえで、尚言わなければならないことがある。1ヵ月を振り返って「心から楽しかった」と何の迷いもなく言えるかどうかといえば、正直に言って答えはノーだ。私にとって本会議は、自らの未熟さや弱さを痛感することの連続だった。語学力や体力のなさに憤り、集団の中で果たすべき役割を見失い、自分のパーソナリティをうまく表現できずに苦しみ・・・思った以上の struggle に見舞われて、途方に暮れた。本会議への参加にあたって、「皆にとって JASC がよりよい場所となるために自分の資質を生かして何が出来るか」に意識を集中させていただけに、自分の資質の乏しさを実感させられる事態はかなりショッキングだった。

帰国した今も、そうした struggle を克服出来たかは心もとない。しかし、今の私に焦りや失望はない。苦さの残る経験だったとしても、現時点での自分が全力で悩み、全力で取り組んだ結果としてそれを受け止め評価すること。そこから得た反省を、今後の自分の成長につなげること。本会議は終わったが、これからの人生でそんな挑戦を続けることは出来る。才能と個性にあふれた、一癖もふた癖もある日米の学生が集まる JASC でなければ、これほどの struggle には出会えなかった。恐らく多くの JASCer も、本会議を通じて様々に悩み、それぞれの壁にぶつかったことと思う。しかし一人ひとりが苦しかった経験をばねにして、今後もさらにそれぞれの人生で自分を磨いていくことを確信している。自分の限界と現状に甘んじて挑戦を諦めたくなりそうな時、私は JASCer に会いに行きたい。懸命にそれぞれの道を切り拓く皆の姿が、私に挑戦をやめさせないだろう。”once JASCer, forever JASCer” という言葉を胸に留め続け、JASC を将来の自分の礎としていきたい。

森田　真弓

日米学生会議は Life Changing Experience だったのだろうか？私にとって日米学生会議はどのような意味をもつものだったのだろうか？会議が終わって少し時間が経った今でも、これら問いに対する明確な答えは出せていない。ただ、日米学生会議のおかげで多くの素晴らしい経験ができたということは断言できる。

海外生活経験のない私にとって、1ヵ月ものアメリカでの集団生活はとても新鮮であり、楽しく、

時にはつらいものだった。

自分とは全く違うバックグラウンドをもつJASCer、とくにアメデリとの交流やアメリカで暮らすことは、今まで自分に無かった価値観に触れる大きな機会だった。自分には無い価値観やアメリカ文化を知ることはとても楽しかった。このおかげで帰国してから日本という国に対する見方や、身近なものの見方が少し変わった気がする。

話は変わるが、私は英会話が苦手だったため、英語でのコミュニケーションに大きな壁があった。英語で自分の思っていることが伝えられないことよりも、相手が英語で話す内容が理解できないことがつらかった。そしてそのつらさで落ち込んでしまい、自身の問題解決に努力できていない自分にとても腹立たしさを感じた。特に、身近で努力しているJASCerの姿を見ていると自分と比べてしまい、さらに落ち込んでしまうこともあった。そんな時、私の話を聞いて助けてくれたのはJASCerだった。自分の気持ちを整理するのにはとても時間がかかったが、自分は自分だと割り切り、自分なりにがんばろうと思えるようにもなった。もちろん、努力するJASCerの姿を見て私も立ち止まっていてはだめだ、がんばらなくてはとも感じさせられた。本当に、彼らの存在は私を励まし、向上させてくれた。

この会議に参加して何よりもよかったと感じていることは、69人のかけがえのない仲間に出逢えたことである。今後、他の様々な経験を積んでいく中で私の人生における日米学生会議の意義は変化するだろう。そしてその中でこの会議が私のLife Changing Experienceだったかどうかも明らかになっていくだろう。

しかし、私にとっての会議の意味付けがどんなに変わったとしても、かけがえのない69人の素晴らしい仲間に出会えたことは一生変わらないと思う。

みんなと出会えて本当によかった。ありがとう。

安川　皓一郎

実行委員長として臨んだ第62回日米学生会議では、本当に多くの事を学んだ。組織のマネジメントの難しさ、大きなプロジェクトを動かしていくシビアさ。そのような実務的な部分のみならず、70名の学生の代表の一人として振舞う事の責任など、一人で過ごしていては決して学ぶことのできない多くの事を周りの人々から学ばせて頂いた。

学生として挑戦できる最後の1年として自分自身が決めたこの1年間で一体どれだけの進歩を自分が出来たのだろうか？多くの仲間たちが常に声をかけ、励まし合う日米学生会議の生活は温かく、本当に居心地が良いものだ。しかし、実社会は厳しく、時に苦しい事もあるだろう。そのような時、私には日米学生会議の仲間と言う掛け替えのない、苦しい時間を支えあった仲間たちがいる。来年からはやっと社会人となるわけだが、この2年間で得た友情を胸にこれからの人生を頑張っていきたいと思う。

「友情、力あり」

山口　寛明

五月、春合宿に始まったJASCは自分にとって紛れもなく、成長と変化の場であった。気持ちの整理がつかない、というほかのJASCer（会議参加者）の声も聞かれたが、自分の思いは驚くほどすっきりとし、整理されている。思うに、JASCという濃度の高い時間・空間は、それぞれが予期しない種を参加者の中に蒔いてくれるのだろう。それを意識するかしないかにかかわらず、それらの種はそこに佇まい、いつか芽吹き、育っていくように感じる。

JASCで私が得た数多くの種を、言葉に直すことは難しくない。ただ、ひとつ、意識はできても言語化できないものがある。五月の春合宿で抱いた思いである。春合宿は、参加者が初めて一堂に会するため、皆の、JASCへのencounterとなる。私にとってのJASCとの衝撃的な「出会い」は、合宿の締めくくりである「リフレクション」にあった。

リフレクションとは、参加者全員が円を囲んで、それぞれの反省、思いや感想を共有する場である。

JASCの活動において何度も設けられる場であるが、春合宿のそれは今思っても、独特の重い雰囲気に包み込まれていた。訥々と語られる言葉の中に、参加者それぞれの人生の一端を見た気がした。それらは、受け止めきれないほどの重みを私の胸に落とした。言葉が発せられないまま家路に着き、翌朝目覚めたときに、高鳴る胸の鼓動が抑えられなかった。なぜそのような変化が起きたのかはわからない。しかし、その日から、自分の所属する共同体の中で自分なりの役割を探し、人々の意識に変化を与えることが自分への日々の課題となった。JASCにおいても、本会議前の準備から、その終わりまで、継続的に自分なりの貢献の仕方を考え、実践していた。

おそらく、私がJASCで得られたいくつものことをはっきりと認識できるのは、日々、自分の「役割」を意識していたからだと思う。自分が分科会でできることは何か、JASC全体に与えられる影響はなにか、JASCで得られたものをどのように将来、活かすことができるのか。そのようなことを毎日考えては反省していたので、自分の能力の及ぶ範囲と、至らなかったところとを自覚できるのだと思う。そのように自分を駆り立てたものは春合宿のリフレクションであった。具体的に、リフレクションのなにが、ということはできないが、自分の鼓動に物理的に変化を与えるほどの衝撃や重みがそこにあったことは事実である。それを、JASC早々に私の得られた「種」と呼びたい。

JASCが参加者にとってどんなに大きなものであろうとも、長い歴史を持とうと、社会から見れば学生中心のちっぽけな団体に過ぎない。Once a JASCer, always a JASCerとも言われるが、時間が経てば参加者にとってのJASCは小さなものになっていくだろう。それでも、JASC中に植えられたたくさんの種は、意識されるとされないとに関わらず、確実にそこに「ある」と信じたい。今は言語化できなくとも、それはいずれ人を動かし、変化させ、社会を変えていくだけのダイナミズムとエネルギーを持っていると確信している。

山下　真貴子

5月の春合宿から約4ヶ月間、JASCの行事やRT活動をこなし、迎えた本会議。この1ヵ月間で私は何を得たのだろう。そして、私をJASCに受け入れてくれたJASCer達に、私は何か貢献できたのだろか。その答えはいまだにわからない。現実世界に引き戻されて暫く経つが、本会議の1ヵ月はあまりにも非日常的で、これを消化するには時間がかかりそうだ。

このJASCでは、RT活動やフォーラム、様々なレクチャー等、普通なら経験できないようなことをたくさん経験させてもらった。その中で、今まで目を背けていた自分の実力や現実を突きつけられたのも事実である。自分がいかに何も知らずに過ごしてきたかを思い知った気がする。

また、JASCのメンバーはそれぞれが、自分の専門に対する自負心を持ち、いろいろな問題に対する自分の意見をきちんと持っており、強烈に刺激を受けた。もともと、JASCに参加したいと思った理由の一つに、様々なバックグラウンドを持つ学生と関わり、視野を広げたいという思いがあったが、JASCを経験し、私は彼らのように、まず自分の専門にもっと貪欲にならなくてはいけないと思った。

JASCは終わったが、この決意を胸に精進していきたい。そして、このJASCで、すばらしい友人達に出会えた幸運に心から感謝したい。

山田　晃永

高校生の頃から漠然と「日米学生会議に参加する」と思っていた。なぜ日米学生会議なのかは分からない。直感的に惹かれていた。第一次選考締め切り当日に応募を決めた際も、アメリカ開催の年に参加する最後のチャンスであり、興味のある分科会があったからという以外の志望動機が思いつかなかった。おかげで個人面接は、類まれな出来の悪さであった。私の日米学生会議の思い出は、「グループ面接のメンバー楽しかったな」で終わるはずだった。だから、「第二次選考結果通知」の「合格」の二文字は信じ難かった。

運良く参加する機会を頂いて良かったのだろうか。もやもやしたまま、春合宿、防大研修、沖縄研修、数々のフィールドトリップ、直前合宿を経て、あっという間に迎えた本会議。5年ぶりのアメリカ。言葉の壁、文化の違いに戸惑いつつも乗り越えて成長していく人が羨ましかった。一方、私は3年生の夏という進路を決める上で重要な時期に敢えてアメリカに来たのに、「楽しかった」で終わるのではと不安になった。

しかし、分科会のおかげでそうならずに済んだ。第3サイトに移り、ファイナルフォーラムが現実味を帯びてくるにつれ、皆の不満が溜まりだした。分科会で唯一の帰国子女であった私は、両国の参加者の愚痴を聞くことになり、「地域再生だけは順調に進んでいる」というそれまでの考えは自己満足であったと気が付いた。それからは必死だった。ファシリテーターとして全員の理解度に細心の注意を払い、適宜通訳をし、さらに自分の意見も言う。時間が無いのに皆が集中しない時は、Female Nazi と呼ばれるほど厳しい態度も取った。喉を酷使し続けて迎えたファイナルフォーラム。声はガラガラだったが、立派なスライドも完成し、10分間のプレゼンテーションに8人の精一杯の頑張りを詰め込むことが出来たと思っている。全員の満足する物を形にするためとはいえ、私が議論を仕切ったのも結局は自分勝手な振る舞いだったのかもしれない。それを許してくれた分科会の皆にお礼を言いたい。

“JASC is a life changing experience.” と良く言われるが、私にとってアメリカで過ごした夏の1カ月は、自分の弱み・強み、長所・短所を知るきっかけであり、新たなスタート地点だと考えている。周りから強く薦められ、来年度の実行委員をすることになった。なんとなく惹かれていた日米学生会議だが、不思議なご縁があるのかもしれない。謙虚な気持ちを忘れずに、1年間精一杯取り組みたい。

米本　大河

“Life Changing Experience” この言葉は実行委員が選考過程から春合宿、さらには渡米前の直前合宿まで一貫して口にしていた言葉です。「日米学生会議（以下、JASC）を通してきっと人生変わるよ!!」一見大げさに聞こえますが、私はこの言葉に全くの疑いを感じませんでした。なぜなら、JASCの持つ約70年という歴史の重みや初めて訪れる本会議開催地アメリカ、一ヶ月間の共同生活、英語でのディスカッションなど、どれをとってもエキサイティングな初体験だったからです。しかし事前活動や本会議を通じて気付いたことは、“Life Changing Experience” とはこういったことから生まれるのではないということです。「人生が変わる」とは、JASCを通して出会う仲間が自分に与える「思考の変化」なのです。私の思考が、春合宿から本会議終了までの4ヶ月間で明らかに変わっていくのがわかりました。出会った仲間は、誰もが個性的で、博学多才、かつ努力や考察を怠らない優秀すぎるほどのメンバー達でした。JASCでは普段絶対にできないような様々な貴重な体験をします。しかしそれら体験が他の仲間にはどう見えているのか、自分とどういった点が異なるのか、語り合い、共有する中で自分の価値観との対話をしました。しかし、そんな優秀すぎるメンバー達と自分を常に比較するがゆえに、しばしば自分を見失うことがありました。自分はこのメンバーに何が還元できるか、70人の中で自分にしかないものとは何なのか、悩む日々が続きました。しかし、悩む場所には必ず改善点とチャンスがあります。私は本会議を通じてそういったチャンスをいかせた部分と、残念ながら改善できなかった部分がありました。しかしながら、それに気付けたのはJASCというすばらしい環境と仲間との出会いがあったからに他なりません。それゆえ、会議が終了し、仲間と遠く離れてしまった今、再び出会う時までにそれらを乗り越えることこそ、彼らに対する恩返しだと考えています。私にとって人生は変わり始めたばかりです。彼らの面影を胸に常に努力をし続けたいと思っています。そしてこれこそが私にとっての「Life Changing Experience=思考の変化」なのです。最後に、この場通して、

会議を通じて出会えた仲間達と、本会議をご支援いただいた方々、そして私をこの素晴らしき第62回日米学生会議のメンバーとして採用していただき、誰よりも尊敬してやまない実行委員の８名に心からの感謝の気持ちを表したいと思います。本当にありがとうございました、そして次回会う時までにもっとビッグになることを誓います‼

写真　上；ワシントンD.C.にて　下：春合宿にて日本側参加者と留学生と

お土産屋 GIFUTO SHOPPU

第6章

第63回
日米学生会議概要

第63回日米学生会議概要

【第63回日米学生会議テーマ】

知ることから創ることへ　～対話と挑戦から共に描く未来～
-Question, Engage, Build: Collaborative Effort to Make a Difference-

日本では近年、若者が「受身」になってきている現状が危惧されている。日本人の海外留学生の数は、10年前のわずか3分の2に減り、若い世代の興味が外から内へと推移していることが明らかである。しかし、日本と他国の相互依存関係はますます深まり、言語、文化、生活習慣等が異なる社会で、確固たる自分を持ち、グローバルに活躍できる人材が求められている。こうした中、我々学生が担っていくべき役割とは何なのであろうか。日米学生会議は日米両国から志の高い学生を集め、1ヵ月という時間をかけて自らの役割を模索し、その実現に向けて第一歩を踏み出すことを目指した会議である。

第二次世界大戦終結から65年、日米の役割は安全保障問題や経済問題など多方面で世界における重要性を増している。自衛隊と米軍との連携の強化はアジア諸国からも大きな注目を集め、またTPPやFTAの締結により日本が市場開放を図り、他国との経済連携を推進することが期待されている。しかし、沖縄の米軍基地移設問題や、自由貿易化の流れの中でいかに国内産業を強化し、日本経済を再生するかなど課題も多い。

そのような中開催される第63回日米学生会議では、歴史から学べる点をどのように未来に活かすのかということに重点を置く。過去を振り返り反省することも大切だが、最大の課題はその反省をどのように今日の課題に活かし、新たな未来を創っていくのかである。参加者は本会議の事前活動を通し知識を深め、背負う肩書きがない学生同士、心をさらけ出して議論をする。価値観の対立や言葉の壁に挑戦しながら、自分自身の考えを整理し、我々を取り巻く多様な問題に対する解決策を学生の視点で協議することができる。また、本会議を終えても引き続き海を越えた仲間とどのように変革を起こし、未来を切り開くのか追求していく。議論の中での対立を乗り越え、自分の意見を「自分たち」の意見へと再構築できたとき、また、仲間を思いやることを通して自分を見つめ直すとき、参加者は自らの成長を実感することができる。短時間では解決できない問題が混在する今日、我々学生が両国の一翼を担い、切磋琢磨しながら将来を見据えた腹蔵ない対話をする意義は大きいと確信している。この会議を通し、参加者一人一人が様々な衝撃を受け、好奇心と向上心を持って常に挑戦し続ける者となることを期待している。

【主催】

財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第63回日米学生会議実行委員会

【開催期間】

2011年7月28日～2011年8月21日

【開催地】

第1開催地　≪新潟県≫
第2開催地　≪京都府・滋賀県≫
第3開催地　≪沖縄県≫
第4開催地　≪東京都≫

【会議の過程】

第62回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側主催団体の財団法人国際教育振興会、米国側のInternational Student Conferences(ISC) ,Incの支援の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者決定後、各参加者は所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、5～7月の期間には、自主的に講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月に渡って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、自ら提案した議題について議論するスペシャルトピック、様々な文化体験、そして最後に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に分かれ、第63回日米学生会議として学生だからこそ可能である「心の対話」を行い、国境を越えた相互理解を推進したい。また、フィールドトリップでは、アカデミックな知識を得るのみならず、各地の文化に触れる活動を行うなど、各自の視野を広げ、討論と対話の充実を図る。さらに、学生同士の討論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。本会議終了後には、参加者は会議において得られたもの、そして1ヵ月の結果を、報告書また報告会という形で外部へ発信する。会議で得られた成果が長期的に社会貢献、社会還元されることを期待している。

【本会議におけるプログラム】

«分科会»

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生（実行委員1名を含む）が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第63回会議における分科会は以下の通りである。

(1) Security; Strengthening Ties Between Nations Throughout Comprehensive security
　：安全保障と日米
(2) Ethics of Technology
　：科学・技術の発展と倫理の再考
(3) Continuity and Change in a Globalizing World
　：グローバル化と世界システム
(4) Media in Shaping Social Preconceptions
　：変わりゆく社会とメディア
(5) Cultures and the Environment; Micro Approaches towards a Global Issue
　：文化と環境問題～解決への第一歩～
(6) Interpretations of History in International Relations
　：歴史認識問題と国際関係
(7) Minorities in Modern Society
　：差別から考える平等

« Site Research & Reflection »

各開催地におけるSite Themeに基づき、参加者は開催地ごとに4つのリサーチグループを作る。リサーチグループは事前活動として歴史、文化、社会などのリサーチを行う。本会議では、開催地到着の初めに、リサーチの結果につきプレゼンテーションを行い、開催地に対する知識を全員と共有することで、Site Themeに対する問題意識を深める一助とする。開催地出発の前日には、Site Themeを中心とし、参加者の学んだことについて共有する機会を設ける。

« Field Trip »

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、議論のた

めに必要となる多様な視点を得るための重要な活動となる。

≪Special Topics≫

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

≪Conference Wide Discussion≫

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議アラムナイや専門家の方々をゲストスピーカーとして招き、第63回日米学生会議テーマ、各開催地のサイトテーマに基づいたディスカッションを行う。これにより、参加者の見識を広め、新たな課題や視点を発見することを目的としている。

≪Conference Wide Reflection≫

参加者が一同に集い、1ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

≪Forum≫

第63回の各開催地のSite Themeに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交えたパネルディスカッションなど、参加者がアカデミックな経験をすることを目的とする。

≪Final Forum≫

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、1ヵ月の総まとめを行う。主として1ヵ月間を通しての分科会ごとの成果の発表を行い、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者の方々と共有することによって、第63回日米学生会議において得られた、学生達の成果や発見を社会に発信する。

第７章

日米学生会議にご協力いただいた方々

第62回日米学生会議　ご協力いただいた方々（敬称略・順不同）

【主催および後援団体協力者】

財団法人 国際教育振興会

理事長　大井　孝
参与　稲田　脩
事務局　後藤　明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長　高円宮妃殿下
会長　南原　晃
事務局長　伊部　正信
事務局　好中　由起恵

International Student Conferences, Inc

理事長　Stephen C. Moss
事務理事　Sarah Thompson
事務局　Michelle Lee Jones

外務省

広報文化交流部部長　門司　健次郎
人物交流室長　丸山　市郎
人物交流室　伊藤　千恵子

文部科学省

国際統括官　木曽　功
大臣官房 国際課 課長　芝田　政之
大臣官房 国際課 総務係長　荒井　忠行

米国大使館

広報・文化交流部 文化プログラム担当官
ケビン・オルブリッシュ
広報・文化交流部 レファレンス資料室 室長
笠　優子

社団法人 日米協会

会長　大河原　良雄
専務理事　渡辺　隆

日米文化センター

日本代表　伊部　正信

【広報活動】

浅原　純　同志社大学大学院　アメリカ研究科・アメリカ研究所 係長
猪口　邦子　自由民主党 参議院議員
青山　佳世　立命館大学 教育開発推進機構 教学部 教育開発支援課
五十嵐　千恵子　筑波大学 国際部国際企画課国際企画係
亀田　尚己　同志社大学 商学部・商学研究科 教授
竹花　安子　立命館大学 国際部 衣笠国際教育課
田中　文恵　同志社大学 大学院アメリカ研究科・アメリカ研究所 事務長
中西　寛　京都大学大学院 法学研究科 教授
濱崎　祐之　京都外国語大学 企画広報室
勝　悦子　明治大学 副学長
篠田　正志　明治大学 国際連携部国際連携事務室
菊池　端夫　明治大学 経営学部公共経営学科
斎藤　卓也　㈱ダイヤモンド社 事業開発局 出版編集部 メンターダイヤモンド
安永　修章　日米研究インスティテュート
若松　智明　日米研究インスティテュート
五所　恵実子　東京大学 理学部国際交流室
西元　宏治　専修大学 法学部 准教授
井伊　雅子　一橋大学 国際・公共政策大学院 教授
山脇　啓造　明治大学 国際日本学部 教授
神崎　高明　関西学院大学 経済学部 教授
武田　興欣　青山学院大学 国際関係学部准教授
和田　幹彦　法政大学 法学部 教授
児玉　克哉　三重大学 人文学部 教授
中邑　啓子　国際基督教大学・東京大学 研究員
岩月　直樹　立教大学 法学部 准教授
秋田　次郎　東北大学 経済学部 教授
村田　晃嗣　同志社大学 法学部 教授
中山　俊宏　津田塾大学 国際関係学科 准教授
水村　敏彦　㈱サイブリッジ インターネットメディアグループ
澤田　哲生　東京工業大学 原子炉工学研究所 エネルギー工学部門 助教授

井上　伸子　東京都国際交流委員会 国際交流・協力情報コーナー
藤巻裕之　東海大学 国際教育センター
旦　祐介　東海大学 教養学部
中村真伊　東海大学 国際教育課

【選考活動】
浅原　純　同志社大学大学院 アメリカ研究科・アメリカ研究所 係長
鈴木　吉徳　京都大学 教育推進部 経理・施設管理グループ 主任
田中　翔　京都わかもの１００人委員会 実行委員長
田中　文恵　同志社大学 大学院アメリカ研究科・アメリカ研究所 事務長
金谷　憲　東京学芸大学 英語科教育学研究室 教授
金井　隆　㈱三菱東京 UFJ 銀行 企画部主計室 調査役
廣田　良平　UBS 証券㈱ 投資銀行本部 ディレクター
田辺　和子　日本女子大学 文学部日本文学科 准教授
大谷　立美　創価女子短期大学 英語コミュニケーション学科 学科長
竹本　秀人　日米学生会議同窓会
谷口　隆史　日米学生会議同窓会
高橋　和夫　放送大学
井伊　雅子　一橋大学 国際・公共政策大学院
木ノ上　高章　東海大学 医学部

【春合宿】
井上　敏之　英語ディベート トレーナー
各大学留学生の皆様

【防衛大学校研修】
五百旗頭　真　防衛大学校 学校長
先崎　忠良　防衛大学校 総務部総務課社会連携推進室 広報専門官

【関西での事前活動】
井上　敏之　英語ディベート トレーナー
柴山　太　関西学院大学
森田　正英

【沖縄研修】
知念　征尚　琉球新報社 編集局社会部 記者
大島　和典　沖縄平和ネットワーク ガイド
比嘉　利尚　名護市役所 名護市基地対策室
山川　優　沖縄県庁 県知事公室基地対策課
仲吉　朝尚　沖縄県庁 県知事公室返還問題対策課
佐藤　学　沖縄国際大学 法学部 地域行政学科教授
島袋　純　琉球大学 教育学部政治学 助教授
屋良　朝博　沖縄タイムズ 記者
安里　周悟　琉球新報社 記者
浦崎　綾　在日・沖米海兵隊基地 外交政策部 渉外官
島袋　由乃　ゆいバス
袴田　たかし　Ernst & Young
安田　麻紀　ＮＨＫ沖縄放送局 記者
山本　東生　Youth Forum Japan 代表理事

【交通関係】
古賀　敬章　民主党 衆議院議員
佐藤　欣一　衆議院議員 古賀敬章事務所
片野坂　真哉　全日空商事㈱ 取締役執行役員 営業推進本部長
田村　玲子　U.S.-Japan Links

【日米学生会議同窓会協力者】
山室　勇臣　橋本　徹　中瀬　正一
山田　勝　岩崎　洋一郎　伊丹　吉彦
小林　規威　降旗　健人　天野　順一
辻　喜久子　グレン・S・フクシマ
冨川　秀二　山本　東生　大高　巽
竹本　秀人　今井　義典　梅崎　渉
和田　昭穂　橋・フクシマ・咲江
竹内　幸美　西田　尚弘　福谷　尚久

木ノ上　高章　大塚　雄三　林　友美
乗竹　亮治　飯田　智紀　古澤　昭子
金井　隆　宮崎　久　山田　良子
細野　恭平
第60、61回日米学生会議実行委員会／参加者一同

【各分科会活動事前活動】

■学生と社会参画

林　大介　模擬選挙推進ネットワーク 事務局長
原田　謙介　学生団体 ivote 代表
小野　有美　TRYF アカウント・プランナー
佐本　佳昭　TRYF アカウント・プランナー
西　浦明　財団法人 大学コンソーシアム京都 事務局長
重田　裕之　財団法人 大学コンソーシアム京都 事務局次長
山本　尚広　財団法人 大学コンソーシアム京都 主幹
佐藤　志保　明治学院大学ボランティアセンター

■21世紀における日米の教育

小村　俊平　ベネッセコーポレーション 高校事業部 新商品開発化 企業連携プログラム プロデューサー
田村　哲夫　渋谷教育学園 理事長
能見　駿一郎　文化庁 長官官房政策課 政策調整係長
古田　雄一　わかもの科・東京大学 教育学部 教育行政学コース
佐々木　雅一　ESD 事務局長

■安全保障と日米

孫崎　享　元外務省国際情報局長 元防衛大学校教授
納家　政嗣　青山学院大学 国際政治経済学部 教授
伊勢崎　賢治　東京外国語大学 総合国際学研究院 教授
五百旗頭　真　防衛大学校 学校長
段　瑞聡　慶應義塾大学商学部准教授

■社会起業家

市川　裕康　ソーシャルカンパニー代表 ネットスクエアード東京代表
伊東　美穂　㈱電通 ソーシャルプラニング局 ソーシャルコミュニケーション開発室 CSR ビジョン開発部長
赤羽　誠　㈱電通 ソーシャルプラニング局 プロジェクトマネージャー
並木　義巳　㈱電通 ソーシャルプラニング局 ソーシャルプラニング局次長兼 プロジェクト推進室長
土井　香苗　ヒューマンライツウォッチジャパン代表

■新興国と地球環境問題

吉野　次郎　㈱電通 第8営業局
金　大鐘　㈱電通 スポーツ局 サッカー事業部
飯沼　瑶子　㈱電通 第6営業局

■地域再生 ～都市、農村が生き残るために～

片山　善博　総務大臣
小田切　徳美　明治大学 農学部食料環境政策学科 地域ガバナンス論研究室 教授
市村　良三　小布施町役場 町長
内坂　徹　小布施町新生病院 元院長
色平　哲郎　JA 長野厚生連・佐久総合病院 地域医療部 地域ケア科 医師
和泉　洋人　内閣官房 地域活性化統合事務局 事務局長
坂本　成次　内閣官房 地域活性化統合事務局 参事官補佐
渡邊　一之　内閣官房 地域活性化統合事務局

■国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ

山本　眞吾　靖国神社 遊就館 部長

ラクパ・ツォコ　ダライ・ラマ法王 日本代表部事務所
「ハムケ共に」の皆様
キム・ウンチョル
朝鮮大学校

【賛助団体・企業、賛助者】
独立行政法人 国際交流基金
財団法人 双日国際交流財団
財団法人 平和中島財団
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
財団法人 KDDI 財団
社団法人 日米協会

アサヒビール㈱
㈱オリエンタルランド
キッコーマン㈱
㈱三和
新日本製鐵㈱
セコム㈱
㈱セブン＆アイ・ホールディングス
禅林寺
大成建設㈱
㈱竹中工務店
㈱電通
東京海上日動火災保険㈱
東京ガス㈱
東京電力㈱
トヨタ自動車㈱
中辻産業㈱
日産自動車㈱
日本アイ・ビー・エム㈱
日本生命保険相互会社
野村ホールディングス㈱
パナソニック㈱
㈱日立製作所
富士ゼロックス㈱
富士通㈱
三井不動産㈱
三井物産㈱
三菱地所㈱
三菱重工業㈱
三菱商事㈱
㈱三菱東京 UFJ 銀行
三菱 UFJ リース㈱
メリックス㈱
メルシャン㈱

橘・フクシマ・咲江
堤　清二
冨川　秀二
南原　晃
西田　尚弘
橋本　徹
平竹　雅人
山田　勝
和田　昭穂

伊藤忠商事㈱
オタフクソース㈱
協和発酵キリン㈱
住友商事㈱
ヴィジョネア㈱
エクソンモービル有限会社
全日空商事㈱
高井　裕之

編集後記

編集中何度も原稿に目を通すたびに参加者それぞれの声や本会議の行程についじっくり見入ってしまった。時間が経てば色あせてしまう思い出や当時考えていたことを文字にして残したこの報告書は、お世話になった方々へのご報告であると同時に、我々参加者にとっては、記憶をつなぎとめる重要な一冊になるだろう。現在、第63回日米学生会議に向けて新実行委員が必死に準備している中、この報告書を完成させることで私の実行委員としての任を終えることになると思うと、少し寂しくもあり、達成感のようなものもある。この感情は、全ての実行委員、参加者の協力で最後にひとつのものを創り上げた達成感であろう。この場を借りて、協力いただいた多くの方々にお礼を言いたい。

最後に、これまでに日米学生会議をご支援いただいたすべての方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。皆様にこの報告書をご一読いただき、日米学生会議へのご理解を深めていただければ幸いです。この報告書が、日米学生会議と支援者の皆様、そして未来の日米学生会議の参加者を結びつけるきっかけとなるような一冊になることを祈りながら、62冊目の報告書を世に送り出します。

第62回日米学生会議実行委員　高田 修太

2010年12月末日

第62回日米学生会議実行委員

発行

財団法人国際教育振興会

企画・編集

第62回日米学生会議実行委員会

〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷1-21

http://www.jasc-japan.com

Four Seas Restaura
四 海 酒 樓

Japan-America Student Conference
Since 1934

主　　催　　財団法人国際教育振興会

企画・運営　　第62回日米学生会議実行委員会